汀とあの娘のイチャコラ物語

grand病原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
汀とあの娘のイチャコラ物語

【Ｎコード】
Ｎ３６８５Ｙ

【作者名】
ｇｒａｎｄ病原

【あらすじ】
・本作品は“ネギま”二次創作である。

・女の子オリ主がチートで安心である。

・ガールズラブでイチャコラである。

・イチャコラで性行為を彷彿させる描写があるかもだけど、Ｒ１５の範疇である。

・捏造、ブレイク、ドンと来いである。

・何気に辛辣で残酷も含む作品である。

・だらだらぐだぐだストーリーである。

・こんな感じのハチャメチャ小説をお気軽に寛容にお楽しみください。

ね、寛容にね。

第1話　プロローグはおまかせします（前書き）

皆さんはじめまして。
ｇｒａｎｄ病原と申します。

初執筆の初投稿ですよー。

あとがきの方に、おしらせってかご注意がありますので、そちらご覧ください。
作者の執筆スタンスとかで長くなってるけど、トラブル回避の為にも是非。

では“ネギま”世界を舞台に、女オリ主のだらだらぐだぐだ安心チート物語。

はーじまーるよー

ね、寛容にね。

第1話　プロローグはおまかせします

あ、プロローグ的なんやかんやってアレですよね？
脳内補完とかドンと来いですよね？

そんな訳で転生です。
ワタシこと《緒々嶋　汀》は転生ガールです。

ちなみに言っとくと《オオシマ　トバリ》ですよ。

特にね、名前。
汀ートバリーってのなかなか覚えてもらえないですから、そこんトコお願いしますね。

普通はナギサですからねぇ。

こう言ったらなんですけど、苗字は転生後の家族からいただいたものなんであんまし気にしない。

でも汀って名前は前世から通しで使ってますので、是非覚えて欲しいですね。

そんなこんなでこれから転生ガール汀の生活をご紹介してきますよ～。
寄ってけ見てけ聞いていけ。

まぁアレです、だらだらぐだぐだ安心チート物語ですけどね。

あとＧＬイチャコラ。

がーるずらぶんイチャコラ。

で、相手次第で辛辣に。

…みんなついて来れるよね？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ソレは気だるい朝、クーラーが一晩中吐き出し続けた人工的な空気のなか、ワタシの寝ぼけ眼が写しているのは一人の美少女。

艶やかな髪、もちもち赤ちゃん肌、ちょっぴり小柄だけどバランスとメリハリに富んだ体躯。

今は寝ぼけてうにゅってるけど、普段の顔立ちは、そりゃもう分かりやすいくらいの美少女。

おねむでショボショボしてる仕草だってむしろ愛らしい。

こうして毎日二人で同じベットで眠って、でもいつだってワタシが先に起きる。

彼女が完全に眼を覚ますまで、ワタシはいつもこの姿を堪能する。

あーホントに美少女。

アレだよ可愛い系美少女（ちょいロリ）。

特別な努力もせずにコレって最早選ばれた存在だよ。

美の神的な何かに選ばれｔ…

〈スパーン！！〉

「おはよう汀、相変わらず美少女だな。ん？満足したか？ナル娘め」

「……おはようございますキティ。ｙｏｕもとっても美少女ですよ超好み」

寝室の鏡に写った朝一番ワタシに見惚れるナルシスワタシを、スリッパでぶったたく愛しのキティ。

コレがワタシの、ワタシ達の毎朝。

緒々嶋汀とエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルの毎朝。

「今日は早いねキティ、昨夜は足りませんでしたかな？」

「……寝起きで突っ込む気にもならん」

「だよねー、ちゃんと気絶したもんね！！」

「……いい、とりあえずシャワー行くぞ。矯正はその後だ」

「いや矯正って…」

スタスタとだるそうにシャワーへ向かう全裸の金髪美幼女キティちゃん。

まてよーおいてくなよー。

追う全裸の美少女汀ちゃん。

こうして今日もワタシ達の日常は始まります。

今日も夏真っ盛り。

やべーしゅくだいちょーだるい。

中学2年の夏休みはまだまだ始まったばかりです。

2人して3度目のちゅうがくせいだけどね！！

第1話　プロローグはおまかせします（後書き）

★初投稿なおしらせ★

―その？―

ｇｒａｎｄ病原は初心者です。

行き当たりばったり、出たとこ勝負ですががんばって行きます。

そんな本作品をご覧の皆さんより、感想等頂けましたなら、ソレを糧にしてより一層精進してゆくつもりです。

ただ…返信は期待しないでください。

てか無いものと思ってください。

ぶっちゃけＭＭＯＲＰＧとか、見知らぬ人とのやり取りにビビって敬遠しちゃってるくらいなのです。

だから感想に返信とか無理。

でもちゃんと読むからね？

キチンと読んで、今後の糧にしますから。

返信は無理でも最低限ソコはがんばりますから。

コレを予めご理解のうえでお願いします。

ね、寛容にね？

―その？―

ｇｒａｎｄ病原は基本的に通勤時間を利用して執筆しております。

携帯でめるめるです。

ですので電車の混みっぷりと言うか、位置取りと言うか、その辺の事情が執筆速度にダイレクトアタックです。

ね、寛容にね。

―その？―
前書きは基本書きません。
面倒だし。
そんな時間は本編の執筆に使いますね。
おしらせはあとがきにて。
皆さんより質問等いただいた場合も、返事が出来たなら、あとがきを利用します。
……うん、きっと。

こんな感じのｇｒａｎｄ病原です。
本編の内容と共に、執筆スタンスもどうぞご理解のうえでご利用ください。

ね、寛容にね

第2話　ひとり（？）たりない！？　＊

日本の夏、きんちょーの夏、麻帆良の夏。
真面目緊張中の汀です。

あ、覚えてくれました？
汀ートバリーですよ？

緒々嶋汀、転生美少女です。
ナルシス自画自賛てへり☆

そんなワタシが先に申しました通り、マジ緊張の一瞬です。

マジカルフィジカル！！
身体の不思議！！

ボケてるよゆーもありません。
ボケたけど。

ワタシは！！
今！！

茶々丸ちゃんと千雨ちゃんの拵えた朝食を配膳中なのです！！

や、ほんきほんき。

まじでぇびびってますぅ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「「いただきまーす」」」」

いぇーい、いきなり登場キャラ４人!!

「ふむ、今朝はどちらが作ったんだ?」

まずは我が愛しのキティちゃん。
エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
Ａ・Ｋの部分はアタナシア・キティ。
彼女をキティと呼ぶのはワタシだけの権利です。
永遠美幼女吸血鬼。
愛しの奥さんですね。

「はいマスター、今朝は千雨さんが」

キティちゃん直属従者の茶々丸ちゃん。
絡繰茶々丸ーカラクリ　チャチャマルー。
ガイドノイド?だって。
つまり心は乙女、身体は鋼の美少女万能従者。
キティがマスターで、ワタシがロードですと。
まぁ製作に調子乗っちゃった影響ですかね?

「いや、絡繰と合同だよ。一人じゃとてもこの時間じゃ無理だ」

で、ワタシの直属従者千雨ちゃん。
緒々嶋千雨ー オオシマ　チサメー。
まだまだ駆け出しの美少女従者ちゃん。
ファミリーネームがワタシと一緒なのはワケアリです。
詳しくはそのうちに。
当然血縁関係なし。
でももっと大切なモノで繋がってます。

「仲良きコトはふつくしひ、だね。うまうま」

それからワタシこと汀。
ご存知の緒々嶋汀。
キティの恋人で、千雨ちゃんの主で、茶々丸ちゃんのロード。
チートな転生美少女です。

この四人で麻帆良学園都市内、緒々嶋・マクダウェル宅よりお届けします。
もぐもぐ。
「あー言われたくねぇ、従者ハブって朝風呂入るような番主様には言われたくねぇ」

おや千雨ちゃんてば拗ねてんのかね？

「おや千雨ちゃんてば拗ねてんのかね？」

「マイロード、思考がだだもれですよ。あ、マスターお醤油使いすぎです」

おう、しっと！！
ダブル主がダブル注意されちゃったよ。
茶々丸ちゃんてばもう我が家のママさんだよね。

「「むぅ」」

ほら主コンビは返事もお揃いです。

「ちっ」

「ふふふ」

従者コンビはキャラ分けしっかりですな。
や、主コンビも全然似てないけど。

「午前中は麻帆良を巡回よてーだから、千雨ちゃん拗ねないでいいよ？」

まず間違いなくキティはお家でゲームでしょう。
８月はキティってばホントにヒッキーになるからね。
ゲームとか裁縫用品とか、ヒッキーアイテム買い込んでクーラーガンガンですもの。

「くっ…／／／。き、きちんと埋め合わせしろよ、せっかくなら…」

うわ、うわ～！！
照れりこ千雨ちゃんマジ可愛い！！
おみおつけ持ってなかったら抱き締めてたよ！！
ずずぅ…美味い。

「なんだこの暑いなか買い物か？ほら窓の外見てみろ陽炎見えるぞ」

「いえマスターよく見て下さい。風で立ち木がそよいでいるだけです。こんな山間で陽炎は見えないでしょう」

うん我が家は森の中ですものね。
路面は土ですし。
まぁ暑いのは夏だし仕方ない、風があるだけましかね？
若干照れたキティも可愛いから、ちょいちょいスリ寄りつつ観測。
今朝も太陽元気です。
勘弁しろ。

「と、とにかく暑過ぎるのは明白だ！！私は行かないぞ！！土産はアイスでいい！！」

「アイスか、いいな。コレだけ暑いならどっかにキャンペーンでもやってる店くらいあるだろ」

キティの照れのおかげで千雨ちゃんがすっかり平常運行に。
てか、ワクワクしてますね？
一気にご機嫌さん。
ワタシもワクワク、だって千雨とデートだもの。

「では後片付けは私が。御二人は気温の上がりきる前に」

「ん、いいのか？準備だって…」

「はい。千雨さんはマイロードのお手伝いをお願いします」

おー従者な会話だね。

と、食器が空っぽになったので空いた手をキティと繋ぐ。
モチロン恋人繋ぎですよ。
今朝も美味しいご飯で幸せ。
隣にキティがいて幸せ。

「ごちそうさまー。美味しかったよ二人とも。ね、キティ？」

「うむ、ごちそうさま。茶々丸、千雨美味かったぞ」

2人で笑顔。
じゃないやキティのは…まぁ満足顔？
2人きりのトキは彼女もとろけるような笑顔を見せてくれますが、
今はまぁね。
あ、でも繋いだ手キュッてしたら、コッチ向いて微笑んでくれた！！
らぶ～！！

「よし、じゃあ下げるだけやるから後頼む絡繰。エヴァはアイスティーでいいか？」

「む？あぁ、いやいい。茶々丸にやらせろ。おまえは汀と着替えて来い。」

「ん、わかった。ほらいつまでもイチャついてるなよ汀。服選ぶぞ。」

ありゃ、ワタシがキティの肩にスリスリしてる間に役割が決まったみたい。
ん～キティ柔らか～。
って、あぁ千雨ちゃんひっぱんないでぇ～。

「アイス忘れるなよ。2、3日分買い込んで来てくれ」

なんて言うキティを残して千雨ちゃんとひっぱられワタシはドレスルームにフェードアウトしたのでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あっ!?ちょっ!?なに!?
待って千雨ちゃん!!
へ?キスマークの上書きって!?

…んんっ!?

千雨ちゃんとワタシはドレスルームにフェードアウトしたのでした。

第2話　ひとり（？）たりない！？　＊（後書き）

＊本編の誤字修正しました。最後に一文追加しました。ご指摘感謝です＊

緊張の第2話です。

とりあえず汀の詳しいのとか、キャラの立ち位置とか徐々に出てきますので気長にお付き合い下さい。

本作品の茶々丸は稼働してから1年半くらい。
千雨は魔法関係者になって2年くらいになります。

その辺の経緯とかも徐々に、です。

あ、モチロン汀も魔法を使えますよ。
次話くらいで多分さらっと使い始めます。

［今回のふぉろー的いいわけ］
・汀が冒頭で配膳していたのはノリです。シャワー出たら朝食出来てたからノリで強引に配膳。

・緊張云々は汀が料理からきしだからです。ノリと気分で生きる汀に格式や形式、レシピや説明書は天敵。まぁやる気もないけど。

でわまた次のおはなしで。ｇｒａｎｄ病原でした

第3話　コレがイチャコラです

あっつっ！！
外暑いっ！！
風とかイミねー…

だめだ、コレ溶けるよ。
ワタシは溶けてしまいます。
あいるびーばっく汀。

残念ながら未来からは来てないけれどチート美少女の緒々嶋（オオシマトバリ）　汀ですよ。
そろそろ覚えました？
次からはルビありませんからね。

いつもと同じく千雨コーデ、髪も結い上げて朝よりもっと美少女汀だけどコレは…
繋いだオテテも汗でしっとり、ちょっぴりドキドキ千雨とデート。
しかしこの暑さは…

でも顔には汗をかきません！！
女はいつだって女優だから☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なあ汀、お前なんにもしてないんだよな？」

麻帆良学園都市の夏は今年も暑い。
突き刺す紫外線に、千雨ちゃんもたじたじみたいです。
まぁワタシ達の肌を相手取るには、紫外線程度じゃなすすべなどないからこその外デートですけどね。

「なにって、にゃほぅ的なアレコレ？ないないしてないよー。だってほら、夏特有のペッタリお肌でくっつくのが外デートの醍醐味でしょ」

ほらほら醍醐味！！と、手はそのまま離さずに腕を寄せ合う、しっとり。
千雨ちゃんのが背が高いから、見上げて目を合わせる。
ウチではエヴァが1番ちんまいくて、次がワタシ。
丁度エヴァと千雨ちゃんの間くらいのワタシの背丈。
だからいつも千雨ちゃんが屈んでくれる。

「……んっ」

そうしないとキスが届かないんです。

今お外だし、ふれ合うだけのやさしいちゅーで留めておきます。
リップの色も違うし。

って、千雨ちゃん？
なんで頬に添えた手をナデナデしてるんですか？
ちょいくすぐったいぞー。

「…やっぱりだ」

「えっと何が？お外だしちゃんと我慢してるよ？」

えーと…
千雨ちゃん盛り上がっちゃったんですか？

「改めて聞くが、汗はかいてるんだよな？」

「え？もちろん。今朝の千雨ちゃんチョイスは、汗ばむ野外でもばっちりこーででしょう？」

家を出て３０分強。
ここまで歩いてゆっくり来たけど、ばっちり汗かいてますよ。
えぇホントに暑い、明らかに体温より気温が高い。いじょーきしょー…

「そうか…じゃあお前の顔に汗のあの字も見当たらないのはアレか、汗クオリティか…。汗と汗、字面も似てるしな、自由自在だとでも！？」

アレ？冷気！？
あぁ千雨ちゃんがどんよりしてる！？

「えと……ヘイヘイお待ちよ千雨ちゃん！！コレはアレだよ意識の成す業だよ！！千雨ちゃんも出来るよ！！……たぶん」

うん、たぶん。
ワタシの従者だし。

やってやれないコトは無いよ。
うん、たぶん。

「は？意識って？無詠唱みたいなのか？」

「いえ違います。ホンマもんのメンタルです。こうね、私は女優！！って意識するのよ。言うなれば“ガラス〇仮面”みたいに」

てか千雨ちゃんてば思考がすっかり魔法寄り。

まぁ教え込んだのワタシ達ですけどね。

「……無理だろ」

「いやいやいいや。そこはほら女の意地よ。淑女として持ち前の美貌に胡座をかいてなんかいられませんもの」

“淑女として～胡座”って我ながら違和感。
ここはアレかな“淑女として～三つ指ついてはいられない”と言い直すべきかなぁ？

「ｓｙ「いやいやいいや、コッチがいやいやいいや、だ。お前服選びも人任せ、メイクも髪も人任せじゃねぇか。胡座どころか布団敷いて高いびきだろ」

しょぼーん…
言い直せなかったです…

「…って、え!?ワタシいびきしてる!?嘘っ!?」

うわーマジで！？
毎夜毎晩キティも千雨も茶々丸もワタシのいびきを黙殺してくれてたの！？
うっわぁ…
今すぐいびきを消さないと！！

「あぁいや、すまん言葉の綾だ。少なくとも私以外はいびきなんてしてない。お前もエヴァも高級人形みたく寝てるよ。可愛さが欠片も衰えてなくてコッチが大変だ」

…っ！！

千雨ちゃん抱いてください！！

…いけないいけない踵を返してしまう前に発散しなければ。
ぎゅーで当座を凌ごう。
しっとりぎゅー。
千雨ちゃんらぶー。

あ、もちろん千雨ちゃんもいびきなんかしてませんよ。
きゅってすると、やさしく抱き返してくれます。
眠ってるのにね。
千雨ちゃん素敵すぎるよ。

屋内でも屋外でもイチャコラに歯止めはありませんとも！！
ワタシと千雨ちゃんはＡＩとか止まりませんとも！！

夏でもいいじょーきしょーでもウチの方があつあつですね！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ついでに言えば麻帆良の夏も熱い。

いやいやくだらないとか言わないで。
確かにワタシ達のがずっとあつあつですけれど。
麻帆良も大概ですよ。

ホントにそこかしこでイベントなり事件なり起きてるんですよね。
まぁ普段も常識外の半無法地区ですけど。

やっぱし夏休みだからですよねー。
みんなテンションがひどいなぁ。
あちこちでドッカン、そちこちでイミフ。

あ、ほら“夏期小売り”だって、千雨ちゃんあれ何を売ってるのかな!?
しゃくしゃくキーンは売ってないの確かだよね!!
ねぇ行ってみません?
キティに買って帰ってみる?
…って、あぁ～。
小売りが遠ざかる～。
歩く!!歩きますから!!
スカート引っ張んないで、千雨ちゃんてばぁ～。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ワタシと千雨ちゃんが手を繋いで歩いていればそりゃあ目立つってものです。

ウチに来てからの千雨ちゃんは、俯かないし眼鏡も掛けてもいません。

眼鏡は賛否両論？だとしても彼女はど真ん中美少女。

そして何度でも言うけどワタシは完全無欠美少女ですし。

そんな2人がニコニコキャッキャッ。

イチャコラワールド構築中。

腕を組むようにして歩くから、歩を進める度に汗ばんだ肌が触れ合う。

貪り合うような溶け合うようなアレをしてる時の感覚とは違うけれど、確かな高鳴が胸をあたためる。

自然と頬が緩んで、世界が素敵に染まる。

千雨もおんなじ気持ちなのが瞳を通して伝わる。

なんにもないのに目を合わせて微笑み合う。

あぁ、今日も幸せ。

「あれー！！スッゲェ美人じゃん君ら！！ねえ遊びに来てんだよね？オレ達と一緒しようよ！！」

…こんな感じのが来るまでは。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はっはっはっはっはっ」

……

「はっはっはっはっはっ」

……

「はっはっはっはっはっ」

タカミチェ…。

飛ぶ様にして来るなり、問答無用でブチノメシて笑ってんなよ…。

「ちっ…」

あ、千雨ちゃんもご機嫌ななめさん。

「一応、どーも」

「いやいや、とんでもないよ。いくら強くたって君たちが僕の生徒である事に代わりはないしね」

千雨ちゃんってば感謝の欠片もないね、わかるけど。

でもちょっと可愛いかも。

あっと、見蕩れていないでワタシも交じるかー、仕方ない。

「随分と出張るの速くないかしら？暇なの？仕事しなさいタカミチくん」

タカミチくんとは元同級の間柄。
キティも一緒です。
だからといって仲良くなんかありません
ワタシのお口もお外向け。

あぁ千雨ちゃんが掌をキュッてしてくれるのだけが癒しです。
世界よ優しくなれ、てかワタシよ優しくなれー。

「あいかわらず手厳しいな、でも今回のこれも歴とした僕の仕事さ。これでも広域指導員だからね」

知ったこっちゃありません。
なら早く広域に拡散してしまえ。

「それに忘れたとは言わせないよ。一昨年、君は一般生徒相手に僕らじゃフォロー出来ない傷を負わせたじゃないか。すっかり要注意対象だね、はっはっはっはっ」

あ、無理だ。
優しくとか無理。
ナチュラルイライラが募るわコイツ。
ちうちうもっとピタッとしてー。

「振っただけじゃない。彼ら完全にストーカーレベルだったのよ？むしろ暴徒だったわ。他にどうしろと？」

一昨年の春。

てか春。
脳内ヘリウム浮かれ男子どもが決まってワタシ達を狙う。
あれだ、告白ってやつです。

てか春どころか、なんかイベントある度にそうなんですよ。
キティと2人、繰返し学生を続けるワタシ達はなにかある度にテンション恐慌です。

てかヘビーローテンションだ。
あいうぉんちゅー、と迫る男子生徒どもにヘビーローテンションだ。

まぁ一昨年は色々ありましたし。
当時は共学の高校で3年生。
学校のアイドル扱いだったワタシ達が、夏休みを境に不登校でしたからねぇ。
なにせ従者千雨ちゃんの教育にかまけていたから。

そうしたら、マジストーカーの大量発生的な感じで。
まぁ容赦なく振りましたけどね。
卒業式もおおあらわ。

結果として今回からは女子校に入る運びとなりました。もちろんキティも一緒です。てか今回の入学からは、千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも加わって4人一緒です。
当然だよねー。
で、卒業→入学にあたって、主組が従者組に合わす事になりました。
まぁ合わすも何も予定通りでしたけどね。
あ、年齢を鑑みてだったんです。

まぁ茶々丸ちゃんは産まれてすらいなかったけれど。

千雨ちゃんがね、ワタシの従者になった時にはまだ１１だったから。
２年前の夏休み時点で。

色々あって足早に“次”を女子中等部に決め、学園側と交渉も済ませました。
４人揃って中等部入り決定です。
この段階でまだ夏休み中。

「いや確かにストーカーはダメだよね、はっはっはっはっ」

…笑ってんなよ老け顔。

そう、速攻で手続きが済んでからやっと、その過ちに気付いたのです。
この老け顔と似て非なる過ち。

がっつり仕込んだんだ、キティの魔法球で。

ほぼ入りっぱでワタシ達の従者に相応しい実力が身につくまでがっつりね。
いやぁ、がんばりました。
初めての従者だったから、気合い入れましたよー。
がっつりです、がっつり。

千雨ちゃんが通ってた初等部はスルーで、実家さえもまぁ色々でスルーで。
詳しくは千雨ちゃんの機嫌が良いトキに話しましょうね。
とにかく約８ヶ月入りっぱでした。
あ、魔法球ってのは簡単に言えばアレです。

“精神と時〇部屋”。

つまり時間が引き延ばされますよ、と。
キティ所有の魔法球では、２４倍引き延ばしですので約１９２ヶ月ですね。
なんで手続き前に気付かなかったかな…

ともかく、千雨ちゃんはマジ入りっぱだったからおおざっぱ計算１６年。
少なく見ても１５年は過ごしてます。

あ、茶々丸ちゃんは千雨ちゃん仕込み終えてから製作に入ったので全然です。
たしか…1．５ヶ月×２４倍くらいかな?
ほら茶々丸ちゃんは零からの製作ですから。知識を植え込んだ状態で起動したらおっけーなのです。

ホントになんで中等部にしたんだろ…
ノリかな、うん。

主組はいいのです。
だってもとよりそうだから。

中等部↓高等部↓中↓高↓で今3度の中。

例年通りのループですもん。クラスに馴染む馴染まないってあなた、ここ“麻帆良”にワタシ達が馴染むわけないでしょう。

こんな箱庭に。

で、茶々丸ちゃんもほぼ問題なしな様子です。
てか、ちょーしんか茶々丸は既にママ的なメンタルの持ち主だし…
ちょー包容力のママさんです。
なぜ…

もしやワタシのメンタルが幼過ぎる反面教師的な？
うん、なら仕方ない、めいっぱい甘えよー。

問題だったのが千雨ちゃんですよね。
中等部に入学する美少女、心は２６歳ですもんね。

まぁ学校にいる間はずっとワタシとピッタンコしてます。
それで大丈夫なんですって。

わるいコトしちゃったなぁ、と思う反面、一層愛しくも想う。
可愛い可愛い千雨ちゃん。

「ん、まあ気を付けて。問題起こさないでくれよ。じゃ行くからね」

あ、まだいたのか老け顔。
千雨ちゃんのコト考えてたら忘れてた。

「まだいたのね老け顔、あっちいっていいわよ。ぺぃぺぃ」

「うっ…ひどいなぁ…。ふぅ、じゃあね千雨くんも」

「…っす」

千雨ちゃんに話し掛けんな老け顔め。
去り行くソレを放っといて、千雨ちゃんをぎゅー。
はぁ落ち着く。

繰返すけれど千雨ちゃんは美少女です。
老け顔とは到底比べられない。
そう、アレと同じ魔法球をアレの何倍も使ってなお美少女のまま。

だってね。

ワタシの従者よ？

ただの人間な訳がないでしょう？

ワタシとも違う、キティとも違う。
けれど千雨ちゃんもワタシ達と同じトキをゆく。

ずっと一緒。

はぁ、抱きつくとうっとりしちゃうー

第3話　コレがイチャコラです（後書き）

第３話投稿
こんばんはｇｒａｎｄ病原です。

千雨ちゃんイチャコラ回です。
本作品なり、他作品さまなり、エヴァとオリ主が仲良くなる経緯は皆さん予想がつきますよね。
だからこその千雨プッシュです。
所々であまあまですが、汀を中心とした４名は普段からこんな感じです。
コレがイチャコラですね。
それからタカミチの登場。
エヴァ茶々より喋ってる？
彼は千雨との対比と言うか、当て馬役です。
本作品の千雨が「ザ・チサメ」でありコト。
それを違和感なくストーリーに乗せる為だけに登場しました。
まぁアンチされ側ですしね。
エヴァにも嫌われてます、原作よりもずっと。
まぁ千雨の詳細はやっぱり追々です。
因みに若返り薬とか不老指輪とかではないです。
ご期待ください。

【おしらせ】

活動報告に第２話修正について記載しました。
お暇なときにでもチェックしてあげてください。

【お礼】

感想をいただけました　七さま　。
お気に入り登録をしてくださった皆さま。
本作品をご覧いただいた皆さま。
ホントにありがとうございます。
うれしくてｇｒａｎｄ病原はもうたいへんです。
調子に乗って初日に３話目まで更新しちゃってます。
ただまぁ明日はこんなことないでしょう。
でもがんばって執筆しますよ。
また読んでくださいね。

でわでわｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第４話　彼女はもうすぐ産まれます＊

「んぅっ…っ！」

「待っ…って、あぁ！」

「んぁあ、マィ！！…ロ、ロード、これ以上わぁんっ！！」

うふふ、ども、いじめっこ汀ですよ。
茶々丸ちゃんへの魔力供給中はちょっぴりいじめっこになってしまうのです。

なんと言いましょうか、普段はオカン級包容結界を展開する茶々丸ちゃんが、ワタシの魔力で悶えるこの有り様を。

それこそ自身の核ごと、その存在の芯ごと一方的に侵され、捏ねられ、弄りまわされているのに、ソレを悦として受け入れる恥態を。

「あぁ！！…ぅ…ぉ、願いですっ！！…キスっで！！も…っうだめだから！！っっん！！さぁ…っい後は！！キスで！！っしてくださいぃ！！」

そしてソレを、ワタシに侵食されるコトを心から、いいえ、魂から望む艶姿を。

絡繰茶々丸には魂がある。

この濡れた瞳に宿る光がなによりの証でしょう。

あ、今までしていたのは、魔力供給とちゅーだけですよ。
あと、ぎゅってしただけです。

そうそう、これは言っておかないと。
ワタシは汀、チート美少女　汀ちゃんです。
ルビはいりませんよね？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あーん…ぎゅむぎゅむ。
この店のブラウニーは随分どっしりしてます。
すぐおなかいっぱいになりそう。

「マイロード、付いておりますよ」

紅茶を淹れて来てくれた茶々丸ちゃんが、自分の口元を指差しながら微笑んでいます。
むぅ…恥ずかしい。

口が大きくないのが悪いんですよ。
おっきく頬張ろうとすると、いっつもですもん。

「茶々丸ちゃん、ワタシは今おやつ的にとっても忙しいのです。にゅーケーキ屋さんとの今後のお付き合いが決まろうとしているの。よって茶々丸ちゃんが取ってください」

言ってもう一口。
もぎゅもぎゅっとしながら、茶々丸ちゃんへ向きます。

「マイロード、そのケーキ店との関係判断にわたしも意見申し上げてよろしいですか？」

うん、流石の茶々丸ちゃんですね。
ワタシの意を逃さず酌む、実に良い従者です。
ラブリー笑顔で主を陥落させるなんてっ！？
キティの従者だけど。

「もちろん、むしろ望んじゃう！！」

茶々丸が近づくのに合わせて、もう一口。
もぎゅもぎゅしながら彼女に向き直ります。

座っているワタシの口元へと茶々丸ちゃんが手を伸ばして…

……んむ…ちゅむ、ちゅっ…

そのまま被さるように唇を合わせ舌を絡める。
もっと深く、と腕を首に回します。
ふんわり茶々丸ちゃんのかおりだー。

にちゃ…くちゅ、ちゅっ…ちゅむ……

溶けたブラウニーを互いの舌に押し付け合うように、深く深く絡め合う…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……ちゅむ、あー…ちにちゅに。

その後も何度か交代でケーキを口に含み、お皿が空くまで続けたおやつタイム。

至福の時間でしたが、もはやお互いの味しかしなくなったのでここまで。最後に茶々丸ちゃんの舌をやさしく噛んでおわりを伝えます。

「……すみませんマイロード。失敗しました」

食べ合いっこの途中からワタシを膝に乗せていた茶々丸ちゃんは、さっきからずぅっとナデナデ。

あやまりながらもナデナデしてます。

うにゅーもっとなでろー。

「おうぅ…相変わらずのお手前。恐ろしい娘だわ茶々丸ちゃんは。ぎゅーしてやるー」

きゅっと抱きつくとあたまナデナデ、ほっぺたスリスリ、ぎゅっと返されてポカポカです。

はふぅ、茶々丸ちゃんがワタシよりずっとおっきーからこその、この包まれる感覚が素敵です。

「…ママ、マイっ、マイロード、マイロード…」

あー…

そろそろ茶々丸ちゃんがのぼせちゃうなぁ。

最後にむぎゅう、っと。

「茶々丸ちゃん茶々丸ちゃんお願い聞いてくださいな」

一拍置いて、ぷしゅー…と排熱。

従者の鏡、茶々丸ちゃんは主のお願いを逃したりはしないのです。

キティの従者だけど。

「イエス、マイロード」

横抱きで膝に乗せられたまま目線を合わせ、ちゅっ、っとやさしいくちづけを。

さっきまでとはうって変わって穏やかな笑みで応じる茶々丸ちゃん。

完璧従者の包容結界が発動しましたね。

「みみそーじをして茶々丸ちゃん。膝枕ね。あとはさっきした謝罪の説明をせよー」

茶々丸ちゃんは従者。

主を支え主に尽くし主と共にある存在。

だからワタシとキティのお願いや命令を逃しはしない。

違えはしない。

それが彼女の在り方で、それが彼女の望みで、それが彼女の愛だか

ら。

「イエス、マイロード。では寝室に行きましょう。説明もそこで。わたしの部屋でよろしいですか？」

隠すことない愛を瞳に宿してワタシに微笑む茶々丸ちゃん。
今の彼女に照れはありません。

「おけー。せっかくだしこのまま運んでー」

明確な指示に基づいて行動する茶々丸ちゃんに照れなんかありません。
ワタシを愛し、ワタシの為に行動するのに邪魔になるトキは照れたりなんかしません。
それが従者だって言ってました。
たださっきみたく、２人でただイチャコラしてるトキにはすーぐオーバーヒートしちゃうみたいですけど。

マイロードが愛しすぎるんです、可愛いすぎるんです。

そう、ぐずりながら言い訳する茶々丸ちゃんが可愛くって、ついついイチャコラが加速しすぎたのだって愛の軌跡ですよね。

「イエス、マイロード」

ぎゅー。
ああ幸せです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ほぅ…気持ちいいよほ、茶々丸ちゃん～…」

膝枕もみみそーじも気持ち良くて、なんだか眠ってしまいそうです
ぅ。

冬場のお布団レベルのまどろみ。

茶々丸ちゃんのお部屋は程よく冷房が効いていて、ほっぺに感じる
膝枕があたたかい。みみそーじはもちろん、時折髪を鋤く指からも
沢山のやさしい気持ちが伝わるかのようです。

「マイロード、おやすみになる前に先程の謝罪を説明いたしますね」

片耳のそーじを終えたのか、やわらかく息を吹き込まれた。

ふぁ…

「先程わたしはケーキの味を判断する、と申し上げておりましたが、
結果としてそれが成せませんでした。」

「…うん？２人でいっぱいおいしかったのに？」

身をひねり、茶々丸ちゃんを見上げて問いかける。

ワタシはすっごく美味しいかったですよ？

どきどきうまうま、でした。

「はい、わたしも尋常ならざるほど美味しく感じました。マイロー
ドが、です」

…なるほどなー。

ワタシも同じですソレ。
実際ケーキよりお互いを味わってたようなものでしたしね。

「完全に失念したね。ワタシもおんなじ。茶々丸ちゃんの味ばっかりに意識が向かってたわ。」

「はい、ですので謝罪いたしました」

ふむ…
もう少し身をひねって茶々丸ちゃんのおなかに、ぎゅー。
そうすると茶々丸ちゃんはゆっくりと髪を鋤いてくれます。

「…っん」

薄い服越しのおなかに熱い息を吹き掛けて一ちょっとさっきのお返し一茶々丸ちゃんに向き直る。

「でわ茶々丸ちゃんにはペナルティ。今度あのケーキ屋さんまで一緒に来なさい。エスコートを命じます。」

見つめ合って微笑んでオーダーします。
そして目を閉じる。

「…イエス、マイロード」

ごくごく近くで声が聴こえて、また唇が合わさるのでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

午前中に出掛けたワタシと千雨ちゃんは、途中いやなコトがあったものの、せっかくのお出掛けだからと気を持ち直して再行動をはじめました。

お昼までうろうろ、あっちでウフフこっちできゃっきゃっ。
あの後も何度かナンパこそされましたが、老け顔を筆頭にした“嫌な連中”が出張ってくることもなく平和にスルーしてイチャコラ。

お昼をくっつきながら食べてから、並んでお土産を選びゆっくり帰宅。すぐに2人一緒にシャワーで汗を流して出たら、キティに千雨ちゃんがからまれちゃいました。

曰く、いつまで待たせる気だ!!と。

キティは土産のアイスとケーキをみんなで食べたかったんですね。
うっ…この娘、相変わらずの破壊力。

確かにシャワー、長かったですからね。
汗流しながら、一汗かいてましたから。
いや…二汗?あ、もっとかなぁ?

千雨ちゃんにとってせっかくのデートを他ならともかく“あの連中”に邪魔されるコトは随分なストレスです。
見張られるのはスルーしてんだから、わざわざ出てくんなよ、話しかけんなよ。
ってな具合でしょう。

まだまだ突っつくトコロの多い千雨ちゃんのフォローはワタシの役

目です。
仕方ないとはいえ、この辺が見習い従者ですよね。

ある意味、旨みとも取れますけど。

まぁワタシは単純に、もっとイチャコラしたかったって部分大きかったり。
てへり、千雨ちゃんらぶ。

すっきりした千雨ちゃんはキティを宥めようとしましたが、事前の行為がバレてる以上まぁ無理でして。

引き摺られて魔法球へと。
間違いなくドンパチですね。
まさしく魔法球。

そうしてワタシは茶々丸ちゃんとイチャコラにオヤツしていた訳です

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ぐったり茶々丸ちゃんもらぶー。

肌をふれ合わせて行う、本格的魔力供給で茶々丸ちゃんは息も絶え絶え。
ぐったり茶々丸ちゃんです。

今日の触れ合いは…

おやつ→みみそーじ→魔力供給。
この順番でした。
そろそろキティ達も出てくるかな？

茶々丸ちゃんは稼働初期から今も猛烈な進化を続けています。
その胸の内に。

すなわち感情や魂が、です。

これは科学的な根拠のない私見ですが、だだの高等なだけのＡＩがワタシ手製ボディに入った瞬間から、その瞬間から茶々丸ちゃんは魂を得ていたのではないでしょうか。
稼働初期こそ、それを表現出来なかっただけではないかと思うのです。

いえ、むしろ魂を得ていたからこそ茶々丸ちゃんが産まれたんだと思います。

とにかく茶々丸ちゃんは進化を続けていて、その内包魔力さえ変質を繰り返しているのです。
これは製作時にあえて“変質性に富んだ純魔力”を動力に組み込んだ影響でしょう。

ワタシにしか出来ないコトです。

本格的魔力供給とは、茶々丸ちゃんが持つ変質を繰り返す魔力の剪定と形成です。
魔力調整、と表現する方が正しいかもしれませんね。
これをひたすら続け、茶々丸ちゃんに自身での魔力生成を行わせるコトが現状の命題となっています。

そしてそれは既に結果を出し始めているのです。
今や茶々丸ちゃんは僅かながら、安定した自己魔力生成を常時行っているのです。
きゃー茶々丸ちゃん素敵ー！！

はっきり宣言します！！

ワタシの茶々丸ちゃんへの愛を！！
茶々丸ちゃんのワタシへの愛を！！

茶々丸ちゃんの胸に宿るモノこそがそれの証です！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そうしてワタシはキティ達が出てくるまで、茶々丸ちゃんと一緒の毛布にくるまるのでした。

あ、茶々丸ちゃん起きた？
ねぇ、わかるよね？
前よりずっと安定してきてる。
ね？言ったでしょう？
もうすぐだよ、ほんのもうすぐ。
貴女はもうすぐ「茶々丸」って生物になる。
そうしたら約束通りにしてね？

緒々嶋茶々丸になるんだよ？

第４話　彼女はもうすぐ産まれます＊（後書き）

＊複数の段落改行等を微調整＊

第４話です。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

茶々丸イチャコラ回ですね。
本作品の茶々丸は、ほぼ汀のお手製です。
流石にＡＩは某麻帆良頭脳のものですが。
因みに汀としては無理にＡＩを組み込む必要はなかったのです。
てか“無理したうえで”組み込んでいます。
その辺含めて、経緯とかは例によって追々ですね。
汀が愛を主張するのは、茶々丸が引くからです。
被造物だと主張してたから、汀が愛を主張します。
もちろんエヴァや千雨にもたっぷりねっとり主張してますよ。
その成果もあって今の茶々丸ちゃんは既にだいぶ突き抜けています。
食べれるし匂えるし感じられます。
むしろ合成人間ですね。近いうちに魔法使うとおもう。
きっと原作始まる頃には多分もう生物です。
なにかしらのイベントを越えて。
さて、千雨ちゃん茶々丸ちゃんときたら次はエヴァです。
てかこのままだと作品内の時間帯が夜ってコトに…
イチャコラ大丈夫…かな？

【お礼！！】

投稿して2日目。
たった2日ですっごくたくさんの皆さまにご覧いただいてるみたいです！！
ありがとうございます！！
お気に入り登録もドンドン増えてきていて、なんだかなんだろうすごいです！！
これからも執筆がんばります！！

ではｇｒａｎｄ病原でした！！
おやすみなさい

第5話　不朽不滅と不老不死のらぶ＊

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル

真祖の吸血鬼
最強種。
不老不死。
６００歳。
最強の魔法使い。

でもそんなことよりも、彼女にはもっと重要なコトがいっぱいある。

ふわふわ金髪。
もちもちお肌。
ふるふる唇。
エターナル合法ロリータ。
尊大美幼女。
やきもちやき。
隠れイチャコラ。
汀のだけの永久の恋人。
汀のだけのおくさま。
汀のだけのだんなさま。
汀のだけのパートナー。

キティは汀のもの。
汀はキティのもの。

だってワタシとキティは、愛し合っている。
愛し合うワタシとキティは、老いず死なない。
ワタシ達はお互いだけのもの。

不老不死の吸血鬼キティ。ワタシと出会い、愛し合う。
彼女は最早、他の誰かに殺されるコトも出来なくなった。
永遠のトキ、連れ立つ愛を得た。

不朽不滅の魔女トバリ。
キティと出会い、愛し合う。
ワタシはもとより、死も衰えもない女。
永遠のトキ、連れ立つ愛を得た。

トバリはキティの、ただ1人の特別。
キティはトバリの、ただ1人の特別。

キティは最早、他の誰にも殺せない。
汀と交わり、彼女自身が選んだ愛。
キティに残された死はただ1つ。

“汀に殺して貰うこと”

それはキティの愛。
不朽不滅の魔女への愛。
私は汀を愛しています。

汀はもとより、死のない存在。
キティと交わり、彼女の死を消した。
残した1つが汀自身の選んだ愛。

“キティを殺せるのはワタシだけ”

それは汀の愛。
不老不死の吸血鬼への愛。
ワタシはキティを愛しています。

そう、結局はそう言うおはなし。
これはワタシの愛のおはなし。
これはキティの愛のおはなし。
これは愛し合う2人のおはなし。

ぷはぁ…
語り口調難しいですね。
ここからは美少女汀らしくいきますよー。

じゃあこれまでをまとめます。

チート美少女汀ちゃんのキティ愛しすぎてイチャコラぎゅーしてはなさないぞー。

です!!

ワタシは千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも愛しています。
2人はワタシに着いてきてくれる。

でもキティは特別なんです。
ワタシとキティはずっと一緒に。

キティはワタシだけのものです！！

“だけのもの”とか言っちゃうと背徳的ですね！！
きゃあきゃあ！！
キティらぶー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あーん、もぐ、もぐ

「ほら次はなんだ？パンか？」

今夜のお夕飯は洋食です。
ムニエルパンスープサラダ。

「も、一口むにえるぷりーず」

あーん、むに、える

「ん？…ふふん、千雨に茶々丸。そんな目で見てもダメだ。代わらんぞ…っと、ほら次だ」

むしゃむしゃ

ワタシはいま、キティにあーんしてもらってのお夕飯です。
わるくないです、うん、わるくない。

「あぁまたついたな、ほら口を出せ、取ってやるぞ」
そう言いながらワタシの唇を舐めるキティもわるくないです！！

ぺろ…ぺちょ、ちゅむ…

すぐにちゅーしてまたお夕飯にもどります。

もう何度目かのちゅー。
わざとだよね。
ちゅーしてから、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんに向かって「ふはは」
って顔見せてるもん。

「ほら次はスープだ。しかしこれは溢したら事だな、よし口移ししてやるから…」

「いい加減にしろ！！いちいちこっちチラ見して、どや顔すんじゃねぇ！！」

「千雨さんの仰る通りですマスター。わたしの方が上手くマイロードへ給仕できます」

千雨ちゃんは分かるけど、茶々丸ちゃんは違くないかなぁ。
まぁ事実だけど。
キティも千雨ちゃんもどうしたってイチャコラになるしね。

らぶらぶー。

「おい茶々丸!!お前、私の従者だろうが!!」

「はいマスター、当然です。当然ですが、恥じらいを隠してまでわざと見せつけられると、わたしにも思うところがあります。あぁマイロード、これが苛つきなんですね」

「茶々丸、お前わざとだな!!わざと聞こえるように言ってるだろう!!」

仲いいなぁ、2人は。
でもワタシにはらぶりー従者千雨ちゃんがいるのです!!

「……っとに、あいつら主従には呆れるぜ。ほら汀、私が食べさせてやるよ。スープの口移しだな、よっし!」

ほらね!!
ワタシ達、主従だって仲いいぞー。
千雨ちゃんくださいな、ん~…

「って、千雨!!許さんぞ!!どうせ昼に散々やったんだろうが!!私がやるって言ってるんだ!!」

あぁ…
てか、いいかげん食事再会しましょうよ。
キティやるならはやくしてください、ん~…

「おやつのケーキはわたしが口移ししました。尋常ならざる美味でした、マイロードの味が」

「「聞いてないぞ！？」」

うんアレはくせになるおやつでした。
だからだれか、ん～…

「私たちが魔法球にいる間か！？茶々丸、貴様！！だったら今は邪魔するな！！」
「お い私もに言わせろ！！私達はデートで外だったから、けっこう我慢したんだぞ！！食べさせっこくらいだったんだ！！今なら口移しくらいやってもいいはずだろ！！」

確かに。
イチャコラしてたけど、ちゅーしてぎゅっしてでしたね。
でもデートですから。
らぶーでしたよー。

「なにを言うか、千雨！！魔法球に連行された理由を忘れたか！！帰ってから散々やってただろ」

「ぐっ…。く、口移しはしてねぇ！！」

まぁ食べ物は、してないですね。

「ふん！！それがなんの言い訳になる！！口ごもった時点で貴様の負けだ！！」

「いきますよ、マイロード。ん～…」

あ、やっとですね。

茶々丸ちゃんとなら、なれっこさんです。
スープでも安心していただけます。
ん～…

…んちゃむ、じゅずじゅる…

「「茶々丸!!」」

「きゃっ…。マスター、千雨さん、危険です。急に引き離さないで下さい。マイロードに怪我があったら大事です」

あぁスープ味付け茶々丸ちゃんがぁ…
ちゅうとはんぱで、はらぺこり。

「お前、話聞いていたか!?朝から昼から貴様達は私の汀を独占して!!なら夜は私の番だと宣言したはずだ!!」

きゃー、キティだ・い・た・ん!!
らぶー。
今夜はがんばっちゃうぞー。
だからお夕飯、続けましょうよぅ。

「そんなのより、絡繰!!いま必要以上に舌とか絡めてたろ!!エヴァ、これで私にも権利ができたよな!!」

権利が、とか千雨ちゃん可愛いなぁもうっ!!
とりあえず誰かたべさせてー。
そしたらがんばるから。
ぎゅーしてちゅーあげるぞー!!

「お二人とも落ち着いてください。わたしがマイロードへ給仕するのはごくごく自然なことですし、唇を合わせたなら舌を絡めるのも当然のことです」

「「お前がどや顔すんのか！！」」

ほっとかないでよー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、ワタシのお夕飯はみんなが順番に口移しするコトになりました。

キティが息荒く

「スムーズに行う為にも、汀の両手は後ろに縛ろう」

とか言い出すもんだから大変でしたよ。

やれ目隠しだ、やれおねだりだ、と。

明らかにお夕飯そっちのけ、が目に見えてましたから、言ってやりました。

「いいけど、ワタシからぎゅーって出来ないよ?あ、おさわりも許さないから」

素直にお互いぎゅーしながらの口移しになりました。

みんなして一口を出来るだけ少なくするから、時間ばっかりかかったし。

味なんかほとんどわかんないし。
キティ味、千雨味、茶々丸味ばっかりでしたよ。

ぜんぜん文句ないです。
てへり、みんならぶー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お夕飯後のワタシとキティは決まってお茶を楽しみます。
千雨ちゃん茶々丸ちゃんはおかたづけ。
2人が戻るまでほんわかイチャコラ。

…んちゅっ…ちゅっちゅっ…

髪の長いワタシ達一家はお風呂に時間がかかります。
だからお夕飯が終わるとみんなで魔法球へ。

…くゅちっ…ぺちゃぢゅっ…

そして4人でお風呂です。
あらいっこ、みがきっこですよ。
魔法球内の居住スペースはいつでも整備万全。
キティのドールがピカピカにしています。
あ、ドールってのはアレです。
魂も感情もない、機械的に働く魔法人形。
はうすきーぱーさんです。

…ずじゅ…むちゃ、ちゅっちゅ…

お風呂から出た後はどうぞごゆっくり、です。
ワタシが誰と眠るかはその時々。
2人だったり、3人だったり、全員だったり。
でも1人で寝たことはキティと出会って以来一度もありません。

…あむちゅ…はみはみ…ちゅっちゅ…

そして外時間の朝に戻ってきます。
体感では丸9日前後。
千雨ちゃんの修行したり、茶々丸ちゃんの調整したり、キティとイチャコラが突き抜けたりで、あっという間です。

…ちゅむぅ…ぺちゃ、ぴちゃ…

これがワタシ達の毎日。
だから千雨ちゃんの修行年数とか、茶々丸ちゃんの活動累計時間とか、外時間で答えちゃいます。
かぞえてないからわかんないし。

…ぅずずず!!…ちぅ…ちゅっ…

あ、お察しですかね?
さっきからずっとキティに押し倒されてます。
ソファーでワタシ仰向け、キティの身体全部で押し倒されてます。
キティの熱、キティの香り、キティの味。
いとしぃよーキティ。
らぶー。

…ちゅっちゅ、ぺちゃ…ちゅむ…

一心不乱にちゅーしてぎゅーってくれるキティ。
あぁダメだワタシも…って。

「…なっ!?放せ降ろせ茶々丸!!貴様ァ、許さんぞ!!」

茶々丸ちゃんに持ち上げられたキティ…
怒ってるけどかわいー。
はふ…ほっぺがほてる。

「すみません、マスター。何度か声をかけましたが、本気で聞こえていないご様子でしたので」

ワタシは聞こえてました。
見下ろす茶々丸ちゃんと目が合ったし。
多分それで止めてくれたんでしょう。

「マスター、魔法球へ参りましょう。今夜はわたしも千雨さんも入浴を終え次第休みます。お二人の邪魔は致しませんので」

「あぁ、私はあれだ、まぁ色々したしな。夜はエヴァってので構わない」

あぁ、茶々丸ちゃんも千雨ちゃんもキティはホンキでやきもちもーどなのを察したんですね。

「…っち。わかったから降ろせ。入浴したらすぐに下がるんだな?」

ふまんげキティかわいー!!

ワタシをちらちら見ながら赤らめ顔キティぷりてぃー！！
見てるだけでどきどきします。

「イエス、マスター」

「千雨も確かにか？」

「あぁ。あ、今夜は、だからな」

ふふふ、今夜はキティとで決まりみたいですね。
らぶーキティらぶだよー。

「ふんっ！。貴様らの主として邪魔は許さんからな！！」

「イエス、マスター」

「私の主は汀だ。けどまぁわかったよ」

床に降ろされながらの念押しに、本気がんがんこもってますね。
さっきまでも余裕なさそうでしたし。

「…汀、すまん、行くぞ。ゆっくり風呂に入ろう。それから愛してやる、それから愛してくれ」

「うん、キティ。ゆっくりお風呂入ろう。それから愛して？それから愛し合おう？」

ぎゅーってしてちゅー。
あぁ幸せ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ワタシは汀。
完全無欠のチート美少女汀ちゃん。
不朽不滅の魔女。

あなたはキティ。
限界突破のエターナル美幼女キティ。
不老不死の吸血鬼。

「愛している、汀」

「愛しています、キティ」

見つめ合って囁き合う。
それだけで幸せ。

ゆっくりお風呂したら、２人だけの時間。
胸がいっぱいで、どうかしてしまいそう。

「そんな目で見るな。風呂が先だと自分でも言っただろう。」

キティが手を伸ばす。
頬に触れると、熱が伝わる。
彼女の高鳴りが響いてくる。

「どんな目？」

ワタシより少し小さなキティ。
ワタシより華奢なキティ。

「わかるだろう？」

軽く抱き合って目を合わせる。

「お前が見ているモノと同じだ。狂おしいほどに求める目だ」

わかる。
ワタシ達の目はきっと同じ。
だって、でも、しかたがないでしょう？

「「愛しています」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このままだっこでおふろまでごー！！
だっしゅしちゃいますよ！！

「ふふふ」

「…ったく」

茶々丸ちゃんの笑みが、千雨ちゃんの呆れた声が背中越しに聞こえ

ました。
どちらもやさしさからあふれ出たような声。

今日も我が家は幸せです

第5話　不朽不滅と不老不死のらぶ＊（後書き）

第5話更新。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

エヴァのイチャコラ回です。
賛否両論でしょうか？
本作品のエヴァは、自分の心のなか、一番深い場所に汀を据えています。
そのため、主義や性格にも変化があります。
汀といることを第一に考える部分が多々あります。
それら全ては汀の影響です。
あと、いじられポジでもないです。
てかむしろ男前ですよね。

汀に関しても、チートっぽくなってきましたね。
まだまだですけど。

この後の入浴描写は流石になしです。
今後は…
やっぱり彼女の登場でしょうか？
そこはさらっと流して、そろそろアンチ展開でしょうか？
悩みどころです。

てか飽きられないといいなぁ。
イチャコラって結局、イベントとかなくてもキャッキャウフフしてる2人ってだけですし。
本作品の半分はこれですもんね。

さて気を取り直して報告です。
活動報告にも記載しましたが、ＰＶとユニークがびっくりな状況です。
本作品をご覧の皆さま、ほんとうにありがとうございます！！
これからもがんばりますよ！！
マンネリ回避が問題ですね！！
が、がんばります！！

ではｇｒａｎｄ病原でした。
また読んでくださいね

第6話　ついに彼女の登場です＊

《ずがーん！！》

キティの魔法球は今日も快適です。
アイスティもおいしー。

－ハーハッハッハッ！！ほらほら秘策とやらはどうした！？－

《ばばばがーん！！》

外と違って爽やかな常夏。
昼も夜も最適に保たれた気温。
なんだか精力的に動きたくなります。

－くっそ！！冗談じゃねぇ！！いけっ！！－

《どどどどどっ！！》

当然、のんびりにも適しています。
今のワタシみたいにね。
茶々丸ちゃんも控えてくれていて、高級リゾートもたじたじですね。

－つまらんな！！その程度でこの私に啖呵をきったのか！？－

《ずっばーん！！》

青い空、蒼いうみ、白い砂浜。
ふーむ…

-っ！っ！おい！！なんかマジ過ぎないか！？-

《しゅぱぱぱっ！！》

「茶々丸ちゃん、何か足りないと思いません？」

重要な要素が足りないよー。

-いまさら空惚けかっ！！余裕があるじゃないか！！-

《びゅごぉー！！》

「…なんでしょうか。デザートですか？」

…それも重要な要素ですね。

ジャンポパフェとかいい。

-いったいなんのっ…！！って、あれか！？-

《ばばっ！！ばばっ！！》

「それもいい。でも、のん。ずばり水着だよ。リゾート気分南国気分なのに部屋着ってどう？ワタシ、水着着る。茶々丸ちゃんもね」

これ重要ですよ！！

-そろそろおしまいにしてやる！！汀の目の前でみっともなく凍りつけ！！-

《きゅぼっ！！》

「イエス、マイロード。お手伝い致します」

ありゃ？

茶々丸ちゃんうれしそうですね。

- やっぱ汀か！？汀に言ったアレか！？ -

《ばかばかばかばかん！！》

「あり、茶々丸ちゃんごきげん？水着のワタシがお好み？」

それとも、ワタシのお着替えが、でしょうか？

- 私を出し抜いて一発決めるんだろう！？汀にご褒美をねだったんだろうが！？やってみせろ！！ -

《ががががが！！》

「いえその…マイロードの身支度は、普段千雨さんの仕事ですので、たまには、と。それに千雨さんは本当に楽しそうにマイロードのお世話をされますし…」

ふむーなるほどなるほど。

でもまだあるよねー？

- ばっ！！ちょっ！？そんなのちょっとした弟子の意気込みじゃねぇか！！ -

《どっかどっかどーん！！》

「うふふ。つまり茶々丸ちゃんはワタシを着せ替えしてキャッキャしたいんだねー」

照れちゃってかわいー。
いいこに育ったなぁ、もうっ！！

- 馬鹿め！！聞く耳持たん！！これで終わりだ！！ -

《どっっっばぁーん！！》

「…っ！？…あの…決して、その…」

うーふーふー。
ぎゅーってしてなでなーで。

「ん。じゃあ着替えに行こうか。あのね、千雨ちゃんはいっつも脱がせたり着せたりで、色んなトコ触ったり揉んだりするんだ。茶々丸ちゃんにも許しちゃうぞー」

耳元で囁いてあげました。

「……っ…！！…」

照れちゃった茶々丸ちゃんは、ほんとにかわいいー。
手を引いて、着替え部屋へエスコートしてあげましょう。
真っ赤でふらふらですからね！！

「オイ魔女。オレハオイテケヨ。ウゼーンダヨ」

ずっと頭にくっついてたくせに、今更もんくですか。
でもそうはいかないのさー！！

「だーめ。チャチャゼロも水着だよー。ふはは、こんなこともあろうかとー」

チャチャゼロの水着も、もちろん用意してございますよ！！
これで水着姉妹の主！！
キティがですけど。

「アンダヨメンドクセエナ、着替タラ酒ヨコセヨ」

あはは、額ぺしぺしするなよー。
その手を取って握手です。

「でもこの後は近接訓練だよ？」

キティの初代従者。
魔法使いの前衛。
キリングドール。
茶々丸ちゃんのお姉さん。

チャチャゼロ。

当然参戦ですよ。
てかやっと登場です。

「アァ覚エテタノカヨ。アンマリ綺麗ニシカトスルカラ忘レテンノカト思ッタゼ」

いやぁ楽しそうだったですし。
止めませんよ、良い訓練になりますからね。

「ん～？チャチャゼロとイチャコラしてたかったからね」

嫉妬キティ眺めるのもぷりてぃーでしたし！！

「ヨク言ウゼ」

ですね。
てか茶々丸ちゃん喋らないですねー。
そんなにしたかったのかなぁ？

「オイ妹ヨ。ツイタゾ、サッサトヤッチマエ」

「あ、はい姉さん、では一旦マイロードから降りてください。…マイロード、その…よろしいですか？」

俯いちゃってもう、仕方ないですね。
ほらほらぎゅーですよー
ちゅーですよ。

「…んっ。よいぞーくるしゅーない。やってたもれー」

ってあれ？
茶々丸ちゃんおめめギラギラして…

「…ふぁん！！」

いきなりそこ！？
あっ…ちょっと…あん！？

「アーア、始マッタ。コリャナゲェナ。…ット、コレカ。オイ、オレハ先ニイクカラナ」

あん！！…ちょっと…コレは…

「チャチャゼロ、キティ達お願ぃんっ！！」

時間かかるかも…です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふはははは！！見事な氷柱千雨だな！！おい見ろ汀！！これが“一発決められた”ツラだ！！」

……

「馬鹿なヤツめ！！私をダシにしようとは！！はーっはっはっはっはっ！！」

……

「おい汀！！コレは私がおねだりの権利を手に入れたってコトだな！！ふはは！！愉快だ！！実に愉快だぞ！！」

……

「…汀？…って汀！？どこへ行った汀！！」

……

「とぉーばぁーりぃぃー！！」

第6話　ついに彼女の登場です＊（後書き）

第6話投稿。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

ついにチャチャゼロ登場です。
いやまぁ正直第2話の段階で、忘れていただけって言う…
もういっそ…とかも思いましたが、エヴァの初代従者としてやっぱり必要ですからね。
今回登場と相成りました。
てかそれより“本作品ではいじられポジじゃない”とエヴァを評したハズが、早速…
ごめん、キティ。

唐突に気付いたのですが、本作品のタイトル『匂いがつくからヤキトリは嫌い』の部分て、原作『ネギま』自体を否定してますよね。
そんなつもりはなかったんです、まいりました。
変えようかなぁ？

第7話　ゼロさんコレでゆるして

右からの横薙ぎを屈んでかわし、後押しするようにバランスを崩してあげちゃう。

「ナメンナ！！」

崩したバランスを回転力へと転化させたようで、急回転と共に両手の刃を振るってくる。

「っとりゃ」

その前に、一歩踏み込み肩口の力点へ打突をとりゃ。
今度こそバランスを崩したチャチャゼロは、広く間合いを取るコトを選んだようです。

「メンドクセエ相手ダゼ。チットモ切レヤシネェ……っ！！」

猛烈な加速で一気に間合いを詰め、両刃を振り下ろして来ますが、悪手です！！
殺那の間にこちらも加速、まだ振り上げたままの握りをそのまま掴んでしまいます。

「ッ！！」

しかし、拘束された両手はそのままに、球体関節を活かして更に加速した頭突きが降って来ました。
が、ふふーふ、もらいました。
両腕を開く事でチャチャゼロ宙ぶらりん。

「グエッ！！」

停止した宙ぶらりんチャチャゼロを放して、即正面から抱えます。

「ｃａｔｃｈ！！チャチャゼロいただき！！」

「アァ、クソ…。チッ、負ケダ負ケ」

ふふふー。
ぎゅーしてから、クルッ。
後ろから抱えるようにして、チャチャゼロの手を取りぱたぱた。

「おわったよー」

遠巻きに観戦していた3人にアピール。
しょーりの美少女汀ちゃんです。

「チクショー、イッソ自爆シテェゼ…」

ふふーふ。
敗者はただ可愛がられるのみなのです！！
ぎゅー。

「グエェ…イツカ切ッテヤル…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「しかし見事なもんだな。チャチャゼロ遊ばれっぱなしじゃねぇか」

「お疲れさまです、お2人とも。流石です。わたしでは先程の姉さんには到底敵いそうもありません」

「ふむ、チャチャゼロの動きは想定を上回っていたな。まぁ汀には届かなくて当然だが」

てへり。

てれりこてれりこです。

「テメェ千雨、氷漬ケノ次ハ血ダルマニナリテェノカ」

「ちょっ!?勘弁しろ!!」

「まぁまぁチャチャゼロ。まだ加減は難しいでしょ?千雨ちゃんをしごくのはもうちょっと慣れてからにしなよ」

チャチャゼロは今、パワーアップの調整中なのです。

ごくごく単純な“魔力エミットによる各動作、威力の強化”なんですけどね。

「汀も止めるならちゃんと止めてくれ!!あんな速度、冗談じゃねぇ!!」

あはー。

まぁいずれは殺りあってもらうわけですしね。

「でもやっぱりチャチャゼロはキティの従者だね。もともと魔力で身体を動かしてたって下積みはあっても、ここまで強化されるとは

ね。チャチャゼロ流石！！ぎゅ～！！」

チャチャゼロは元よりキティの供給する魔力で動く魔法人形です。
パワーアップもあくまでその範疇。

供給される魔力の効率化と増量。
新たな放出用回路設置と共に身体自体の再構成。
ついでに得物召喚機能。

「グエェ。褒メンナラ酒ヨコセ、アト放セ」

ワタシ達がしたことはこれくらい。
そもそもチャチャゼロは、キティと一緒に長年の血路を歩んで来た烈士ですからね。
今まで築いたその熟練の武技こそがチャチャゼロの真価なのでしょう。

「ふっ、敗けは敗けだろう。大人しくしていろチャチャゼロ。水着の汀がお前くらいの人形を抱き締めている姿は実に絵になるぞ」

えへ、キティに褒められました、てれりこ。

そもそも今回までチャチャゼロが特別な強化をされるコトがなかったのも、彼女がその技巧で千雨ちゃん茶々丸ちゃんをバッタバッタと薙ぎ払い続けたからです。パワーもスピードも既に上回る2人を相手取り、その技巧、経験で圧倒し続けたから。

「あぁ、2人とも水着似合ってんな。選んだの絡繰なんだろ？」

千雨ちゃんにも褒められたー、てへり。

まぁ流石に最近2人の成長が突き抜けてきたところで、今回の強化へと至った訳です。

「あ、はい。すみません千雨さん。マイロードのお手伝いは千雨さんの…」

「あぁいや、気にすんなって。汀になんか言われたんだろ？それにこう…汀を着飾る楽しさってよく分かるし」

数日の慣らし運転、ワタシとの数時間の全力戦闘（チャチャゼロのみ）。
いまや既にその新しい力を制御しかけています。

「おい貴様達、私を捨て置いて汀で楽しむだと？」

チャチャゼロがこの魔力エミットを完全にものにしたら、かなりの強さになりますよ。
得物もワタシ特製ですし。

老け面タカミチくんならとっくに圧勝でしょう。
どころかタカミチくん5人とかでも足りない？
今後どこまで化けるでしょうか。

チャチャゼロ無双ですね！！

てか今のキティのセリフは！？
このタイミングなら！？

「待って！！ワタシの為に争わないで！！……よし完璧。女の子、夢の台詞ゲット。やった！！」

きゃー、ワタシを取り合うキティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん。
何度あっても素敵なシチュエーションです！！
3人ともらぶー！！

「…ふ。なら汀の望みの通り争わず、手を取り合おうじゃないか。
茶々丸、千雨。3人で汀を思う存分着せ替えするぞ！！」

……へ？

「成る程成る程、確かに。汀に辛い想いをさせるなんて、これ以上なく心苦しいしな。賛成だ。」

……あれぇ？

「すみませんマイロード。あの…先程のお手伝いは、抗いきれないほどの幸せでして…。決して悪くは致しませんから」

……えっとぉ？

「ジャア、オレハ慣ラシ続ケルワ。…ヨット、済ンダラ訓練付キ合エヨナ」

……ぁあ、逃げられました。

「ちなみに私は汀の着替えんとき、身体を触んの許されてる訳だが…まぁ、今回も当然だよな、3人とも」

……いやなよかーん。

「ほぅ…たまにシケこんでいると思えば、公認か。ふむ、私は許可なんぞ必要ないから当然だが、まぁ今後は3人とも問題あるまい」

……たしかにキティは、だけど。

「あの…わたしも、その…先程許可をいただいております。ですので…3人一緒に」

……や、断りはしないですけど。

「…えっと、ふつーに4人でってコトだよねー？」

「「「汀（マイロード）はされるだけだ（です）」」」

やっぱり！？

「ほら、行くぞ。それともここでされたいか？」

「いやだめだろエヴァ、ここじゃ着替えがよごれちまうし道具もねぇ」

「……マイロード、参りましょう」

チャチャゼロ！！

たぁーすぅーけぇーてぇー！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

…くすん。一方的に玩ばれました。

あ、でもでも美少女すぎるワタシが一方的にされるのって素敵かもです！！

とか思って、少しサービスしたら、３人とも異常に燃え上がるんですもん…

でも、すっごく愛されちゃいました！！

てれてれ。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、らぶー！！

第7話　ゼロさんコレでゆるして（後書き）

第7話更新。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

チャチャゼロごめんね！！の回です。
いえ、本気で忘れてしまっていたので、せめてものお詫びに、ですね。
本作品のチャチャゼロはカワイイだけのマスコットではありません！！
スピードパワーガード、エヴァの魔力を頼りに満遍なく鬼化！！
名前変えてもばれればれですが、某はらぺこ騎士王ちゃんの魔力放出です。
ちなみに今回の強化でチャチャゼロは、汀エヴァに次いで三番目の実力を得ました。
下2人も麻帆良では無双出来ます。
いったい誰と戦うのやら…
人形さん？
明確な敵に魔女は容赦などしません。
ばくっ！！っとヒトノミです。
本作品でバトルはオマケ扱いですね。
イチャコラがメインですから。

感想をいただいた　七さま。
ありがとうございます！！
コレでチャチャゼロもきっと記憶に残る！？
一家の非イチャコラ要員としてがんばってくれるはずです。

…たぶん！！

今回は更新が遅れてしまいました。
でもほら、アレです。
眠るまでが今日！！
更新してから寝ますから、セーフですよね！！

…ごめんなさい、もっとがんばります。

では、ｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第8話　ワタシ達とアイツラ　その1

「あ、コレかわいー。黒地に金もいい。」

長い夏休みは既に明け、幾らかの週を過ぎています。

「ふむ、黒か…だが浴衣だろう？もっと淡い色合いがいいんじゃないか？」

新学期のクラスは相変わらすの煩わしさで、しかも最近はワタシ達へ何故か積極的に干渉を始めているようです。

「まぁ浴衣だしな。普段は着ないもんだし、色も普段と変えてみるか？」

穏やかに学生をやっているワタシ達に彼女達は何を望んでいるのでしょう？

「ん～…例えば？水色とか？ワタシには合わなくない？」

夏休み中もクラスメイトの誘い全スルーしたり、新学期開始パーティーとやらもスルーしたけどソレが原因でしょうか。

いえ違いますね、今に始まったコトではないのですから。

となると、誘導…でしょうね。

「「それはない！！」」

伴って、麻帆良の魔法使い達が何やら蠢いている様子です。

明らかに監視が増加しています。

「うわ、びっくりした。え～、水色いけるかなぁ…」

面倒事の予感がしますね。
取り敢えず近衛くんからの連絡を待つとしますか。
そもそも今夜は会談の予定ですし。

「絶対いける！！汀なら淡い色だろうが、明るい色だろうがなんだって似合うに決まってんだろ。エヴァ、汀のは水色にしよう。小物は私がつくる。」

「そうだな、たまにはこんな色悪くない。いや…かなりいい。うむ、任せろよ汀！！私が飛びっきりの浴衣美人に仕立て上げてやる！！」

彼等は彼等の好きにするといいでしょう。
ワタシは関与しません。
けれどもし…

「え～…。まぁ2人が言うんだし平気かなぁ？ん、じゃあお願い。キレイにてくれたら、お礼にいっぱい可愛がってあげる」

隣に座っていたキティを引き寄せてちゅー。

…っん、ぺちょちゅぴゅ…

「んあ……あっ…」

軽くで済ませ、一瞬寂しそうな目をした千雨ちゃんへ自ら近づいて、上からキスを落としてあげます。

…ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちょぷちゅ…

「…あ、んぅ…汀ぃ…」

もし、ワタシの幸せを邪魔するのなら、容赦はしません。
不朽不滅の魔女、汀を怖れなさい。
怯えて動けないうちは、放っておいてあげるのですから。

でもいまはしあわせじかん～。
んー、キティも千雨ちゃんもあまぁい。
らぶー。

「キティ、千雨ちゃん、大好きだよ！！」

「あぁ。汀、愛している」

「あ…っと、その、私も…だ」

きゃー！！
ｃａｔｃｈ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ふぁ、けだるぅーい。
キティのなめらかな背中にちゅーしてくすくす。

「…あっ、…汀…」

千雨ちゃんのつややかなお腹にちゅーしてきゃっきゃっ。

「…ふぁっ、もうむりだって…」

ふふーふ。
おだやかでイチャコラでどたばたでキャッキャな空間。
素敵です。
なんてしあわせなんでしょう。

でも残念です。
そろそろシャワーを浴びて、出かける支度をしなくちゃいけません。

「……ちっ。汀、電話だ。近衛学園長から着信、すでに絡繰が対応している」

ちぇー。
ほにゃん、としてた千雨ちゃんが一気に不機嫌そうになっちゃった。
あ、キティもシーツから起き上がって舌打ちしてるー。
ちぇー。

「そっか、了解。千雨ちゃんはシャワー…じゃなくて別荘でお風呂にしよう。だから、会談用の外出着準備して待ってて。キティもお風呂行こうね。茶々丸ちゃんが来たら、一緒に準備してて。んー…ちゅっ。んー…ちゅっ」

あーあ、わざわざ会談の前、このタイミングで連絡してくるなんて面倒事でしょうねぇ。ちゅーをチカラに変えてがんばろー。

「…っん。わかった、飛びきりの選んどくな」

「…んちゅ。あぁ。詰まらん電話は早く切れよ。……近衛め、忌々しい」

よろしくねー。

…あぁ面倒です。

《こんこん》

「失礼します。マイロード、麻帆良学園学園長よりお電話です」

「はい。あ、茶々丸ちゃんはキティと準備しておいて、詳しくは千雨ちゃんに」

「イエス、マイロード」

めんどうだなぁー。

でもやらなきゃ、よし。

茶々丸ちゃんをきゅーでちゅー。

「…はぷ、んちゅ、ぺちゅ……。では、マイロード、先に行っておりますね」

うん、こころちから、かいふくです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はぁ…
取り敢えず外交もーど。

「…もしもし、汀よ」

『おお、わしじゃよ近右衛門じゃよ』

「要件をどうぞ」

『ひょ!?頼むぞい…留守番電話じゃないんじゃし、挨拶くらいさせてくれんかの』

「……」

『……聞いとるか?』

「挨拶がしたいと言うから待ってあげたんでしょう。早くなさいな」

『おぉ、合いわかった。では、夏休みが明けたがどうじゃ、調子なんぞは。今年は残暑厳しいからのぅ。老骨にはちとキツイわい』

「そうね、確かに残暑が厳しいようね。あなたのところの威勢がいいのが何人か、脳ミソ沸騰しているみたいだものね」

『ぐっ…』

「監視人数が倍に膨らんでいるし、ワタシの家に干渉しようとした茹で脳もいたわ」

『それは…その事もあって連絡したんじゃよ』

「そう。近衛くんとは条約もある。干渉は失敗しかしていないし、監視も実質増えただけ。今はまだなにもしていないわ」

『わかっとる。わしらに被害等は一切ないからの。疑っとりゃせん』

「心外ね。ワタシ、今は、と言ったのよ。明確に敵対すれば排除する、それだけ。だからよく手綱を引いておきなさい、そう言ったの。疑惑もなにも関係ないわ」

『面目無い限りじゃ、処罰は与えておくからの。…と言うか、“近衛くん”は止めてもらえんか。わしそんな年じゃないぞい』

「あら、そう。なら近衛学園長。いい加減要件を」

『…なぜか釈然とせんのぅ、まぁ要件じゃな。今夜の会談はそちら全員で出席してほしいんじゃ。改めてそれぞれに条約について確認したい。可能なら、もっと歩み寄れればと思っとる』

「そう、全員で出席ね。まぁ千雨もそろそろお披露目したいしね」

『……長s「緒々嶋よ。彼女は緒々嶋千雨。会談の際、改めて自己紹介させるわ。それ以降は間違えないで」

『……合いわかった。こちらからはわし、高畑くん、ガンドルフィーニくん、シスターシャークティ、あと緒々嶋千雨くん絡みの人員が何人かじゃ』

「何人か…ね。結構よ」

『では、今晩２１時にわしの学園長室まで来てくれるかの』

「……」

『来て…くれるかの？』

「冗談はいらないわよ」

『いや、冗談のつもりは…』

「ないとでも？ふぅ…なら断るわ。あなた達とワタシ達は決して友好的な関係ではないわ。ましてや傘下でもない。会談がしたいなら、キチンとした中立の場を用意なさい。その上で結界なんなりを敷きなさい。あぁ、結界を敷く前に、ワタシに承認をとりなさいよ。最悪、閉じ込められたと判断したなら、あなた達、即座に皆殺しよ。それくらいするのが当たり前でしょう」

『しかしのう…皆に学園長室まで来るようにいってしもうたし』

「……２度は言わないわ、どうする気なのか聞きましょう。これが最後」

『……すぐに料亭に席を設けよう。結界の事も承知した、他の者には強く言い聞かせておこう』

「そう。なら後で店を報せて。じゃあ切るわ」

『うむ、ではあとでの』

《ぷつ、ぷー、ぷー、ぷー》

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

駄目ですね。
最近彼等との関係は拗れるばかりか…
ワタシも言葉に棘を乗せてしまうし。

もういっそ始末してやりたい。

まぁ千雨ちゃんのコトもあるし、ここに居るのも今度の卒業までで
しょうか。
ワタシの心情も大分嫌悪に傾いてきてます。

丁度いい切っ掛けかもしれません。

気を取り直して！！
これからの苦行を乗り越えるためにも！！

みんなとイチャコラしてエネルギー補給しましょう！！

キティー！！
千雨ちゃん！！
茶々丸ちゃん！！

いまいくよー！！

第8話　ワタシ達とアイツラ　その1（後書き）

第8話更新。
ｇｒａｎｄ病原です。

今回初登場、麻帆良学園長。
彼は本作品の黒幕役の一人です。
あまり言ってしまってもあれですので、秘密にしておきます。
次回以降にご期待くださいね。

今回の後半部分はもう少し他のやり方があったのではないかと、更新した後でも悩んでいます。
やっぱり未熟者のｇｒａｎｄ病原ですが、コレも経験にしてかんばります。
今後もせび読んであげてください。

では、ｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第9話　ワタシ達とアイツラ　その2＊

～割烹　雪芽～

当店は主に都心部、各都道府県要所に店舗を構えお客様に最高級のお食事とお寛ぎをご提供させていただいております。
全客室は各々が壁等で面しておらず、完全な個室でのひとときを、ごゆっくりとおすごしいただけます。
お食事は全国より厳選された食材を、新鮮なままご賞味していただいております。
お客様のお好み、ご要望にも可能な限り当店料理長が腕によりをかけてお応えいたします。
全国津々浦々より取り寄せました名酒秘酒と共におたのしみくださいませ。
どうぞ、こころゆくまで、最高のお時間をおすごしくださいませ。
割烹　雪芽は皆様のご来店、心よりお待ちもうしあげております。

「待ってるのは魑魅魍魎どもだけどねー」

最高級割烹雪芽へ４名様（＋１）ご案内～、中のチート美少女汀です。

（＋１）はもちろんチャチャゼロですよ。
タクシーに乗るワタシの膝の上。
上機嫌だからぎゅーし放題。
ぎゅー。

「ナンカ言ッタカ？ンナノヨリ、ゴ主人、魔女、待チキレネェ。高ェ酒呑ミ放題ナンダヨナ」

最初は会談なんか面倒クサがっていたのに、店名聞いた途端これですもん。

「そうだな。千雨の紹介が終えたら、適当に頼むか。無論、近衛学園長につけてだ」

「…まぁ悪くねぇな。つまんねぇ殺り合いよりそっちのが地味に痛そうだ。私も乗った」

「賛成です。しかし、学園長以外の方々が妨害するのではありませんか？」

うわー、みんな飲み会にでも行くような気軽さですね。
でも仕方ないとはいえ若干キレ気味だった千雨ちゃんにも余裕が出来たみたいです。
さすがワタシの家族。

「ん～…ワタシ達が取引してるのは近衛学園長と英雄くんだからね。その部下どもには条約の確認でもして、さっさと退出してくれないとホントの会談にもならないもん。それは近衛学園長もわかってるし」

幻の条約でも、ワタシ達は15年間抵触していません。
千雨ちゃんのコトは…グレーゾーンかなぁ。

「けど…今回はなんかあるんでしょ。たぶんアチラ側からなんらかの提案なり要求なりありそう。」

わざわざ会談前に連絡入れたコトといい、ワタシ達全員を召集したコトといい、最近のキナ臭さといい、分かりやすすぎますが…果たして何があるのか。

「ツマリドウナンダヨ、魔女」

チャチャゼロの為にも、千雨ちゃんの為にも早めに雑多どもは消さなきゃいけませんね。

「みんな最初は大人しくしててよ。自己紹介してから条約の確認、次いで千雨ちゃんの扱いについて。それからがアッチのターンでしょう。」

まず、ワタシ達が麻帆良へ“捕らえられ、更正の為通学している”コトの確認。
双方が所持する、サウザウンドマスターの記録映像証文の確認。

それから千雨ちゃんの正式なお披露目。ワタシの従者であるコトは周知だから、今回で関東魔法協会に対して明確に宣言するコトになる。

「千雨ちゃんの今後はワタシのもので決まってるから。千雨ちゃんの好きなように言っちゃってね」

「はっ。汀を愛してるって言ってやろうかな……っ…」

自分で言って照れるなんて!?
肩に頭預けてすりすりー。
すっごい好きだよ千雨ちゃんー。

「是非言って!!千雨ちゃんらぶー」

んー…ちゅー。

…ちゅっ、ちゅっむ…

「おい…こっち向け。で、汀、続きは?んちゅ…」

わ!急に引っ張るとあぶ…

…んっ、ちゅぷ…

キティにちゅーされちゃった、てれり。

ふふーふ、嫉妬かなぁ?

キティらぶー。

「…今のはひどくねぇか。」

「ウルセェ千雨、アトデ泣クマデ犯ラレロ。魔女、オレノウエデイチャツイテンジャネエ、話ヲ続ケロヨ。ドウシタラ、呑ミ放題ナンダ?」

っと、そうでした。

キティすりすりー、っと。

「ごめんごめん、千雨ちゃんも後でいっぱい、ね。とにかく一通り話を聞けば、近衛学園長の方が外野を帰してくれるよ。そしたら、好き放題呑み放題ぃー。でもね、それくらい当然だよきっと、彼等の“一通り”は相当なストレスマッハだろうからねー」

実際のトコロ、ガス抜きみたいなものです。

正義かぶれ雑多どもが、ワタシ達を批難する。
近衛学園長がたしなめ、幻の条約が真実のそれであるかのように認識させる。
後は雑多どもにお帰りいただいてから、本当の会談。

ポーズを維持するための、定期的なガス抜きみたいなもの。
その分、好き勝手に言われますけどね。

「特に千雨ちゃん気を付けてね。彼等はあのトキのままだよ。平然とワタシを批難する。相手にするだけ損」

千雨ちゃんがワタシのもとへ来るコトになったトキのように言うでしょうね。
目の前で消える命に唾を吐くように。

“正義のため”って。

「……わかってる。中等部通ってみて身に染みた。上手くあしらったりはできねぇけど、今更激昂したりもねぇよ。……でも、その…帰ったら慰めてくれよ。汀のものだって、それこそチャチャゼロじゃねぇけど、私が泣くまで、わからせてくれ」

……帰りましょう。
今すぐ帰って千雨ちゃんを…いやいや。

「うん、千雨ちゃん。もうとっくに千雨ちゃんはワタシのものだけど、今日も1つの節目だね。千雨ちゃんの全部を愛してあげる。何度だってわからせてあげる。泣いたって気絶したって終わらないよ」

千雨ちゃんと瞳を合わせます。
結びついた魂が呼応するように、瞳に浮かぶ光が同調します。
魂から、心から、湧き出るような想いをゆっくりと口にします

「千雨ちゃん…」

千雨ちゃんも同じ。
瞳から伝わるんです

「汀…」

「「愛しています」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はぁ……わかった、今夜は千雨と寝ろ汀、許可してやる。だから2人とも帰ってこい」

っと、いけません、みんながいるのに千雨ちゃんと2人だけの世界に入り込むトコロでした。

「…てへり、キティありがと。まぁそんな訳だから、基本の受け答えはワタシに任せてよ。みんなは直接聞かれたら答えるってコトで。」

千雨ちゃんの瞳がまだ、きらきらとコチラを向いてるのにウインク

を1つ。
まとめに入ります。

「後は…攻撃は遠慮してね。枷もそのまま。どうせ彼等は実力差に気付けない程度だから。サウザウンドマスターや近衛学園長ですら未だに“ワタシとキティは魔力を隠している”って誤解してるんだし、雑多どもは封印を疑ってすらいない」

ワタシ達がいくらサウザウンドマスターや近衛学園長の保護下にあるとされているとは言え、この麻帆良へ滞在出来る最大の理由。

関東魔法協会ひいてはその上役が、雑多の魔法使いどもが納得する理由。

それこそがコレです。

不朽不滅の魔女トバリ。
不老不死の魔法使いエヴァンジェリン。
両名はサウザウンドマスターに敗れた。
そしてその魔力を封印され、一般人として麻帆良へ縛り付けられた。
サウザウンドマスターの慈悲と願いのもと、保護され学生をさせられている。

けれどその真実は…

「欠片も思わないんだろうね、サウザウンドマスターも近衛近右衛門も戦闘にすらならなかったなんて。軽くあしらわれて不平等な条約を結ばされたなんて」

利用されているのは彼等。

幻の封印を楯に、実のトコロ、ワタシ達はゆっくりスローライフしているだけ。
ストーカーと迷惑隣人多い土地なのが玉に傷ですね。

「そして、夢にも思わない。レベルが違いすぎて、次元が違いすぎて、ワタシとキティの魔力を感じることすら出来ていないだけなんて。」

ただワタシ達が強すぎるだけ。
ただ彼等が弱すぎるだけ。

それは仕方のないコト。
だってワタシは魔女トバリ。
チート美少女汀ちゃんですからね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いやー“雪芽”初めてなんだね。そりゃあ楽しみだろうなぁ。しかし可愛い子ぞろいで人形自慢か、なごむねぇ。むしろ親御さんが娘自慢だろう、なぁ？」

「（なるほど、ドライバーさんにはマイロードが姉さんを自慢しているように認識しているのですね、違和感のない認識阻害です）」

「次の信号曲がってすぐだよ、妹達に言ってやんな、お姉ちゃん」

「（…いえ、わたしが一番年下です。しかしなぜわたしは助手席に…おめかしをしたマイロードに見蕩れたのが敗因でしょう。更にどうやら今晩は千雨さんとお約束されたようですし…。こうなれば会談でのお酌は譲れません）わかりました。ありがとうございます」

第9話　ワタシ達とアイツラ　その2＊（後書き）

第9話更新。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

会談まで辿り着きませんでした…。
正義党のキャラ達に色々言われる場面の前に、汀が最強チートであるコトを示しておきたかったんです。
次回はもしかしたら“近衛、春野ケチョンケチョン事件”を回想として入れるかもです。

あと、ちらっと千雨関連で匂わせましたが、本作品では普通に人死がおきます。
今後ご注意を、です。

七さま　感想ありがとうございます！！
とっても励みになります。
次回こそは会談。
千雨の詳細ですとか、麻帆良との確執ですとか書きたいコトはいっぱいあります。
これからもがんばりますね！！

実は今日初めて評価をいただきました。
ｇｒａｎｄ病原には評価をいただけたコト自体がすごくうれしいです。

皆さんがついつい高評価しちゃうような、暇を見ては読んじゃうような作品目指してがんばります。
ありがとうございます。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１０話　ワタシ達とアイツラ　その３＊

静々と先導する女将さんについて歩きます。
外観も立派でしたけど、内装もかなりのものです。
やるなー、割烹雪芽。

そんな訳でワタシ達一行は、既に到着しているらしい近衛一門の待つ部屋へと案内されている最中です。

ワタシは外交モード。
基本的に外交はワタシ任せの、キティ。
千雨ちゃん茶々丸ちゃんは従者として、キチンとワタシの後ろに控えてくれています。

キティが抱えるチャチャゼロが何だか雰囲気に合いませんが、常にワタシの横を歩くキティが抱えていれば、いざってトキに役立ちますからね。

「こちら“萌芽の間”にございます」

どうやら着いたようです。
ではチート美少女汀ちゃん、外交モードいきますよ！！

まぁ、パワハラ外交ですけどねー。
ふふーふ、魔女におののけ雑多どもー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

店員さんが襖を開くと、そこは随分なお座敷です。
広いし調度品も素敵ですね。
キティとかこれ、みんなだけで来てたら大喜びじゃないですか？
ちぇー、可愛いキティが見れたのに。
きっとまた来よっと。

そのお部屋、中央の重厚感ある卓を挟んで片側に近衛一門が揃い踏みです。
近衛学園長と老け顔タカミチくんが卓に、他は一歩後ろに並んで座っています。
それでも各自ゆったりとスペースがありますよ。
てか、気持ち悪い熱視線。

「うむ、よう来てくれたの。とりあえずソチラに座っとくれ」

うん、この位置取りなら上座下座ではないようです。
和文化好きのキティが、即ギレするコトもないでしょう。
や、正直不安だったんですよー。

「待たせたかしら。約束通り全員で来たわよ。貴方達も…随分な面子ね」

彼等とは反対側に腰をおろします。
コチラは全員で卓に。
あ、キティちょっとそわそわしてる。
ふふ、お部屋が気に入ったんですね、らぶー。

「ふぉっふぉっ。なぁに、重要な会談じゃ。此れくらい当然じゃよ。では取り敢えず人数分の茶を頼むぞい。その後は呼ぶまで人払いを

頼む」

近衛学園長が店員さんに指示を出すと、直ぐ様お茶とお菓子が配られました。
外で待ってたんですね…なんかごめん。
おいしそー、ずず…うん、いいお茶だ。

しかし彼の物言い、場合により戦闘も辞さないって訳ですかね？
身の程知らずです。
まぁいいですけど。

「……ふむ、では最初に防諜と人払いの結界を敷くぞい。わしでよいかの？」

「えぇ。コチラも道具なら持っているけど、お任せするわ。くれぐれも余計な気はまわさないで」

面倒ですからね。
むぐむぐ、お菓子もウマイ。

……どうやら言った通りの結界が敷かれたようです。
てか、後で何人か変な顔してますね。
どうせわからないんだから何か仕掛けるべきだ…とか思ってるのでしょう。
ワタシ達の現状を知る近衛学園長には、まかり間違っても選べない選択肢です。

あ、だからわざわざ自分で敷いたのか。
万が一、雑多どもに余計なコトされないようにと。

「……さて、双方話しはあるじゃろうが、先ずは現状の確認をするぞい。皆しばらくは聞いておってくれ」

ここは毎回お約束です。
気勢を削ぐ意味でもね。

「ええ、どうぞ。何かあれば口を挟むわ」

でも面倒だからちゃんとやってくださいね、近衛学園長。

「まず彼女ら、緒々嶋汀くんとエヴァンジェリン・マクダウェルくんについてじゃ」

近衛学園長とワタシは親しくもないし、ましてや友人なんかではないので、キティのミドルネームは呼びません呼ばせませんとも。

「両名はサウザウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの保護下にある。そして彼の依頼で、旧知たるわしのもとで保護されておる。その際、彼女等の魔力は皆が感じての通りじゃ。つまり2人は一般人としてこの麻帆良で生活、学生をしておる」

ワタシ達の魔力は現状誰も感知出来ません。
この言い方なら封印されていると思い込むでしょうね。
麻帆良大結界は人ならざるものを封じるらしいですし。
ふふーふ、ワタシとキティには効果なかったですけど。

まぁ、キティは真祖の吸血鬼です。
鍛えに鍛えワタシと共にいるいまや、人より精霊とかに近いです。
てか種族とか超越してますかね。

いまさら世界樹程度、なんぼのもんじゃい！！ですよね。
きゃーキティ、かっこいい！！

そしてワタシは魔女。
チート美少女汀ちゃんですし。

「ナギとの取り決めで、彼女等は自宅兼工房を所得しておる。彼の保護下、わしらの保護、監督下にあるとはいえ何が起こるかわからんからの。その自宅兼工房に結界を敷くこと、内部のプライバシーを保証すること、これに抵触した者への抵抗、これらを認めておる」

つまり、我が家に手を出すな！！ですね。
チート魔女の工房をなめてもらっちゃいけません。

麻帆良へ来た当初はびっくりする人数が自宅に敷いた結界に干渉。
それにより、気絶後、学園長室へ直接転移して行きましたからね。
この結界、近衛学園長の保護ですー、と誤魔化すのにとっても便利です。
もちろんワタシの謹製ですよー。

てかいまだに誰1人破れてません。
第1の結界なのに、まだまだいっぱいあるのになー。

「ついで、彼女等の魔法、戦闘技能についてじゃ。一般人として暮らしておるのじゃから、基本的に魔法行使、戦闘行動は禁止じゃ。彼女等の現状でも、魔法は魔道具や触媒、魔法薬などでなんとかなるものがあるからの。自己防衛、秘匿に関する事、その他例外を除いて原則禁止じゃ。ただし、自宅工房内ではこの限りではない。戦闘行動もまた然り、彼女等は近接戦闘もこなすしの。これを遵守させるために、自宅より外出する際には監視をつけておる」

自宅内なら好きにしなよ、ですね。
ワタシもキティも研究者肌なトコロありますし。
魔法の研究、開発や自己鍛練など時間がいくらあっても足りません。
あと、いま“その他例外”って言われたトキに何人か反応しましたね。
まぁ千雨ちゃんのコトがあってから、追加された訳ですから、思うトコロもあるのでしょう。

「これが破られた場合、わしの一存で処分出来る事になっておる。ナギからもくれぐれも、と頼まれておるからの。反面彼女等が魔法等を使わざるをえない状態に陥らないようにするのがわしの役目じゃ。わしには彼女等が一般人として、学生として暮らせる環境を保つ義務があるんじゃ。サウザウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドもこの場にいれば同じじゃろう」

英雄くんの名前を連呼するたび、近衛一門の連中がキラキラしてます…
うわぁ…変態っぽいです。
キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃんからもげんなりオーラがでてますよ…

「あとは…彼女等の従者じゃな。マクダウェルくんの従者、魔法人形チャチャゼロは彼女等と共にここへ来ておる。主たる彼女等のと同じ制約で追従を認めたわい。他に生活用と護衛としての従者の自作はナギもわしも承知しとる。彼女等の現状では結局12年近くかかったが、結果産まれたのがそこの2人じゃな」

あ、雑多がすっごい何か言いたげです。

おぉ食いしばってる。

千雨ちゃんのコトでしょう。
まぁ千雨ちゃんはもともと半一般人ですし。
コトのきっかけはソッチでしょーに。

てか12年近くかかったんじゃなくて、キティと2人だけの生活を楽しんでいたんです。
掃除とかはドールで十分だし。
四六時中キティとイチャコラする生活、素敵でした。
溶け合うように、混じり合うようにして暮らしていたんです。

あ、いまだってすっごい素敵ですよ。
こんなつまんない会談早く終わらないでしょうか。
はーやーくーかーえーりーたーいー。

「2人にも同じような制約を言い聞かせとる。もしもの責任は当然、主に帰属する。従者は今の人数で十分と判断したうえで、この三名を彼女等の従者と認めた。千雨くん、後で正式な自己紹介を頼むぞい。」

千雨ちゃんが頷いて是とします。
あちら側と違って、落ち着いているようで何よりです。

「まとめようかの。従者を含めた彼女等の5名はサウザウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの名に於いて保護されておる。わしはそれに賛同し、彼女等の保護、監視を行っておる。彼女等はこの麻帆良に於いては一般学生、守られる存在じゃ。これに異を唱えるは、サウザウンドマスターとわしに異を唱えるものとする。以上じゃ」

ま、ここまでは問題なしですね。
うんうん、最近はここに来れないような雑多のざわめきが煩くなって来ていますし。
近衛学園長の焦りが最後あたりに感じられます。

所々に穴と言うか突っ込み所のある説明でしたが、英雄くん効果でがんばりましたね。

まぁ必死にもなるか。
本気でワタシ達と対立したのなら、彼等魔法使いどもは1人たりとも生き残れませんから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会談は進んでいますが、ワタシとしては退屈すぎるので、さほど真面目になれません。
うー、たいくつ～。

卓に向かって真ん中左にワタシ、真ん中右にキティが座っています。
ワタシと近衛学園長、キティと老け顔タカミチくんが対面です。

更にはワタシの左に千雨ちゃん。
キティの右に茶々丸ちゃん。
チャチャゼロは変わらずキティがだっこです。

これはあれですね、隠れてイチャコラしろってコトですよね。

ワタシの左手は千雨ちゃんと繋ぎあってすりすり。
ワタシの右手はキティと繋ぎあってなでなで。
ふふーふ、キティも千雨ちゃんもらぶー。
だきしめたいなぁ。

つい、お互いの足も触ったりして、もぞもぞしちゃったりです。
ばれてないばれてない、てへり。
ごめんね茶々丸ちゃん、ちょっぴりなかまはずれだね。
あとでね。

とまぁ、隠れイチャコラは卓の下で、ですから彼等には見えてないです。
流石にそれくらいはねぇ。

はー、早く終わらないでしょうか。
はーやーくーかーえーりーたーいー。

でも残念ながら会談はまだ始まったばかりなんですよねー。

第１０話　ワタシ達とアイツラ　その３＊（後書き）

第１０話更新。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

説明ながいしご都合、ですよね。
いや、ごめんなさいコレ以上にはちょっと。
近衛一門では、近衛学園長と老け顔タカミチくんしか汀とエヴァが素の状態だとは知りません。
てか世界中でも後は英雄くんだけ。
だとしても、コレで正義かぶれ達は納得するでしょうか？
自宅工房内自由とかどんだけですか…
た、たぶん英雄くんぱわーの恩恵です！！
近衛学園長と老け顔タカミチくんはこの１５年間必死に、そりゃもう必死に部下たちを抑えています。
原作のエヴァにした以上にです。
でないとホントに殺されるし。

そろそろ千雨のターンですね。
本作品の千雨が若干口悪い理由が明らかに！？

しかしこの会談どれくらいかかるんだろう…
が、がんばります！！

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１１話　ワタシ達とアイツラ　その４＊

キティの瑞々しい指先がゆっくりとワタシの手をなぞる。
五本の指がそれぞれの動きで絡む。
指の股を擦り間接を撫で爪に触れる。
這うように、すがるように、まるで繋がりを求めるように。

ワタシからも指を絡める。
キティの動きに逆らって、でも次第に同調するように、ちいさないたずらです。
って、あわ、そくほかくされたー。

反対の手は千雨ちゃんと。
きゅっ、て恋人つなぎです。
たまに親指をすりあわせて。
しっとりと掌を重ね合う。
きゅっ、きゅっ、てなんだか確かめるみたいに。

抱き締めるつもりできゅっ、てしてあげる。
大丈夫だよ、って包み込むように。
ふふーふ、あまえんぼさんめー。

「緒々嶋くん達からなにか補足はあるかの？」

ああはい、ワタシがチート美少女緒々嶋汀です。
卓下のおててイチャコラで、面倒な会談をのりきろー、おー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そうねぇ…まずは千雨のコトかしら。ここ最近の会談の度に言っているけれど…。彼女はワタシの従者、本人も納得している。貴方達にとやかく言われる筋合いはないの。それでも煩いから、近衛学園長には経緯も原因も説明したうえで承知させたわ。これ以上どうして欲しいの？」

「黙れ！！穢らわしい魔女め！！長谷川を解放しろ！！何故この魔女を処罰しないのです学園長！！」

あーあ…。
てかいまさら長谷川って言われましたね。
叫んでるガンドルフィーニ教諭と…他にもどうやら何人か事情を知らない人がいるみたいです。

「近衛学園長、彼等は事情を知らないのね？」

「……うむ、あれは極秘事項じゃったからの。しかし説明せねば、皆納得せんようじゃ。聴いてくれんか、千雨くんのことは関東魔法協会にとって至極重要な事件が絡んどるんじゃ。それを今から説明しよう。じゃが間違っても他言は許されんぞ。高畑くん、千雨くん、よいな？」

「はい学園長。僕は覚悟しています」

何が覚悟ですか。
ふー、まぁ老け顔はもういいです。

千雨ちゃんもそう言ってましたし。

その千雨ちゃんはやっぱり頷いて返事です。
そんな仕草も可愛いなー。

「ならワタシから。当事者の目線で話しましょう。いいわね千雨？」

きゅっ、と繋がりを強めながら千雨ちゃんと目を合わせます。
うん、力強い瞳をしていますね。
どうやら大丈夫みたいです。

「ああ。1から説明して、私たちの関係にこれ以上口出し出来ないようにしてやってくれ」

任せて千雨ちゃん。
ワタシの千雨ちゃん。
絶対に離さないから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれは2年と少し前、7月の終わりだったわ。
あの夜のワタシとエヴァは、家から30分ほど離れたハイキングコースを歩いていたの。
（もちろんデートです。）
2人で星を観に行った帰り道。
（星も綺麗だったけれど、星空の下のキティってば神秘的なまでの可愛さでした。）
あぁ、夜間の、普段なら立ち寄らない場所への移動だったから近衛

学園長には一報入れてあったわ。
（そうしないと色々煩いんですよ。）
その道中、ちょうど中頃かしら、付近に結界を探知したわ。
ワタシ達の家から程近い場所に不用意な結界を。
当然、自衛の為に対処にあたったの。
（この時点では、また正義かぶれの襲撃かと思っていました）
近衛学園長に連絡をすると、可能なら対処してほしい、との許可も取れたわ。
結界は単なる認識阻害。
でもなかなか高度な結界だったわ。
何かを隠していたいかったのだろうけれど、アレでは慎重になりすぎね。
普通の相手ならともかく、ワタシ達からすればむしろ強烈な違和感が森の中でぽっかりと浮き上がっているように感じたわ。
結界の質から見て罠の類いでは無かったから、ワタシ達はすぐに踏み込んだわ。
（本当は隔離の結界も敷いてあったけど、ワタシには有って無いようなモノでしたね。）
結界内ではね、おぞましい儀式が行われていたのよ。
人の血肉を、命を生け贄に式神を強化し従える儀式。
（残念ながら実際はさして珍しい儀式ではありませんけれど。）
そこにいたのは驚いてこちらを見る男が1人。
そして陣の上で少女を饕餮（むさぼ）る巨大な獣。
その少女こそが千雨だったわ。
当時は名前も知らなかったけれど。
幸か不幸か千雨は意識が混濁していたの。
あとで聞いても、どうやら連れ去られる前に何かしらの処置を受けたようね。
千雨は頭や胸、生存に必要な器官を残すようにして喰われていたわ。
血肉と、命をゆっくりと捧げる儀式だったんでしょう。

陣の効果か出血がほとんどなかったのも特徴的だったわね。
（でも、もう普通の手段では助からないのが目に見えていました。）
男は突然乱入したワタシ達相当動揺した様子で、慌てて式神に指示を出したわ。
そしてそれが男の最後。
意思のない、狂気だけに染まった眼差しを一瞬ワタシ達へと向けた式神は、即座に男へと襲いかかったわ。
あの儀式は恐らく、本来使役できない位の式神を強引に従え狂化する儀式だったんでしょう。
意思を失った式神は使役主の命令下に破壊のみを行う、そのはずだった。
でも相手が悪かったわね。
不朽不滅の魔女と真祖の吸血鬼、本能を強引に狂化された式神は、ワタシ達との格の違いを一瞬で感じ取った。
でも命令は破壊。
結果式神は従うはずの使役主を破壊し尽くしたの。
（本当はワタシが狂化と従属を打ち消しただけ。派手な儀式の割にはあまりに稚拙な術式でした。）
そして男の絶命と同時に結界も式神も消滅。
消え逝く式神が意思の戻った眼差しをこちらに向けたのが、今でも印象に残っているわ。
（びっくもふもふでした。時間があれば思う存分撫で回したのになー。）
でもそうなると千雨を生き長らえさせていた陣も消滅したのよ。
ワタシ達は急いで緊急用に持ち歩いていた延命結界道具を発動したわ。
（この時点では見知らぬ他人。別に放って帰ってもよかったんですけどね）
そして近衛学園長へと連絡を試みた。
何度か試したけれど、繋がらなかったわ。

だからワタシは決断したの。
千雨の魂と記憶を、所持していた自前の従者用義体に移し、肉体は封印することにしたわ。
（なにせあまりにも都合がよかったんです。目の前で死に逝く少女。近衛学園長には連絡不通。そしてワタシはこんなコトもあればと、完成以来従者用義体を携帯していたんです。）
そして後に肉体の補修を行うつもりだった。
その場ではそれ以上のコトをするにはあまりに不確定要素が多すぎたもの。
上手くいけば、元の肉体に戻ることも出来るでしょう。
最悪、人間に極力近い肉体を近衛学園長に用意させるつもりだったわ。
（とはいえ無理に従者にするつもりはありませんでした。本人が嫌がるなら元に戻すつもりでした。このトキはまだ。）
ワタシ達はすぐさま行動を開始したわ。
半ば肉体と解離していた魂を、記憶を僅かにも漏らさずに義体へ移したわ。
（実はコレそんな簡単になんてコトは有り得ない、とてつもない儀式なんですが、ワタシにはよゆー。）
この時点で千雨は意識をうっすら取り戻していたそうよ。
まだ定着が完全ではなかったからか、ワタシの肩越しにモノを見ていたらしいわ。
（ホントはわざとです。千雨ちゃんにはキチンと考えて今後を決めて欲しかったから。）
そして肉体に封印を施そうと道具を準備し終えて発動を始めている最中、彼等が来たわ。
結界が解け、強大な式神が消えた。
さらに魔法道具頼りとはいえ、魂移しの儀式も行われたその場所を、流石に感知出来ないほど落ちぶれてはいなかったようね。
（魂移しは完全自力、さらに秘匿でやったので、実は結界と式神の

消滅を探知したらしいです。）
そこにいる高畑くんが複数の魔法使いを従えて駆け付けたわ。
高畑くんはワタシ達と状況を確認するやいなや、ご自慢の居合い拳を放ったわ。
ワタシの封印へ。
（問答無用でした。ホント何考えてるんでしょう。まぁ彼等の選択なので、防がずスルーしました。繰返しますが、この段階ではまだ千雨ちゃんは他人だったのです。）
彼には気付けなかったんでしょうね。
その封印が千雨の肉体をぎりぎり繋ぎ止めていたコトに。
いいえ、もしかしたら千雨を解放するために放ったのかもしれないわね。
封印ではなく、儀式の真っ最中だとでも思ったのかしら。
とにかく所詮道具、しかも緊急治療用の封印なんて防御力なんて無いわ。
封印はあまりにあっさり破壊され、その居合い拳はぎりぎりの肉体に止めをさした。
本当にぎりぎりの肉体はあっさり死んだわ。
彼が、高畑くんが殺したのよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

話しはまだまだ終わりません。
その晩に起きていたコト。
正義かぶれ達の思惑。
千雨ちゃんの真実。

千雨ちゃんの手をぎゅっ、と握る。
千雨ちゃん、大好きです。
だから全部暴いて、そして言い切ってしまいましょう。

千雨ちゃんはワタシの従者。
それ以外にはないんだって。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ちょっ！？やんっ！？
くすぐったいですキティ！？

えぇ？ここで嫉妬！？
いや、キティのコトこれ以上なく愛してますから！！

今（多分）シリアスなんですってば！！

第１１話　ワタシ達とアイツラ　その４＊（後書き）

第１１話更新。
ｇｒａｎｄ病原です、こんばんわ。

グロテスク表現注意でした。
一応なるべく控え目にしたつもりです。
苦手だった皆さんはごめんなさい。

話しは相変わらず続きます。
長いですね、どうしよう…
でも続けるしか…

千雨はまだまだ酷い目にあっていたコトが発覚していきます。
あ、ｇｒａｎｄ病原は千雨好きですからね？
ホントですよ？

ちょっと遅れてしまって、後半駆け足でした。
ごめんなさい。
明日からはもっとがんばります！！

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第12話　ワタシ達とアイツラ　その5

「貴様…！！ふざけた事を！！」

…ふっ…くっ、ふふ……くぅっ…

「待つんじゃ！！……皆もじゃ、最後まで聞きなさい。もし彼女が間違いを言うたなら、わしと高畑くんがきちんと訂正する。のう？」

…ん！！……くっ、くぅ……

「はい…。彼女が言ったことは事実です。あの晩は、2年前の麻帆良大侵攻の晩だったんです。」

…って！？ふぇ！？千雨ちゃんまで！？…やん！？…

「ご存知の通りあの日は麻帆良結界の外部からの侵攻と、内部からの異質な召喚が同時に起きていました。僕は結界内部に多数出現した召喚陣を破壊するために行動していて…。そして千雨くんの事件が起きてしまったんです」

……もうむり！！

キティ、千雨ちゃんもうむりです！！

「ならば！！それは高畑先生に非はないでしょう！！あの事件の被害が抑えられたのは、麻帆良中の侵入者どもを制圧した高畑先生の功労だと聞き及んでいます！！そもそも生け贄にされた子供たちは、実に口惜しいが誰も助かっていない…。長谷川の事も同様だったはずです。貴方は正義の魔法使いとして寧ろ立派だった！！」

2人でふくらはぎくすぐらないで～！？
わ、笑っちゃう～！！

「うむ、わしも高畑くんを処罰しようとは思わなんだ。先の功労者でもあるしの。だが、事態はまだ続きがあったんじゃ。緒々嶋くん、頼めるかの」

…ふぁ…お、終わり？
くすぐりたいむ終わり？
…あぁ、ワタシに話が振られたからですか。

「……えぇ。なら、続けるわ。質問は後にまわしなさいね」

…ふぃー、しかし助かりましたね。
キティと千雨ちゃんにくすぐられて、会談真っ最中に笑い転げるトコロだったチート美少女汀です。

流石にもうダメかと…。
キティもー、それに千雨ちゃんまで！！
後でひどいですよー！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まぁその後はの展開は早かったわね。
なにせすぐに近衛学園長から指示が来たのよ。
（遠見の魔法でチェックですね。タカミチくんが来る少し前から感知していましたよ。）

ワタシ達は学園長室へ出頭。
高畑くんは遊撃を続行。
連れ立って来た魔法使いがその場の処理を任されたわ。
（吹き飛んだ千雨ちゃんを見たタカミチくんは、ワタシを相当睨んでましたよ。なんのつもりですかね。）
あぁ、麻帆良大侵攻の方はこの後の高畑くんや魔法使い達が、なんとか押し止めたらしいわね。
事件の解決までワタシ達は学園長室で待機していたわよ。
明け方までずっとよ？
（もちろんこの間に千雨ちゃんと状況の確認をしました。完全でない魂移し状態の千雨ちゃんは心の起伏がある程度抑制されていました。そのおかげで自身の現状を受け入れられたようです。身体出来てからは暫く大変でしたけれど。）
その後、戻った近衛学園長にワタシ達はコトの顛末を説明したわ。
そして千雨の身元の調査を大至急依頼した。
このトキの千雨は不安定で、義体の製作者であるワタシが慎重に扱わないといけなかったの。
そして千雨の調整の為にも、可能な限りの情報を必要としていた。
（本人との意志疎通が取れていたので、ホントは不要でしたが、彼女の中には普通ではない力があったので都合がよかったんです。）
それを踏まえて、ワタシ達は千雨と共に帰宅する旨を伝えたわ。
すると近衛学園長は暫く悩んだ後に、許可を出したわね。

そうしてその日は終わった。
でも、千雨の問題は次々に露見したわ。

ある程度安定した本人からワタシが知った限りを学園側へ伝え、そうして始まった調査は出足から躓いたのよ。
長谷川家の夫妻は千雨の、そもそも子供の存在を否定したの。
お察し通り魔法による記憶処理が行われていたわ。

でもね、恐らく貴方達の予想の逆ね。
長谷川夫妻は“千雨という名前の子供を育てる”と記憶処理されていたの。
いえ、意識処理かしら？
とにかく、恐らく術者が死んだせいでその効果が切れ、夫妻にはなかったコトになったの。
千雨という存在自体がね。
（千雨ちゃんをチラリと見ます。うん、大丈夫ですね。）
魔法による処理の内容がおかしい？
いいえ、多分これが妥当なのよ。
夫妻が行ってきたのは、単なる育児ね。
本来の意味ではない、子供を育てる、って言葉そのまま最低限の行動だったの。
千雨の言では、何もなかった、そうよ。
確かに育てられたけれど、会話は必要性のあるもののみ。
邪険にはされなくても必要ともされない。
与えられる物も必要十分だけれど、過剰や娯楽用は一切なし。
完全に事務的な関係だったそうよ。
調べると、千雨には何故か部屋が与えられず、リビングの片隅にあるカラーボックスが彼女のスペースだったらしいわ。
異質な魔法による処理は、家族に正しい関係を作らせず、ある種の異様な空間での生活を強いていたって訳ね。
これでは、家族感情もなにもあったものではないわ。
（千雨ちゃんに聞いていたけれど、あまりに異常です。彼女の“認識”があったとはいえ、それでも。）

さらに、これは千雨だけの問題ではなかったの。
各学園などの出欠状況から判断された、麻帆良大侵攻での被害者。
その中でも生け贄にされたと予想される子供の親は、例外なくその存在を否定したわ。

千雨も含め、子供用の家財道具があったにも関わらずね。
記録と証言では赤ん坊の頃から各家庭にいたはずなのに。
これはとてつもない事態だわ。
１０年近くものあいだ、十数組の偽物の家族がこの麻帆良に存在していたの。
調査の結果、犠牲者の子供達はどの夫妻とも血縁関係がないことも判明したそうよ。
もちろん千雨もね。
（だから千雨はもう長谷川を名乗らないのです。育てられた感謝はある、でもやっぱり家族とは思えないそうです。千雨の“認識”は歪な家庭を誤魔化すコトも許さなかった。物思いがつく頃からずっと、心が他人だと判断していたそうです。でも今はワタシ達がいます！！大好きですよ千雨ちゃん。）
何者かが麻帆良に住む罪もない夫妻に魔法による処理を行い、誰とも知れない子供を育てさせたのね。
恐らく、麻帆良大侵攻のためだけに。
そして、それをしたのが例の召喚者たち。
麻帆良結界の内部で一斉に召喚を行った者達よ。
彼等は、この麻帆良に魔法先生として長年在籍している魔法使いだったの。
捕縛された者は例外なく自害、他は皆死亡したけれど、状況証拠からいって間違いないそうよ。
（実は証拠があったそうですが、極秘とされています。）
彼等は随分と地味で勤勉な魔法先生だったらしいわ。
貴方達が不得意な事務仕事、書類仕事を率先してこなし、数人はそれなりの立場もあったようね。
子供達を紛れ込まされて、気付きも出来なかった訳だわ。
何故彼等がこんな微妙な操作で子供達を紛れ込ませたのかはわからない。
でもコレで千雨に、子供達に帰る場所がないコトはわかったでしょ

う？

ワタシは決して短くない時間を千雨と過ごし、話し合って彼女を従者にすると決めたわ。
千雨だってもちろん自分の意思でそれを選択した。何度も言わせないで。

千雨は不朽不滅の魔女トバリの従者なの。
千雨はワタシのものよ。
（そう、ワタシは千雨ちゃんを愛しています。）

どう、わかったかしら？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

実はまだ言っていないコトがいくらか存在します。

今この場で話すと、多分ギャーギャーと喚く連中がいるだろうから割愛しました。
近衛学園長とタカミチくんは認識していますけど、彼等も同じ判断でしょう。

これ以上騒がれるとかホントかんべんー。

1つは千雨ちゃん達、生け贄の子供は力のある血筋だったであろうコトです。
生け贄に相応しい血筋の子供だったから、わざわざ外部から紛れ込

ませたのでしょう。

事実、千雨ちゃんには精神操作、干渉に対する異常な耐性があります。
ワタシが魂移しの際に感じた力はコレです。
そして千雨ちゃんに興味を持ち、従者へと持ち掛けた最初の理由も。

あ、今は千雨ちゃん丸ごと愛してますからね。
良く考えたら魔法とかで操作、干渉されない程度ワタシ達では当然ですし。
千雨ちゃんのも従者化で、ばーじょんあっぷの完全無効化になってます。

千雨ちゃんかっけーひゅー。
ふふーふ、らぶだよー。

で、恐らく他の子供達にもなんらかがあったのでしょう。

そしてもう1つ。
麻帆良大侵攻が規模に反してあまりに低被害だったコトの要因。
それが千雨ちゃんの存在が切っ掛けであるコトです。

千雨ちゃんのあまりにも強い精神干渉耐性は、麻帆良大結界の効果の1つである“認識阻害”を無効化していました。
この認識阻害とは、麻帆良学園都市内に存在する本来は異常な、異質なモノに対して「麻帆良ならあり得る、当然だ」と認識させるものです。

それが千雨ちゃんには、ほぼ効かなかった。

世界樹、図書館島、学園内の科学技術。
住民達の突き抜けた能力に、アンバランスな精神面。
欠けすぎている危機意識や安全配慮。
そして異常に軽いノリ。
そもそもの学園都市の規模も異常です。

コレ等を正しく異常と認識した千雨ちゃんでしたが、麻帆良に於いてはむしろソレが平常なのです。

ワタシ達が麻帆良に馴染めるハズもないのは、その認識阻害が微塵も作用しないからです。

魔女だったり吸血鬼だったり、その従者だったりしますけれど。
女の子どうしで愛しあっていますけれど。
キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、らぶー！！

それらが現代の世間的にどうなのかも含めてキチンと常識、把握していますから。
長生きし過ぎると、世界に紛れ込むのにも気を使うんですよ。

で、麻帆良はその常識の把握すら…ですからね。
会話自体の成立が危ぶまれるくらいですもん。

話を戻しますね。
異常に悩み、訴えるほど千雨ちゃんは孤立していきました。
家族は問題外。
学園のクラスメイトも先生も、近所の住民も、みんな千雨ちゃんこそが異常で異質と非難しました。

そしてその環境は端から見れば異常でしたが、一般人には当然気付けません。
気付いたのは魔法使い達でした。

千雨ちゃんの所属していた学校の魔法先生ではなく、広域指導員と呼ばれる魔法使いが彼女を不審に思ったのです。
報告を受けた近衛学園長は、監視と調査を命じました。
彼女のそれは、この麻帆良に於いて異常過ぎたのですから。

すると千雨ちゃん一家の不自然な生活が浮かび上がりました。
調べればあっさりと判明する、人為的な家庭。
これまで気付けなかったのは、邪魔があったから。
明らかな黒幕が存在していたのです。

もちろん黒幕とは麻帆良大侵攻での召喚者です。
裏切者、いえ恐らく潜入工作員達です。

関東魔法協会は事態を重く見ていました。
千雨ちゃん一家への干渉を控え、監視、調査を進めるコトにしたのです。

学園都市の責任者として、これは正しい判断なのかもしれません。
ですが、この判断が生け贄の子供達を喪う結果をもたらしたのです。

慎重な調査により、大侵攻の日取りまでを掴んだ学園側でしたが、黒幕の全貌も、千雨ちゃんの、子供達の役割を知るコトも出来なかったのですから。

結果、生け贄の子供達と引き換えに、麻帆良大侵攻に対する準備が整った訳です。

ただ、結界内部の召喚に対しては後手にまわり、幾らかの被害を出しました。

そして彼等はその被害を“尊い犠牲”と呼ぶのです。
ワタシの肩越しに説明を聞いていた千雨ちゃんの目の前で“正義は下された”と声だかに。

呆れます。
しかもまだまだ叩けば埃はでますよ。

近衛学園長が千雨ちゃんの調査を命じた相手は黒幕の一人で、進捗なんか全然なかったりですとか。
でも、コレが重要だったんですね。

大侵攻の日取りは、不慮の事故で入院したその調査役の持ち物から偶然入手したですとか。
どうやら無茶な指示で忙しかったみたいです。

でも、それを入手したのは大侵攻の直前で、慌てて準備したせいで、千雨ちゃん達の拉致を完全に見過ごしたりですとか。

千雨ちゃんすら呆れていましたからね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はぁー、喉かわきました。
外交モードも大変です。

お茶、お茶、って両手塞がってますよー？

あのー、キティ？
あ、ダメですか。
むぅ、そんなかわいい顔しないでー。
離しません、離したりしませんから！！
ほらほらぎゅー！！

で、その、千雨ちゃん？
あ、嘘ですウソ。
え？いや口移しは今はむりー。
後でしましょう？
ね？ぎゅっ！！どうだー。

のどかわいたなぁ～。
あぁ、だから口移しは後で！！

第１２話　ワタシ達とアイツラ　その５（後書き）

第１２話更新。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。

ながい…
我ながら驚くほどながい…
そして読みにくいですね…
赤〇ン先生添削してください…

千雨捏造は実に熱が入ります。
コレ、茶々丸捏造のトキは大丈夫なんでしょうか？

うん、後ろ向きでもアレですので、次回の話しでもしますね。

いい加減に読みにくい独白風はおしまいです。
イチャコラ足りないですしね。
学園長の前でイチャコラする…の？
うぅむ…むつかしいです。
でもかんばります！！

少し前にタグを微妙に入れ換えてから、アクセス増加がとてもすごいんですよ。
読んでくれた皆さんに、楽しんでいただけているのなら、とてもとてもうれしいです。
どうぞこれからも読んであげてください。
皆さんありがとうございます！！

感想に関してはｇｒａｎｄ病原の活動報告にてお礼申し上げております。
ちょっと長いので。
そちらもどうぞ。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１３話　会談中だけど回想　その１＊

……足、崩していいですか？

「……学園長、高畑先生、否定は…されないのですか。我々が知り得ていたものとはあまりにも…。何故隠されていたのですか！？」

こーきゅーわしつ、に相応しく、なんとなく正座していたんですけれど…
そろそろ崩していいですか？

「…わしらは事態を重く受け止める事にしてのう。主犯格は皆死に、事件は終わったと判断された。情報漏洩を危惧し、極一部のみが真相を知る事となったんじゃ」

なんて言うのでしょう…
温度差？

「我々は…裏切者の死を悼んでいたのか…」

彼等は彼等で一生懸命なんですよ？
ワタシにもちゃんとわかってまいす。

でもなー。
千雨ちゃんが乗り越えている以上、もういいかなぁ…って。

「お話しを邪魔するようで悪いけれど、そろそろサウザンドマスターの映像記録証文の確認でもしましょうか。貴方達の事情も察するけれど、ワタシ達の前では話せないコト多いでしょう？まずは会談

を済ませてしまいましょうよ」

もうめんどくさい。
はやくかえりたい。
早く千雨ちゃんとイチャコラしたい、チート美少女汀です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…うむ、皆もすぐには受け入れられんじゃろうしのぅ。休憩でも挟みたいところじゃが…そうじゃの、そうしようかの」

近衛学園長も察し悪くないですね。
さっさと確認するだけ確認させて取り敢えず解散しましょう～、な流れを作り始めました。

眼がね、彼の眼だけが辛そうでもなんでもないですもん。
真横でタカミチくんが自責に顔しかめてますけど。

「茶々丸、お願い」

ワタシいま両手に華状態継続中。
愛しいワタシだけの華。
ふふーふ、らぶー。

あ、茶々丸ちゃん後ろに置いたポーチに入ってますよ。
うん、それです。
ありがとう、あとでいっぱいお礼しますよ～。
いっぱい、ね。

「此方のはここにあるぞい」

１５ｃｍ四方の金属のプレート。
描かれた魔方陣を、ぴったり半分になるように分割されています。
それを合わせるコトで、サウザンドマスターがぽっぷあっぷ。
ワタシに強制された証言を喋り出します。

「よう、ナギ・スプリングフィールドだ…」

コレ作ってからもう１５年ですかぁ…
家族も増えたし、研究も進んだし、案外ココへ来たのも間違いではなかったみたいですね。

思い出すなぁ…
まだキティとチャチャゼロの３人だった頃…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ぷらぷらふらふら３桁年。

東に竜が暴れれば張り飛ばしに行き。
西に珍しい鉱石があれば掘り出しに行き。
世界を渡り歩いて西に東に。

旧世界に評判のケーキがあれば食べに行き。
魔法世界に話題の料理があれば食べに行き。
世界を跨いで北に南に。

世界間すら散歩道、チート美少女トバリです。

東の竜、微妙でしたね。
ワタシが近づくだけで、冷たい雨に濡れた子犬みたくなっちゃうんです。
逃げれもせずぶるぶると。

ある意味かわいい？

西の鉱石も、無駄足でした。
手持ちの宝石のがずっと希少だったみたいです。

最近の鉱山はまったく…

ケーキと料理？
あ、もちろん食べ専門です。
うん、美味しかったです！！

「で、結局この街に来たばかりなのに、アリアドネーへ行きたがる理由はなんなんだ？私が納得出来るような話なんだろな？」

あ、紹介が遅れました。
彼女はワタシのハニーです。
てへり、言っちゃった言っちゃった！！

名前はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
ミドルネームはアタナシア・キティ。
キティって呼べるのはワタシだけの特権。

真祖の吸血鬼。
不老不死の大魔法使い。
そしてワタシの奥さん。
そしてワタシの奥さん！！
大事だから2度言いました。

そうです！！
ワタシ達は愛し合っています！！
キティ、らぶー！！

「……アイスを食べたら、アリアドネーのクレープっぽいの食べたくなった！！」

「うろ覚えじゃないか！！おい、本気か？……はぁ、面倒だしさっさと転移でも……」

キティやさしぃ！！
じゃあ手を繋いで……っ！！

「まってキティ！！あの店見てよ！！」

がっつりと、どさくさ紛れに腕を組んで引き止めます。
キティぷにぷにすべすべー。
ワタシの自慢の美肌に勝るとも劣りませんね！！
ついすりすりー。

「……っと、魔法薬の店か？中途半端な店構えだし明らかにたいした事ないように…」

「カップルパフェだって！！キャンペーン中で、食べさせ合ってるとこ魔法写真にしてくれるみたいだよ！！」

魔法写真とはアレです、立体に浮き上がる映像的な写真。
キティと食べさせ合ってる写真欲しい！！

「恥ずかしいわ！！……今度、２人だけで食べている時になら、写真くらいいくらだって撮ってやるからここでは諦めろ」

ちぇー。
でもいいです、ほっぺた赤らめたキティって、すっごいかわいいし！！
でも言質は取りましたよ。

「ちぇー……きっとだよ？ね、腕このままでいい？」

「…あぁ。もうすっかり慣らされたからな、今では組んでいたほうが落ち着くくらいだ。それにお前は少し眼を離すと、すぐにどこぞの男に声かけられてるからな」

ふふーふ、絶対について行ったりしないって分かってるくせに。
キティが大好きなんですよ？
行く訳ないよー。

「２人でいたって、しょっちゅうナンパされるじゃん」

「……私の眼の付く場所にいろと言ってるんだ。離れるなよ汀、お前は私のものだ」

っ！！
うれしすぎます！！
最近（数百年単位）のキティは、少し照れながらも、きちんと言葉にしてくます！！

「……はい、キティ。ワタシはキティのものです。愛してます」

「あぁ、そして私は汀のものだ。愛している」

ああ、なんてしあわせ。
世界ってこんなに素敵。
キティとなら何百年でも何億年でも生きていけます！！
らぶー！！

転移で裏路地に飛び、幻術を解きます。

「ねぇキティ、今しあわせ？ワタシはすっごいしあわせ。産まれてきてよかった。魔女でよかった。キティと出会えて、愛し合えてよかった。キティと共に生きるコトがワタシのしあわせだよ」

キティの潤んだ瞳を覗き込みます。
間違いなくワタシも同じ瞳をしてる。

「ああ、しあわせだ。自分でも驚くほどしあわせだ。産まれてきてよかった。吸血鬼にされてよかった。汀と出会って、愛し合ってよかった。あの地獄の日々も、汀と共に生きるためならと思えばなんて事なかった。心からそう思う」

「愛してます」

「愛している」

……っん……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……ねぇキティ、今晩はちょっといいホテルに泊まろうよ？着いたばかりだし、いきなり襲われたりはないと思うし」

ワタシ達って実は賞金首なんですよ。
２人とも５００万ドルの。
まぁ基本的に好き勝手して生きていますからね。

あとワタシは不朽不滅で、キティは不老不死ですから。
権力者がいかにも欲しがりそうですよね。

街中ではちゃんと幻術を使って変装してますよ。
キティは変装しても美人！！
ワタシも当然美人ですよ！！
念入りに念入りに幻術を使ってますから。

「……ふ。それは泊まるって言えるのか？なぁ汀？私は寝かせてもらえるのか？どうなんだ、ほら言ってみろ？」

もちろんですよ！！

「吸血鬼は夜が本番！！」

「お前は魔女だろうが……いや、魔女も夜が本分か？」

「んー…？キティと一緒ってコトにしとくよ」

……でも結局どうなんでしょう？
ワタシってホントは睡眠とか必要ないんですよね。
でもまぁ、毎日キティをだっこしながら寝てるけど。
だって、おやすみキティすごい愛くるしすぎるんですもん！！

「……ん、まぁいいか。だがな、久しぶりに拠点を用意するんだろ？使った分は稼ぐぞ。私も色々研究したいしな。まずは先立つものだ」

そうなんですよね。
やっぱり色々好きにやるにもお金は必要ですし。
拠点を拵えたいですし、そろそろワタシ用のちゃんと働く従者も造りたいです。

……皮が高く売れるって言ってあったのに、戦闘に夢中になって全身ズタズタにするような従者はいらない。

「だよね。錦竜を狩っちゃったのも近いうちに露見するだろうし、今夜目一杯楽しんだら明日から派手に稼ごうよ。チマチマせずに、連中が来る前にがっつりさ！！」

「そうだな。ならまず今夜の目一杯だな…」

幻術を解いたキティはワタシより頭1つ分弱ちっさいのです。
ワタシ達はもう体つきに変化はないから、これからもずっとこの構図です。

キティの瞳に吸い込まれるように、ゆっくり顔を寄せます。

…ちゅっ…ちゅっ…ちゅっ…ちゅっ…

ひたい、まぶた、はな、ほほ、ちゅーを落としながら少しずつお互いの唇が近寄っていきます。

……っん…ちゅっ…ちゅむ…ふちゅ…

キティ、ワタシだけのキティ。
愛してます。

この愛が質量を持ったなら、世界なんか簡単に埋め尽くすでしょう。
総てを埋め尽くし、押し潰し、消し去り、世界を2人だけのものにするでしょう。
魂で繋がったキティにはそれが伝わっています。

そしてワタシには、キティ胸のうちが伝わる。
その愛が質量を持ったなら、世界なんか簡単に押し流すでしょう。
総てを押し流し、磨り潰し、飲み干し、世界を2人だけのものにするでしょう。

狂おしい程の愛で。

いえ、既にワタシ達は愛に狂っているのでしょう。
キティから伝わるそれも、ワタシから伝わるそれも。

自らを押し潰し、自らを押し流したのですから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あの……よ。無粋なのは分かってるんだが、ちょっといいか？……つーか、確かに裏路地だけど街中だぜ？あとその足下のガムテープでぐるぐるな人形はなんだ？」

……誰ですかこの赤毛。

第１３話　会談中だけど回想　その１＊（後書き）

第１３話更新。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。

遅くなってしまってごめんなさい。
唐突にエヴァのイチャコラ回です。
汀達が麻帆良に来ることになった経緯を、回想としてお届けします。
ナギさん微妙すぎる初登場。
次回は戦うけど…あっさりです。
てか一瞬？
チート美少女はバトルに興味ないんです。

感想枠にて質問とご意見が来ました。
・第１２話内にあった“正義の魔法使い”とはなんなのか。
・説明不足の汀一家と、麻帆良勢との対立は現状当然だろう。
です

まず正義の魔法使いについて。

コレは本作品内の対比表現です。
本作品のエヴァは“悪”を自称しません。
汀の影響で、善悪というある種の枠組みに、拘りを持たなくなったからです。
当然、汀も千雨も茶々丸もチャチャゼロも、善だの悪だのとか言いません。

彼女達、てか汀は好き勝手しているだけで“良いコト、悪いコト”なんて考えてませんからね。
ですがそうなると、汀一家と、学園勢を含めたネギ組との対立が表現的に弛くなります。
ですので彼らには“正義の魔法使い”を自称してもらい、汀一家との対立を明らかにしていくつもりです。
“正義の魔法使い”とは、なにか特別な存在を示す言葉ではなく、学園勢やネギが単に自称する時に使う程度と認識してください。

次に麻帆良勢との対立について。

汀は麻帆良の魔法使いをなんとも思っていません。
たまに愚痴っているのは、真夏にセミが五月蝿いなぁ…、とかそんなのと同レベルの愚痴です。
五月蝿くても、セミを説得して黙ってもらおうとも思わないし、全部殺し尽くそうとも思わないのです。
「麻帆良の地は魔法使いが五月蝿いよね」と、そんな風物詩的な捉え方をしています。
仲良くなる気が欠片もないので、対立は当然です。
説明とかもする気がないですし。
面倒になったら彼女達は麻帆良から去ればいいだけですからね。
コンビニとかあるし、一応拠点も認められてるし。
便利だから五月蝿過ぎないならいる、程度です。

こんなトコロでしょうか？
今後もご質問等ありましたら、お気軽にどうぞ。

では、ｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１４話　会談中だけど回想　その２

裏路地でキティとイチャコラしていたら、見知らぬ赤毛の青年に声をかけられました。

……なんのつもりでしょう？

２人だけの甘々時空を、十分に展開していたと思うんですが……このタイミングで乱入するなんて、よっぽどの強度を持った人物のようです。

空気読めない系？唯我独尊系？どちらにしろ、金属たわしのような神経の持ち主でしょうね。

なんか纏う雰囲気もそんな感じを醸し出してます。

こう……まるで狙ったように失言を繰り返すラブコメ体質的な？

「……しっしっ」

キティを抱き締めたまま、左手だけでこちらの意向を伝えてやりました。

ワタシは今、キティとのイチャコラに夢中なんですよ。

他のコトは後回し後回し。

「わりぃけど話し聞かない訳にもいかねーんだ。今、短距離だったけど街中で転移したよな？ここにゃ転移阻害があんだぜ？なぁアンタら、もしかして魔女と吸血鬼のコンビであってるか？」

……はぁ。

ついてないです。
背後から射たれてないトコロをみるに、面倒事へ巻き込まれそうなチート美少女汀です。

射ってくれたほうが解決早くて結果的に楽なんですよ。
すぐに反撃、はいさようならですから。

ふふーふ、魔女ですからねー。
敵に容赦はしません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねぇ、どうしようか。随分と図太い赤色デバガメがにじり寄って来てるよ」

ニヤニヤしながらキティに問いかけてみます。

……キティもワタシの意を察してくれたようです。

「ほう…見た目では珍しい種族ではないようだが、随分と特殊な嗜好を持った個体のようだな」

「だよねだよね。ワタシ達から声もかけてないのに、自発的に迫ってくる相手って、いっつもそうだもんね」

「あ、いや誤…」

「あぁ、ヤツの目線が煩わしくて堪らん。初対面の相手を、まるで

舐め回すようにじっとりと凝視するなど常軌を逸しているな」

「おいっ！！」

お、赤毛もノって来ましたね。

「きゃあ！！第2形態だ！！あかげ　は　おおごえ　で　いかくしている！！」

「まずい、まずいぞ。ヤツは日中の街中でも本性をさらけ出し始めた。気を付けろ、いつ飛びかかってくるかわからんからな」

「ぐっ…こんなヤツらだったのか……。ジジィ、扱いに注意ってこう言う事かよ…。…いや、もしかして人違いか？」

おや？

ジジィさんとやらの依頼でも受けての行動のようですね。

でもとりあえずぞっこー。

「うわ、こわぁ……。ぶつぶつとなんか唱え始めたよ。変身の呪文？や、変態の呪文！？」

「いや待て、その言い方では分かりにくい。ヤツがこれから呪文で本性をさらし、変態に変身するのか？それとも変態であるヤツが小声で卑猥なコトを口走っているだけなのか？あるいはその全てか？」

あ、ぴくぴくしてます。

こめかみとかぴくぴくしてます、堪えてるんですね。

ふふーふ、あまいあまい。

「やっぱり全部じゃない？本性をさらして変態に変身するために、小声で卑猥なコトを口走っててるんじゃない？……聞いてみよっか？」

「おい止めておけ、危険だぞ。ヤツは今、偽りの赤毛を脱ぎ捨て真なる変態に戻ろうとしているんだ。下手に声をかけて阻害されたら、中途半端に赤毛を抜け散らす結果になってしまうかもしれない」

「そっかそうだね。彼も厚手のフード付きローブとか着てるあたり、世間様に顔向け出来ない自覚あるんだもんね。これ以上人前に出られない面構えになっちゃったら、もう普段から本性を隠さなくなっちゃうだろしね」

「あぁ、先程までも隠していたつもりだったのだろうが、その陰湿で卑猥で汚濁した眼差しは寧ろ際立っていた。フードはその自覚があるからだろう。ヤツが素顔で声をかけてきたのは、最初から私達を標的にして来ていたからだ。赤毛の皮を被っているのは、唯一残った理性なんだ。それを奪うなんて後々の被害が知れないぞ」

「でも今まさにワタシ達が危機に直面してるよ。ほら見て変にぷるぷるしてる。もしかして人の形を維持するのが、もう限界なんじゃない？あのローブの下、実は不定形だったり、にょろにょろのうねうねだったりするんじゃない？」

「ああ成程確かに。何やら先程から袖口やら足元やらがはためいていたのは、本体の触手？が我慢仕切れなかったからなのか。おい冗談じゃないぞ、赤毛という理性の皮を被った変質者ならギリギリ最低人間種だが、触手の先に赤毛を生やして人に化ける不定形生物なんておぞましいにも程があるぞ」

どがん！！…ぱらぱら…

いえーい、ふぃっしゅ！！
赤毛が横にあった木箱を破壊しました。
我慢の限度だったんですね。
でもまだ、いいたりないぞー。

「……だぁー！！こっちが黙ってりゃ次から次へと！！誰が変態だ！！オレはナ……」

「きゃぁぁぁー！！いやぁぁぁー！！助けて！！誰か助けてぇぇぇ！！」

「誰か！？変質者だ！！誰かいないか！！」

……おい聞こえたか？この奥だ！！……

……破壊音と女の子の悲鳴だった！！……

……お前は警備団に連絡しろ！！急ぐぞ！！……

「…テメェら…っどわ！？なんだぁ…？」

ふふーふ、怒れる赤毛の顔にプシュッ、っとな。
魔法道具『コッチだ鬼さんハイパー』です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

説明しよう！！
『コッチだ鬼さん』とは、近年アリアドネーで開発された魔法道具である。

口紅程のサイズの噴射式容器から特殊な魔法薬を射出。
直接散布された対象に、追跡用のマーキングを施す魔法道具である。
マーキングは対象の魔力を極僅かに吸い取り続け、空中に蛍光色の動線を描き続ける。
描かれた動線は空間に静止し続け、また何物にも影響されないため追跡が非常に容易である。
性質上、使用の際には対象の皮膚に直接散布することが相応しい。

ノーマル、ハイパー、軍用の3種類があり、それぞれ発色と効果時間が異なる。
左から順に強力になり、軍用は最早対象に魔力的な障害すら引き起こすため、一般には流通していない。

効果時間中に作用を打ち消すことは不可能なため、ご使用の際には用法、用量を守ってただしくお使いください。

余談だか、製作者はアリアドネー外部開発者部門所属“まじかる美女とばりん”である。

本製品は製作者以外での生産が不可能であるため、需要に対して供給が及ばない事態に対しここにお詫び申し上げます。
現在アリアドネーでは、製作者の“まじかる美女とばりん”を探しています。
情報をお持ちの方は、アリアドネーまで御一報ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とりあえず普段より幼めに幻術っと。

「逃げなくていいんですか？こんな幼女に暴力で迫った不定形生物さん？すぐに人が集まりますよ？」

「だな。こいつの演技はちょっとしたものだぞ。一瞬で貴様が変質者だと断定されるな」

ふぁ…

幻術でいつもよりちみっこいキティかわいいー。

ぎゅーしたいなぁ…

「マジかよ！？冗談じゃ……」

……いたぞあこそだ！！……

「くそっ！！」

おー、なかなかの瞬動です。

眼が覚めるような、蛍光ピンクのラインが一瞬で。

ワレながらいい仕事です。

「キティ！！すごいすごいかわいいよそれ！！……じゃなくて、どうする？とりあえず来た人全員で赤毛を追わせる？」

おさなキティをぎゅー！！
事情聴取とかめんどくさいですもんね

「うぷ……ほら人が来るぞ、放せ。面倒はごめんだからそれでいいさ。……いや、手まで放さなくていいだろ…」

ふふーふ、かわいいなぁもう！！
この場面ならぎゅーしてても平気だと思うけどね。
じゃあ、おてて繋いでっと。

さて、善意の市民さんには追跡をお願いしましょうか。

「君たち！！大丈夫か！？」

来た来た。
じゃ、かるーくせんのー。

「あ、ありがとう！！凄く怖かったよぅ…。あのね、貴方達が来たら変なお兄さんは逃げちゃったの。『コッチだ鬼さん』かけたから、“全員で行って。彼は幼女に力ずくで迫った変質者だから、絶対に捕まえて！！”」

泣きまねとかしなくても、多少の疑問があってもワタシのせんのーには逆らえまい。
ふふーふ。

「……許せん！！お嬢ちゃん達、俺らに任せな！！変質者なんかすぐブタ箱入りにしてやるよ！！行くぜみんな！！」

「「「…おう！！」」」

みんな飛び出して行きましたね。
じゃあ、おねがいしまーす。
『コッチだ鬼さんハイパー』が切れる頃にはせんのーも程よくゆるまってるから安心ですよ。

がんばれー、やっつけろー。
変質者をゆるすなー。

彼が誰だか知らないけど、まぁいいでしょ。
ジジィさんとやらの依頼らしいし、また来るでしょうか？

まぁ逃げ切れたら、ですね。
ワタシのせんのーは感染するから、逃げれば逃げる程追跡者が増えていくぞー。

ワタシ達のイチャコラを邪魔するからですよーだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃ、キティ行こう？ね、さっきも言ったけどその幻術すごいかわいいよ！！ワタシが大人役するから、チェックインまではそれでいてよ」

「とっさに汀と合わせたつもりだったが、そんなに言うほどか？……まぁ嬉しくはあるが」

照れキティぎゅー！！

はーなーさーなーいーぞー！！

幻術で姿を大人にして、キティを抱き上げます。
親子に見えるかな？
ならちゅーしても平気だよね。

……っん…っちゅ…ちゅっ……

「ぷっ…わぷ…なんだ、子供相手のように……ああ、なるほどな、母様とでも呼ぶか？」

顔中にちゅーしてたら、キティも察したみたいです。

「記帳はマクダウェル親子だね、んー…ちゅっ…」

……っちゅ…んっ…ちゅむ……

「…んちゅ…親子なら舌を入れるな。ほら、そうしたいならさっさとチェックイン済ませてベッドでだ……ちゅっ…」

……んちゅ…ちゅっ……

至近距離で見つめあって、てれり。
キティ、だーいすき！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あ、いけない。
ガムテープで簀巻きにしたチャチャゼロのコト、完璧忘れてました。
取ってこなきゃ。

第１４話　会談中だけど回想　その２（後書き）

第１４話更新。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。

バトルのハズが、何故かこんな展開に…
次くらいで回想も終わるでしょうか。
瞬殺バトルもきっとあります。

英雄のネームバリューがあれば、逃げる必要なかったのでは？
なんて聞かないでくださいね。
汀が幼女化して涙目なら、そりゃあ理性なんか吹っ飛ぶんですよ。
真っ当な大人も生唾ごっくんです。
もしかしたら、ナギさんも生唾ごっくん？

まぁ赤毛はノリで逃げたんでしょう。
たしか、英雄として持て囃されるの嫌だったんですよね？
人が集まるのは避けたいから、裏路地まで追って声かけたのでしょうし。
あの後、赤毛はちゃんと逃げ切りましたとさ。

七さま　感想ありがとうございます！！
そう思っていただけると、すごくうれしいです！！
書きがいがありますね！！
赤毛、まさかの長丁場、まさかの逃走になりました。
あれぇ？

うれしくて浮かれすぎちゃったかも…

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１５話　会談中だけど回想　その３

カーテンの隙間から射し込む朝陽が眩しい。
キティの穏やかな寝息に自然、頬がゆるみます。

ここは、街一番のホテル。
もちろんスイートです。

昨日、赤毛との接触により、夜間の襲撃が危惧されるコトとなりました。
そこでワタシ達は、これでもかこれでもかと言わんばかりに部屋へと結界を張り、そうして２人だけの時間を目一杯楽しんだ訳です。

ワタシもキティも、折角盛り上がっているトコロを邪魔されるなんて絶対に許せるコトではないので、明らかに必要以上な強度で結界を展開しました。
そんな風に必死になって守りに力を割くなんて、もう最近は全くなかったコトでした。

だからなのか、なんだか可笑しくなってしまったワタシ達は、代わる代わる、もっと硬く、もっと複雑に、と結界で遊び笑い合いました。
共同で築き上げたこの部屋の守りは、いつの間にかキティ本人でさえ突破できないであろうモノになっていました。

あ、ワタシは出来ますよ。
ワタシにしか出来ない特別な方法で、ですけど。
まぁ、チート美少女汀ですからね。

当然と言えば当然です。

そんな部屋の中、ワタシ達は一頻り笑い合った後、強く深く求め合いました。

やりすぎた結界、その安心感が煽ったのでしょうか。

ついさっきキティが本当に力尽きるまで、延々と溶け合っていました。

気絶のち魔法で回復、のループで。

つまり徹夜で朝チュンです。

結界で鳥のさえずりとか聞こえないですけど。

さ、キティを抱き締めて一眠りしましょうか。

シーツやらなにやらは、魔法でぱぱっと綺麗に仕上げましたよ。

ふふーふ、おやすみなさい。

キティ、愛してます。

寝顔もかわいいよー。

きゅー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リリリリーン！リリリリーン！

昼下がりにワタシが起き出して、ベッド横の姿見にうっとり。

少ししして起きたキティが、ワタシに突っ込み。

その後一緒に、シャワーでしっぽり。

てへ、ついつい昨晩の残り火が、ね。

とにかく、のんびりとした目覚めを済ませたころ、備え付けの内線電話がなりました。

「はいはーい、っと」

シャワー出たばっかりだけど、ワタシ達だけだしいいですよね。

「おい、汀、はしたないぞ。ほらバスローブくらい羽織ってからにしろ」

駄目みたいでした。
キティがシルクのバスローブを着せてくれます。

「ふふーふ、ありがと。ねぇ、やっぱりキスマーク残ったほうが素敵じゃない？ね？今朝はコレに見蕩れてたんだよ、実はね。キティのものって感じが素敵！！」

キティは真祖の吸血鬼なので、キスマークもいじめた痕も残りません。
一瞬したら、すぐに回復しちゃうんです。

そしてそれはワタシも同じ。
でも今日はなんだか残したい気分でしたから、無理に身体を制御してキスマーク残してみました。
気を抜くと、その瞬間に回復して消えてしまうけれど。

「……妙なトコロで器用だな。だが、粗方消えてるぞ、つけた数より明らかに少ない。……それに、そんなものなくとも、最早お前の姿形自体が私のモノだ。その身体全てがだ。そして私も…そうだろ

う？」

……嬉しくてキスマーク全部消えちゃった。

「うん、そうです。ワタシのこの形、この姿、それそのものがキティィのモノだって証。キティのその形、その姿、それそのものがワタシのモノだって証です」

「ああ、そうだ。あらためて、おはよう良い朝だな汀。愛している」

「うん、そうだね。あらためて、おはよう素敵な朝だねキティ。愛してます」

……っん…ちゅっ……

、リーン！……

あ、ずっと鳴ってた電話、イチャコラしてたら切れちゃった。

まぁ、必要な用事ならまた鳴るでしょう。

「……っ、切れたな。」

「ふふーふ、ちゅーのが大事だよー。あ、でもルームサービス頼むつもりなんだった。取ればよかったかな」

お昼過ぎてますからね。

じゃ、こーるこーる。

てか、スイートな豪華部屋に相応しい、アンティークチックな電話だ。

「ねぇキティ、見て見て。この電話かわいいよ!!拠点にはこんなの置きたいね」

「ん?あぁ、確かにな悪くない。トコロで汀、チャチャゼロをそろそろ解放したいんだが……どこへやった?」

さーてね?

皮が高値な錦竜の恨みは深いのです。

ま、安全な場所だから気にしない気にしない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……そう、わかったわ。とりあえず頼んだルームサービスを持って来て。彼には、食事を済ませたら行く、と伝えて待たせなさい。ついでにコーヒーでも入れてあげて」

あちゃー、です。

とある人物の使い、と名乗る男がロビーに来ているようです。

ホテルなどを利用する際、ワタシ達は偽名を使わずにマクダウェルもしくは緒々嶋で記帳をしています。

一部の利害関係にある人物達は、それをもとにワタシ達を探すコトがあるのですが…

昨日の今日、はちょっと早いですね。

もしかしなくても昨日の赤毛でしょうか。

となるとジジィさんとやらは、そこそこのネームバリューを持っているようです。

普通は最高級ホテルで宿泊客を調べるなんて不可能ですし、“とあ

る人物の使い”とかで通用しないですから。

「キティ、見つかった。でも結界に干渉を試してすらいない。となると、依頼……かな？もしくは罠。ロビーで待つって。チャチャゼロ出すね」

ソファーベッドで弛緩していたキティの目が、瞬時に戦闘者のそれに変わります。

……凛々しくて素敵、ちゅーしてくれないかなぁ。

「ちっ…。昨日の今日か…あの赤毛か？とにかく支度だな。汀、来い」

着替えは普段、キティが選んでくれます。

ワタシが自分でやると、シンプルすぎるんですって。

「あ、でもルームサービス食べたらね。コーヒー出させて、待たせるように言っといた」

うんまぁ、食べたらとりあえず話しを聞いてみましょうか。

考えていても始まらないですし。

じゃ、ルームサービス来るまでに支度ですね。

キティ、今日はちょびっとお揃いめにしよーよー。

あ、あとチャチャゼロもだ。

んー…チャチャゼロもお揃いめがいいかなぁ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

食事、準備、チャチャゼロのごきげんとり、全てを終える頃には、
そこそこの時間がたっていました。
そうしてやっとロビーへ向かったワタシを待っていたのは、昨日の
赤毛ではありませんでした。
なんでも連合のとある人の使いだとか。
身分証も提示したとか。

あー…
それ言われると、ここのホテルは仕方無いですよね。
ここもメセンブリーナ連合の一部ですし。

……しかし、ここ暫くの追跡はいい加減鬱陶しくなってきました。
昨日の赤毛にもストレスをぶつけてしまいましたし。
まぁ、それはキティとの時間を邪魔した、彼の空気読めなさが主因
ですけれど。

魔法世界の大分裂戦争が終わって…5年?
そろそろ権力者達に余裕が出てきて、ワタシ達への追い込みを強め
ているようです。
ほっといてくれないかなー。

戦争に参加しなかったからでしょうか?
賞金の取り下げを~、とか言ってたけど、無視しました。
主に旧世界の観光してましたよ。

折角戦争も終わったから来たのに、やっぱり拠点は旧世界に、でし
ょうか。
それはそれで色々問題あるんですよね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ようお前ら。昨日はよくもやってくれたな」

……ここで赤毛か。

直接ホテルに押し掛けたら、逃げられるとでも思ったのでしょうか？

「あら、昨日ぶりね赤毛くん、その様子だと逃げ切れたみたいね。あとそちらは…はじめまして、かしら」

お使いさんに着いて移動した、街から程近い湖畔。

昨日の赤毛と、耳と後頭部の長い老人が……老人は実体ではないようですね。

その2人が待ち受けていました。

「ふぉっふぉっ、お噂はかねがねじゃ、魔女殿。わしは近衛近右衛門。旧世界の麻帆良にて魔法協会の長をしておる」

「やっと名乗れるぜ。俺はナギ・スプリングフィールド、サウザンドマスターって呼ばれてる」

サウザンドマスター…。

たしか大戦の英雄でしたっけ。

麻帆良の近衛……。

知らないなぁ？

あ、お使いさんが一礼して去って行きました。

普通に歩いて。

なんか後ろ姿シュール…。

でも、となりのキティとチャチャゼロに目配せをします。
奇襲警戒をお願いです。

「ワタシ達のコトは知っているようだし、さっそく用件を聞きましょうか」

「いや、俺は知らねぇ。魔女と吸血鬼のコンビでムカつくガキって事しかな。あと顔」

うわー、のっけからコレですか。
彼らの目的って交渉じゃないんですかね?
読み違えた?
あ、キティがイラッときてますよ。

「貴様いい度胸じゃないか、えぇ?サウザンドマスターだかなんだか知らんが人間風情が調子に乗るなよ」

「はっ!今更デカイ態度とっても意味ねえよ。昨日はさんざんだったんだからな!!」

「これナギ、止めんか。そちらも治めてもらえんかの。昨日の話は聞いとる、ちとやりすぎだったのではないか?」

ふーん、用件を聞きいたらそれですか。
まぁいいですけど。

「そう、つまり昨日のうさを晴らしに来たのね?」

「ほう、なら今度は逃げ帰れなくしてやろう」

「こっちのセリフだ!!昨日のコト謝らせて、自己紹介のしかた教えてやるよ!!」

赤毛の魔力が膨らみます。

……ん?手加減してますね。

仮にも英雄がこの程度ではおかしい。

【キティ、殺さないで。ボコして問い詰めよう。旧世界ってのが気になる】

【仕方無いな、チャチャゼロ待機だ】

【マタカヨ!!魔女!!酒追加シロヨナ!!】

彼はキティが即落とすでしょう。

近衛は…式神ベースの幻術ですか。

旧世界から繋いでいるなら、戦闘は無理でしょう。

なら……《ばちっ!!》

「ぬぅ!?……固定、かの?」

「そこで見ていなさい、すぐ終わるわ」

ワタシの魔力で縫い止める!!

「ジジィ!?魔女てめ《ずだん!!》ぐあぁ!!」

気を逸らした赤毛をキティが即座に空気投げ…じゃなくて、魔力糸で引き摺り倒し拘束ました。
アレ、切れないんですよねー。

「つまらん、実につまらんぞ。これが噂のサウザンドマスターか…」

「ぐっ！！…ぐおぉ…くそっ！！まじか…」

ぺいっ、っと赤毛の魔法発動体をのけちゃいます。
気を高めたり、魔力高めたりしているみたいですけど、むだむだ。
じゃ、仕切り直して尋問ですかね。

……チャチャゼロにワイン先払いしておきましょう。
ほら、そんな暇そうにしないの。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はぁ？麻帆良で警備員をやらせるつもりだった？」

……正気ですか？

しょうがない、詳しく聞きましょうか。

第１５話　会談中だけど回想　その３（後書き）

第１５話更新。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。

とりあえず。
今話の【】は、念話での会話です。
今後もコレで表現します。

てか、回想終わりませんでした。
次は近右衛門の企み、汀の企みを書きます。
で、回想終われる…かな？

赤毛さんチョロい回。
これはアレです、汀とエヴァが突き抜けた強さなんです。
ごめんねナギさんいいトコなくて。

前話についてご意見いただきました。
アンチ描写など、今後の執筆に参考にします。
ただ汀は、善人でもないし、なによりワガママ美少女なので、たまにそういった描写があるかもしれません。
そこはそれとご理解ください。
ほら魔女ですし。
ご指摘増えるようでしたら、タグの変更も検討します。
貴重なご意見ありがとうございました。

あと、本作品が百合ハーレムと言えるのか？ともいただきました。
どうでしょう？
ｇｒａｎｄ病原は女の子主人公１人、ヒロイン３人なら百合ハーレムかなぁ、と思いますが。
ほらアプリの逆ハーのゲームとかで、男の子は３人とかありますし。
ただ、ヒロイン間の絡みが少ないのが目下の課題だと自覚してます。
が、がんばります！！

最後に主人公の名前“汀”について。
これが通常『トバリ』と読まないコトは承知しています。
いわゆる当て字です。
ちゃんとした理由があって、この当て字にしたそうですよ。
とまぁ、実際にこの読みをする人がいまして。
本名が決して珍しくないｇｒａｎｄ病原は、羨ましく思っていたコトがあります。
そこから引っ張ってきました。
キャラのモデルとかでは全然ないですけどね。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１６話　会談中だけど回想　その４

「…ンク…ンク…プハァ！タマラネエ、流石ノ魔女印ダナ」

「おい人形！！退きやがれ！！ぐっ……くそっ！！」

「ウルセエヨ、ンナコトシテモムダダ。ゴ主人ガ魔女ヲ縛ルタメニ開発シタンダゼ。テメェ程度ガ外セルカヨ」

「関係ねぇ！！ぐおぉ……くそっ！どうなってんだよ」

「諦メロ。マア、オ前ノ気分モ分カルゼ。昨日ノオレナンカ、ガムテープデ簀巻キダゼ？ナ？マァ飲メヨ、魔女印ワインダ。極上品ダゼ」

「そうかお前もか……じゃねぇよ！！俺は今、動けねぇんだよ！！だいたいそれ言うなら、人の上から降りやがれ！！」

赤毛に乗ったチャチャゼロ。

物語のタイトルになりそうな字面です。

なんだかもう少し放っておいたら、仲良くなりそうですね。

でわチート美少女汀は、麻帆良の近衛くんとお話しです。

……あと、キティが近衛くんの耳と後頭部に興味を持ってます。

見たコトない亜人だな？みたいな目線です。

いやいや、彼は旧世界にいるみたいですから、たぶん人間ですよ。
可哀想だからあまり見ちゃ駄目ですって。
本人もきっと気にしてますよ。
まぁワタシにはどうでもいいけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……なるほどね。ワタシ達が旧世界に拠点を設けようとしているのを耳にした、と」

「…見かけ倒しではなく、高性能な耳なんだな」

ちょっとキティ！？
ぽそっと面白いコト言うのやめてくださいよ。
一応交渉の段階なんですからね。

「うむ。お主らはある程度の地位ないし実力のある相手となら、交渉や取引、商売を行うと聞いておったからの。魔法世界なら知らぬ者のおらん、ナギに繋ぎを頼んだんじゃ」

彼には聞こえていなかったみたいです。
まぁキティも本気で興味を抱いている訳ではないですからね。
単に退屈なんでしょう。

「それって人選ミスじゃないかしら？昨日のコトはともかく、さっきも安い挑発に釣られてアレじゃない」

チャチャゼロとの友情はなかなか芽生えないみたいです。

彼、まだ叫んでいますね。

「いやの、とりあえず自己紹介させたらすぐに、今のこの式神を起こしてもらうはずじゃったんじゃよ。じゃがまぁ結果として渡りがついたから良しとしようかの」

「……ふん、よく言うな。まぁ聞いてやる、警備員とはなんだ。正気か？私達が素直に頷くとでも思ったのか？」

ですよね。

そもそもどうやって引き込むつもりなんでしょうか？

ワタシ達に賞金を掛けたメガロメセンブリアの下部組織風情が。

「そうよね。それにＭＭの下部組織である貴方達が、ワタシ達を雇えるつもりなの？それとも……あわよくば封印でもするつもりだっのかしらね？」

だから英雄サウザンドマスターを差し向けたのではないですか？

彼が麻帆良に封印した、となるとＭＭも強行には出られないでしょうね。

ワタシ達２人の賞金があれば、賄賂もし放題でしょうし。

「…お主達が旧世界で拠点を求めておるのは、本国の、メガロメセンブリアの追跡が手に負えなくなって来たからだとの噂じゃ。今回のナギとの事を見るに、どうやら噂でしかなかったようじゃがの」

はぐらかしたつもりでしょうか？

つまり、他に捕られる前に、麻帆良へ捕らえようと切り札を切った訳でしょう？

隠し種を含ませて。

ふむ、しかし……
なぜそんなにもナメられた噂が？

もしかして、世界間ケーキ食べ比べ！！のせいでしょうか？
短期間に行ったり来たりしていたのが、まるで逃げ回っているように捉えられた？
ワタシとしてはただのデートだったんですけどね。

「そう。で、どうするのかしら？サウザンドマスターは捕らえられ、貴方はワタシが許すまで戻れもしないわ。近衛くん、どうするの？」

「……なにやら行き違いが「つまらん言い訳で濁すな、人間。貴様があの赤毛をも誤魔化していたコトは知れている。その寄代には汀が干渉しているんだぞ。秘密裏に仕込まれた術式なんぞ、とうに掌握している。くだらんな、実にくだらん。その程度の封印術式とは、私達も随分ナメられたものだ」

その通りです。
近衛くんを捕縛したのは、彼自身が寄代に仕込んだであろう封印術式を弄ったモノです。
なかなかの練度ではありましたが、哀しいかな人間レベル止まりですね。

ワタシならあっさりと干渉し掌握し改変するコトが出来ました。
キティも、外から見ただけで把握したようです。
楽勝ですね、キティ素敵ー！！

でもこの術式って……たしか登校地獄？
馬鹿にしてますか？

「……」

だんまり…ね。
つまらない、つまらないです。
どうしてやりましょうか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そうね…ねぇエヴァ？彼らの計画に乗りましょうか？」

「ん？サウザンドマスターに捕らわれたコトに偽装する訳か？」

流石愛しのキティ、ツーカーですね。

「えぇ、そう。彼に捕らわれたコトに偽装して麻帆良に拠点を作るのよ。あそこならマホネット通販もしやすいし、コンビニもデパートもあるわ。そしてＭＭは、ワタシ達の賞金で近衛くんが抑えてくれる」

ですよね？
まぁ、近衛くんに選択肢はありませんが。

「待ってくれんか。来てくれるならもちろん大歓迎じゃ、じゃがそれだとわしらの安全が保証されん。失礼を承知で言うが、麻帆良に来てくれるのなら、念書契約かなにかで封印なり制約なりをしてくれんかのぅ」

あらら？
さすがに協会長ですね。
この状況下で譲歩を求めるなんて、がんばりますね。
でもそれじゃだめでーす。

「…呆れるな。既に貴様の魂胆は露呈し、退路もない。弁えろ、交渉の場は終わっている」

わ、かっこいい！！
キティ素敵かっこいい！！
すぐにぎゅーしたいです！！

「それにこの期に及んで悪巧みとはね。麻帆良には大結界とやらがあるのでしょう？認識を阻害し、人外の魔力を封じ込める大規模結界らしいじゃない。たしか魔法と科学のハイブリッドだとか。人外の魔力って言ったら、吸血鬼も魔女も含まれるわね、きっと。…ねぇ、近衛くん？貴方さっきから自分の首を絞めているわよ」

彼が追加したかった制約なりなんなりは、恐らく“麻帆良から許可なく出られない”とかでしょう。
麻帆良の大結界の実用性は、ある程度以上の機密レベルにおいて有名ですから。
かつての実験で個体指定すれば、最強種吸血鬼ですら抑え込めるであろうと断定されています。

ついでに言えば魔法世界にも旧世界にも、魔女を名乗るのはワタシひとりです。
もちろん魔法使い達の中での話です。
長年の功績？で魔女トバリは単一種族と認識されているのです。

ワタシ自身も、魔女という種族だと認識しています。
世界でただひとり、不朽不滅の魔女。
それがワタシ。
キティと一緒だから寂しくはありませんよ！！

「……断ればどうなる」

おやおや、余裕がなくなって来てますね。

「手間を掛ける気にもならんからな。安心しろ、楽に殺してやる」

まぁ、妥当かな。
交渉を装った不意討ちでしょうしね、コレ。
未遂でした、で許される相手ではないですよ、ワタシ達。

「……わかった、承諾しよう。じゃがいくつか守ってもらわねばなん事もある。お主らが麻帆良で生活する為に最低限必要な事がの」

ありま、案外あっさりでしたね。
ダメですよぅ、大結界を過信しすぎです。

ワタシにも、キティにも効果がないコト確認済みなんですよ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……わかった、賞金での裏工作。拠点地の正式譲渡。生活の保証。
そして、ナギに証文を作らせる。コレでいいんじゃな？」

おおまかに、ですけどね。

「そうね、詳しく詰めるのは麻帆良に行ってからにしましょう。貴方達は名声と、ワタシ達が麻帆良に存在するという情報を自由に扱える。さっき言った通り拠点に設置する結界は、捕縛転移に設定しておくから上手く使いなさい」

ワタシ達の情報を敢えて晒して、敵を誘き寄せる。
そしてワタシお手製の結界で捕縛して、指定場所に転移。
これが警備員の代わりにワタシ達が差し出すもの。

ワタシ達のネームバリューもさるコトながら“サウザンドマスターが保護した相手”というのは、実に利用価値のある情報です。
もちろん餌としても十二分でしょう。

「あ、あとそのうちに従者造るから。お手製のやつ。今から認めておいて」

「あいわかった。とりあえずナギと共に麻帆良へ来とくれ。待っておるぞい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そうしてワタシ達は麻帆良へ来たのでした。
麻帆良に着いてからも、安定までにはなかなか大変でした。

麻帆良大結界がワタシ達に全く効果を及ぼさないコトが確認されて、近衛くんが焦りまくったりですとか。

映像記録証文の作製を拒否する赤毛に対し、仕方がないから彼が満足するまでかるーく戦ってやったりですとか。

そうしたらヤケに爽やかに証文作るもんだから、それを確認した魔法使い達がえらくキモかったりですとか。

サウザンドマスターの保護下を主張するために、学生をやるコトにして、制服でキティとイチャコラしたりですとか。

初めて通った学校は、ワタシ達の美少女っぷりに大騒ぎだったりですとか。

自宅兼工房の拠点が戦略上、街よりも山に配置されて不満気味だったりですとか。

その結界には、毎日ちょっとビックリするような数の外敵と、一部の魔法先生が引っ掛かり続けたりですとか。

色々ありましたけど、なんとか麻帆良で暮らすコトになったんでしたね。

なつかしいなぁ。

第１６話　会談中だけど回想　その４（後書き）

第１６話更新。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
駆け足に回想を終了させました回。
イチャコラも少ないし…。

我ながら長かったです。
この回想のうちに、汀の性格を話に練り込みたかったんですが…微妙ですね。
この後は原作までイチャコラ。
原作始まってもやっぱりイチャコラ。
そうなってしまいますから。

汀は損得勘定したうえで、なのに感情に従って生きています。
自身の行いの結果、他者の感情、それらに伴う損得。
それらをキチンと知り計算しつつ、それを踏まえて、自分がやりたいコトをするのです。

汀を魔女としたのは、ここが１番のポイントだと思っています。

汀はもちろん麻帆良が他勢力の支配地域であるコトをちゃんと認識してます。
ですので、不用意に魔法使ったりしません。
無茶苦茶なコトをいきなりしたりしません。
まぁ１５年やってきている訳ですし。

ですので回想の段階、旅というある意味縛りのない状況下のうちに、
もっとわがまま魔女っぽさを書きたかったのに…
力不足です、もっとがんばります。

今回も感想いただきました。
ありがとうございます！！

ｇｒａｎｄ病原は誰に相談したりする訳でもなく、１人黙々と執筆
しています。
ですのでどんな小さなモノでも、励ましだったり、ご期待だったり、
ご指摘やご意見だったり、それらみんながとても励みになります！！
本当にありがとうございます。
ちょっとした感想も、辛口ご意見も、次話への活力ですよ。
よろしければ、またお願いします。
もっと良い、もっとおもしろい作品にするための糧にしますから。

では、ｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第17話　ワタシ達とアイツラ　その6

「……だから俺は、2人に光のなかで生きて欲しいと思ったんだ。
これを見てるお前ら、2人の事をよろしく頼むぜ」

サウザンドマスターの証文が再生を終了しました。
最後の部分は、ワタシ達が指定しなかった、彼自身の言葉。

なるほど、と言わざるをえない程の善人ですよね。
彼は恐らくＭＭの、メガロメセンブリアの後押しなどなくともその名を馳せていたかも知れません。

たしかにまぁ、感心はしますけどね。
見てください、タカミチくんを筆頭に、キラキラ目線で証文を見詰める学園の魔法使い達を。
アレはやっぱり異常だなぁ、と思っちゃうチート美少女汀です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あと、赤毛はどこか抜けているようです。

ワタシ達の賞金額５００万ドル。
史上最高額のコレは、びっくりするくらい濡れ衣とでっち上げ分が含まれています。
一部のやり取りがある権力者がいなければ、もっと増えていたそうです。

その濡れ衣、でっち上げとされる数々の事件の本当のトコロを、近衛くんと赤毛に教えてあげたコトがあります。
そうして話すうちに彼の中でのワタシ達は、随分とかわいそうな娘扱いになったようなんです。

とは言うものの、実際にワタシが起こした事件もあります。
そしてなにより襲撃者や追撃者、賞金稼ぎ達を殺してきているのは確かなコトです。

ワタシ達が賞金首であるコトは、間違いないコトなのです。

そう伝えているのに彼は、麻帆良が守ってくれる、俺もな！！とか言い出すのでした。

いやいや…
まぁ、証文を嬉々として仕上げてくれたのでいいですけど。

でも、そんな彼の言葉を聞いたキティはぷりぷりと怒っていました。
同情するな、私達には必要ない、って。

「2人でいるコト、愛し合っているコト、世界を見る旅を続けているコト、全てが自身の選択だ。私達はしあわせだ」

キティの瞳に澄み渡っていて、その言葉の価値を如実に伝えていました。
普段、彼らに接するトキのそれとは隔絶した態度に、2人は驚いていたようでした。

ワタシも続きます。

「そうね、ワタシ達に同情は必要ないわ。ワタシ達はずっと自らの選択で生きているの。お互いだからこそ愛し合って、楽しいからこそ世界を渡り歩いているのよ。付随するものも、キチンと理解しているわ。ワタシ達はしあわせなのよ。それでも思うトコロがあるのなら、協力する、そう言いなさい。忘れていない？ワタシ達のほうが強いのよ？」

最後に少しおどけてみせます。
まぁ彼等は2人とは取引関係を結びましたし、最低限のやり取りはしないといけませんからね。

赤毛はワタシ達の言葉にどうやら感心したようです。
近衛くんのほうは、特に態度を変えるコトはありませんでしたけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、千雨ちゃんに目配せします。
この場をもって、千雨ちゃんがワタシの従者だと自己申告する。
コレがワタシ達の目的ですからね。

「いいかしら？先の話、今の証文、そしてワタシと本人の言葉で、千雨を魔女トバリの従者だと宣言するわ。まずは千雨、自分の口で彼等に伝えなさい、本心でね」

ビバ赤毛状態の連中に言い放ちます。
何か言いたそうな感じはあるものの、サウザンドマスターの証文直後ですからね。

次第に興奮を諌め、千雨へ注目します。
従者を認めるとの断言は、まだ彼等の融通の効かない頭にも残っているのでしょう。

タカミチくんの落差がすごいです。
キラキラから、ドンヨリへ。
自己責任でしょうよ。

「千雨だ。さっきの話しの事件から、汀に、主に世話になってる。ぐちゃぐちゃと言う気はない。私は汀の従者だ。緒々嶋千雨って名前の、不朽不滅の魔女トバリの従者だ。あんたがたに言いたいコトは他にはない」

ああ、千雨ちゃんはやっぱり彼等に何も求めないようです。
知らなかったこれまで、知ってからの今まで。
魔女の従者、千雨ちゃんにとっての彼等は、主の取引相手以上の何者でもないんです。

「……僕を、僕たち魔法使いを怨んでいるんだろう？ならなぜ…！！」

タカミチくんなんだか元カノにすがっているみたい……って、イラ…

自分の思考にムカつきました。
千雨ちゃんの手をぎゅー！！
千雨ちゃんはワタシのですもん！！

「…うん？」

あ、いえいえなんでもないです千雨ちゃん。

ちょっとセルフジェラシーでした。

てか、悲壮感漂うタカミチくんに全然関心ないんですね千雨ちゃん。
それだけワタシを思ってくれてうれしいです、ぎゅー。
親指で手の甲に“ダイスキ”となぞっ…れない!!
ワタシそんなに指長くないです!!
えーん、つたわれこのおもいー。

「聞いたわね?ワタシ、不朽不滅の魔女トバリも緒々嶋千雨を従者だと宣言するわ」

近衛く…昔を思い出しているうちに、呼び方戻ってました失敗失敗。
近衛学園長に目配せをします。

「タカミチくん、今は落ち着くんじゃ。…皆聞いたの?あの事件があり、それ以来千雨くんは緒々嶋を名乗っておる。今なら理解できるじゃろう。では、従者の件をわしとナギの名のもとに認め、千雨くんは正式に緒々嶋姓とする。皆よいか?」

「長谷っ…千雨くんの姓の事も、身体の事も分かりました!!しかし魔女の従者である必要はない筈です!!承服しかねます!!彼女は我々正義の魔法使いが正しく導くべきです!!」

お?なんですか千雨ちゃん?
指を絡めたまま手のひらを放して、そこに親指で…。
く、くすぐった…“アイシテル”?

わ!!わ!!素敵です!!
ワタシもですよ!!
えっと…“アイシテイマス”…よし!!

あ、コレ、もしかしてタクシーで言っていたコトが理由ですか？
彼等に愛し合ってるって宣言しなかったからですか？
もー、千雨ちゃんが照れ屋さんだって知ってるから全然いいのにー。

「……千雨くんの身体を殺した僕では、僕が所属する協会では信用されないのも無理ありませんよ。それに…」

おっと、タカミチくん言い辛そうなので引き継ぎましょうか。
千雨ちゃんの手を改めて、ぎゅー。

「それにね、千雨の身体はあの事件の現場で焼き尽くされたの。彼が遊撃に戻った後、残った魔法使いがやったそうよ？仮に行く宛がなくたって、そんな人達の元に行きたがる訳ないわよ」

仮に、なんて無意味ですけどね。
ワタシがいます、千雨ちゃんにはワタシがいますから。

ぎゅーした手から、動揺やらは伝わってきません。
どころかチラリと目配せして、目を細めてくれました。
流し目です！！
千雨ちゃんの流し目！！
うっとりしちゃいます。

「事件中の事じゃ、麻帆良の危機じゃったんじゃ。放置すれば何らかが召喚される恐れがあった。言い訳ではないが、ソレをした彼等の判断は…わしには間違いとは言えん。じゃが千雨くんに納得出来ない事なのは想像に容易い。わしら麻帆良の魔法使いが彼女を思うなら、今後の行動で示すしかないんじゃよ。皆、これを聞いてもなお、彼女を説得出来ると思うかの？」

「ですが!!……っ千雨くん!!確かに身体の事は不幸な事故だっただろう!!だが君の犠牲が麻帆良を守ったんだ!!幸いにも今君は生きている!!魔女どもなどと居れば、その功績も失われるぞ!!もう戻れないなら我々と正義を貫くべきだ!!」

勝手言いますねぇ。
ねえコレって説得ですか？
てか戻れないとか、普通ならトラウマスイッチでしょうに。
ま、ワタシの千雨ちゃんなら平気ですけどね。

「……はぁ。あんたがたは何時もそれだ。私には知らない誰かの功績も評価も要らないんだ。汀の信と…あ、愛が欲しい。それが私の一番なんだよ。あんたがたを恨んだりとか、そう言うのはもう済んだコトなんだ。折角生きているんなら、汀と一緒にいたいんだ」

千雨ちゃんの雰囲気が変わりました。
いつもワタシに気持ちを伝えてくれるトキのそれです。

「あの後私の有り様は正直自分でも思い出したくもない。恐怖に暴れて、受け止めきれず放心して、謂れなく汀達に当たって。それを繰り返した。その私にずっと傍にいてくれたのが汀だ。ブチマケルだけ全部を出し切らせてくれて、空っぽの私に自分を取り戻させてくれて、それを繰り返した。そうしてやっと安定した私に、知りたいコトも知りたくなかったコトも、全部を教えてくれたのが汀だ。それからだって今思えば酷かった。安定したつもりでいたけど、振り返れば完全に病人だった。その私を乗り越えさせてくれたのが汀だ。」

正式に保護すると決めたワタシは、従者専用義体ではなく後に魂移

し出来るだけの義体に千雨ちゃんを定着させました。
そして別荘の中、千雨ちゃん用に拵えた部屋で生活の面倒を見ましたが…
それはむしろ看護と言った状態でした。

「私が自分に余裕が出た頃、汀の行動に疑問がわいた、なんでここまでって。だから聞いた。聞いてみて拍子抜けしたよ、選ばせるためだって言いやがるんだ。普通に戻るか、魔法と生きるか、選ばせるためだって。でもそんなの意味なんてない、だって決まってたんだ。私が汀に質問したのは、知りたかったからだ。何か汀のために出来ることがないかって。介護が必要なくなった私が、汀の傍にいる理由がないかって」

その日ワタシと千雨ちゃんは主従となりました。
魂と魂で繋がりを持ったのです。
千雨ちゃんを今の身体にした日です。

あ、愛し合ったのはもう少し後ですよ。
ワタシは千雨ちゃんを保護した段階で、その全てをワタシのモノにしたいと思っていました。
だから、彼女に選択肢を残しながらも、その心を絡め取るコトにしたのです。
じっくりねっぷり攻め落とした訳ですね。

まぁこの時点で大分傾いていましたね。
完全陥落は遠くありませんでした。

「それからもまぁ…い、色々大切なコトがあった！！だ、だから私は汀の傍にいるんだ。今じゃ汀から離れるなんて無理だ。嫌なんだ。緒々嶋千雨は緒々嶋汀とずっと一緒だ。それが私なんだ！！」

ワタシは総てを求めます。

誇り高き真祖の吸血鬼キティも。
人を辞めてまでワタシに尽くす千雨ちゃんも。
ワタシに零から創られた存在、茶々丸ちゃんも。

心も身体も、魂も。
過去も未来も現在も。
その総てをワタシのものにしました。

それがワタシの、不朽不滅の魔女トバリの身内であるというコト。
愛しています、ワタシの総てで。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

キティと茶々丸ちゃんの視線がイタタです。
千雨ちゃんが真剣な告白をしたのが羨ましい様子です。

や、千雨ちゃん以外はね、連中に言い放つ必要ないでしょ？
わかってるから、ワタシがわかってるし、いくらでも聞くから。
宣言はいらないでしょ？

え？これも愛を示す良い方法？
いやいやいや、声高らかにノロケる場面じゃないから！！

第１７話　ワタシ達とアイツラ　その６（後書き）

第１７話更新です。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただけてうれしいです。

会談も終盤、千雨宣言回です。
ホントはリアル介護回も考えていたんですが、回想についで回想ってアレかな、と。
てか、リアル介護って、読んで楽しむモノではないですしね。

ちなみに千雨介護期間のエヴァはそりゃあ荒れていました。
魔法による分身？みたいので常に一緒ではありましたが、汀本体は千雨とでしたから。
後に千雨が完全陥落した際、エヴァと汀はお互いがお互いのもの、千雨は総て汀のモノ、と明確に宣言し、立ち位置を明らかにしたコトで落ち着きます。
千雨自身も汀の魔女としての異質すぎる存在そのもの知り、総てを捧げる従者の位置に自覚と誇りを持っています。
まぁ寵愛的なライバル心はありますが、汀の甘えっぷりは相当なので大丈夫みたいです。

今後も多分描写はしませんが、汀は分身的な魔法をイチャコラに利用しています。
ｇｒａｎｄ病原の独占欲の問題ですが、相手が複数ならコレ系の技が必須だと思っています。
だって好きな人が、自ら認めた相手とは言えその人と一緒にいて、自分は１人寝とかｇｒａｎｄ病原には不可能です。

基本的にエヴァと寝ている汀は、千雨と茶々丸それぞれに有実体分身的な魔法を派遣しています。
するコトもして、魔法解除で経験共有です。
びばうずまきさん。
コレは譲れません。

今日も感想をいただきました。
ありがとうございます！！
やっぱりすごくうれしいです。
会社でもちらちら携帯気にしてしまいますね。

前話のと言うか交渉時の汀達が素直なのはやはり優先度の問題でしょう。
汀達は正直、麻帆良に行かなくてもいい訳ですからね。
渡りに船だし乗っとくかな？とその程度です。
現在でも何時でも引っ越せます。
大事なモノは魔法球へですから、便利ですよね魔法球。
あと、どうですか？今回はイチャコラ足りました？
エヴァは人前でイチャコラしないんです。
でもその分は千雨、茶々丸がいますので、学校でもイチャコラしますよ。
パルさんブンヤさんが煩いでしょうね。

では明日もがんばります
ｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第１８話　ワタシ達とアイツラ　その７＊

「そうか…わかった。君たちの絆は確かなものみたいだな。魔女、いや緒々嶋汀。貴様を信じる訳じゃない、だがそれが千雨くんの望みなら我々は譲ろう。一歩離れて君たちを見守ろう。だが忘れるな、千雨くんを悪に引き摺りこんだなら、その時は貴様を許しはしない、我々の正義にかけて！！」

ガンドルフィーニくんは眼鏡を光らせながらそんなコトを……

言う訳がありませんでした。

もー、ののしるののしる。

彼の、彼等の罵詈雑言は、ついに近衛学園長が遮るまでにヒートアップしていたようです。

今回の会談には、彼等のガス抜きが含まれていると承知していた筈の近衛学園長でさえも、流石に呆れるほどだったそうです。

そんな罵倒の雨の中、ワタシ達は…。

「“助けてください！！だれか助けてください！！”…とか合ってるんじゃねぇか？ほらなんか必死っぽいし」

「いや違うぞ千雨、コレは“それでも僕はやってない！！手の甲に偶然触れただけです！！”…だろう？」

「ソレ犯ッタヤツノ言イ訳ダロ、ゴ主人。ココハ“屑ハ死ネ!!貴様ラ屑ニ生キル価値ナドナイ!!”…ジャネエカ？」

「姉さんのソレはもう少しソフトにして、実際言っているのではありませんか？“事件は座敷で起きてるんじゃない!!本国で起きてるんだ!!”…とかではどうでしょう？」

「え、なんでみんなネタ？ワタシだけ“綺麗なガンドルフィーニくん”とかひどい」

認識阻害と遮音結界で、彼はナニを言っている？ゲームをしてました!!

近衛学園長以外の彼等は、ワタシが適度に反論しているように認識しています。
そしてワタシ達に罵詈雑言は届きません。

いや、いちいち聞いていたら流石に千雨ちゃんとかがキレるかもしれませんし。
今回は特にようちゅーい。

てか、流石ワタシの認識阻害。
魔法使いの彼等が微塵もレジスト出来ていませんねー。
あ、近衛学園長の顔、引きつってます。

てか、ん～…？
彼はもしかして、１人だけワザと対象から外してあげたコトに気付

いていませんか？
なんか、顔つきが“不甲斐ない、わしは大丈夫だったのに”みたいな雰囲気かもしだしてますよ？

まぁいいか。

「じゃあじゃあ“私自身、薄々思っていました。チャカとナイフが武器って魔法使いっぽくないって！！”とか必死に訴えるの図、とかは？」

あ、だめ？
ちぇー、だめ出しされちゃったチート美少女汀です。

綺麗なガンドルフィーニくんとか面白いかもなのにー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「マイロード、あーんしますか？ちゅーでしますか？」

「あ、おい絡繰！！今日は私の…私が汀に甘えていいハズだろ！！」

「ふっ…。汀、酌をしろ。美少女を肴にタダ酒だ。」

結局、近衛学園長はワタシの認識阻害を上手く利用し傘下の魔法使い達を纏めました。
まぁぶっちゃけ、言いたいだけ言わせてから折を見て誤魔化した、と。
あとはわし直々に説教するから、皆さん帰ってね、と。

「まーまー、たまの外食なんだしゆっくりしようよー。じゃ、まずはお酌ね。はいキティ…っと。ね、せっかくだし千雨ちゃんもおちょこ出してよ、茶々丸ちゃんも。リアルに傾国したコトある美少女のお酌だぞー」

タカミチくんがすっごい渋ってましたね。
千雨ちゃんと真面目に話すチャンスがウンタラカンタラとか。
すっごい渋ってたのに、千雨ちゃんにはやっぱり、ふつーにスルーされてました。

「オイジジイ!!コノコレ、寒梅ッテノ追加ダ!!アテニハ、スジコ頼メ!!」

あんまり悲壮感を漂わせてるけどこの人、昨日までは千雨ちゃんに対しても完全普通に対応していたんですよね。
そもそも今日までアレから2年以上も放置しといて今更?
もしかして、仲間内に公開されたから、だから今やっと謝罪する気になったのでしょうか?
で、自己憐憫にでもハマりました?
だとしたら、なさけないなぁ。

「んっ…ふぅ…、悪くない。なんてコトない酒も、汀に酌をさせれば途端に甘露だ。汀、近くに来い。お前が近くにいれば、ただそれだけでもっと旨くなる」

…っ!!
きゅん、てしました!!
ふふーふ、キティだいすきだよー!!
ぎゅー、すりすりー、てへり。

あ、そうだ！！

「キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん。ね、みんなのおちょこで呑ませて？ワタシは自分のおちょこなし！！みんなで順番こにワタシを酔わせてよ、ね？」

ふふーふ、みんなでたのしく呑んじゃうぞー！！

「…のう、わし忘れられとらん？しかもタダ酒タダ酒って、わし払うのかの？」

当たり前でしょうに。
貴方が招待したんでしょ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…ぅん…茶々丸ちゃん？茶々丸ちゃん？…あっ…酔ってないよね？」

「イエス、マイロード。この程度で酔いはしません、いくらでもマイロードのお世話が出来ます」

何故指を舐めてるんですか？
あ、でも舌が熱いくらいできもちいいかも。
ふふーふ、ほらべろｃａｔｃｈ！！

「……あぅん…千雨ちゃん、千雨ちゃん息があったかすぎ…ふぅ…」

「すぅー…はぁ…、すぅー…はぁ…。やばいな汀の熱、汀の匂い」

膝枕はいいんですけど、鼻先がお腹に埋まってますよ？
ぐりぐりするとくすぐったいよぅ。
仕方ないなぁ、ほらなでなーで。

「……ぅあん！！…キティ…やるならはやくしてよ…」

「ふふ…汀の肌…コレで酒が呑めるな。だがこの下に、至高の美酒が流れている…我慢ならんな、いくぞ…」

…っんつ！！後ろから首筋を吸血されてます。
ぴったりくっついて、ワタシの血に夢中なキティかわいいなぁ。
傷口を維持して、血を出してあげる。
ほらほら、魔力も込めちゃうぞ。

今、近衛学園長には認識阻害の餌食になってもらっています。
このイチャコラは見せません。
普段人前でのイチャコラするために、魔法を使ったりはしないワタシ達ですが、今は別。

キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも、みんなさっきまでのコト結構気にしてるみたいですからね。
まぁわかるかな。
ワタシだって3人の誰かが槍玉に上げられたら、相当なストレスですもん。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、だいすきだよ。

ワタシが麻帆良に住むって決めたから、言い返したくても、殴り飛ばしたくてもガマンしてくれてるんだよね。
彼等の悪口なんか気にしてないですよー。
ふふーふ、だからね、ゆっくり気持ちを治めてね。

「オイジジイ！！オカワリダ！！ナマコ酢モ一緒ニナ！！」

「ふぉっふぉ、わかったぞい。緒々嶋くん達は三人で酌をし合ってわしら放置じゃからな。たまにはこんなのも悪くはあるまいて」

チャチャゼロ満喫してるなぁ…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そろそろみんな落ち着いたみたいです。
ぎゅーとか、食べさせっことか、呑ませっことか散々しましたし。

まぁコレくらいなら近衛学園長の前でも出来るかなってコトは、大体総なめにしました。
ダメそうなコトは、認識阻害でやりました。
やっぱり彼も気付きやしないですね。
まぁ当然だし、どうでもいいか。

じゃ、聞いてみましょうか。

「…んく、ふぁ。で、何を伝えたかったの？」

ぎくり、とチャチャゼロに酌をていた近衛学園長が反応しました。
うわーろこつ。
案外お酒まわってるのでは？

「…気付いておったのか。…今日はわしからも特別な通達があるんじゃ」

ふーん、じゃあまぁ千雨ちゃんに目配せ。
すぐにワタシの脇へと控えてくれます。
さすがワタシの従者だね！！
そんな千雨ちゃんもらぶー。

キティと茶々丸ちゃんもだいたい同じ。
チャチャゼロも揉め事の気配でも感じたのか、ワタシの膝へ乗って来ました。
あ、ワタシに乗るんだね、キティはいいのかな？

「まず、わしらの条約に変更はなしじゃ」

麻帆良入居の際、パワハラ交渉で得た不平等条約ですね。
近衛学園長も色々言いたいコトはあっても、フタを開けてみれば、ウチの結界による捕縛があまりに有益なため、手を出しようがないのです。

まぁ例えば、既に去った彼らがワタシに対して何を言って来たとしても、歯牙にもかけません。
だって普通にどうでもいいですもん。
キティ達のコトが入ると別ですけどね。

でも近衛学園長とは、交渉で成り立っていいる関係。
ナメたコト言えば、分を弁えなければ、相応の受け答えをしますとも。
ええ、相応しい償いを。
ですからコレは当然のお話し。

「当然ね、続けて」

「うむ、では本題じゃ。年が明け三学期になったなら、この麻帆良に新しい魔法先生を迎える事になったんじゃ。それをわし直々に指導したいと思うておる」

おや珍しい。
魔法先生の出入りはまぁそこそこありますが、近衛学園長の直下とは。

「いいんじゃない？好きにしなさい。あ、ワタシ達は手伝わないわよ」

まさかとは思うけれど、一応潰しておきます。

「むう…そこをなんとか頼めんかのう。実はの、彼はのナギの息子なんじゃよ」

冗談じゃない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あ、キティが聞き体勢を解除した。
茶々丸ちゃんもあっさりお酌始めちゃった。

え？
あ、はい、ありがとう千雨ちゃん。
…んく、ぷぁ、おいし。

「オイジジイ、呑ミ過ギタミタイダナ、今日ハ帰レヨ」
あ、チャチャゼロに心配されてるし。

第１８話　ワタシ達とアイツラ　その７＊（後書き）

第１８話更新です。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
読んでくださってありがとうございました。

もうホントごめんなさい。
残業と持ち帰り分で…
でも仕上げして更新してから寝ます。
もうよくわからないくらい眠いです。

今回も感想いただいていたのに、ごめんなさい。
でもそのおかげで眠気に負けずかけました。
ありがとうございます。
期待していただけるなんて、うれしいです！！
これからも、もっとがんばりますね！！

あと感想に間違いなんてぜんぜんですよ。
だって、いただいた感想を読んで、糧にしてるんです。
コレで、もっとがんばれます！！

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第19話　こんな噂が広がったら!?＊

《きーんこーんかーんこーん》

午前中の授業をすべて終えたワタシ達に待っているのは、たのしいたのしいお弁当たいむです。
お弁当は、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの2人に、日替わり交代で作ってもらっています。

今日は確か茶々丸ちゃんの日です。
茶々丸ちゃんのお弁当は、計算し尽くされた栄養バランスと、女の子らしい彩りが両立したパーフェクトお弁当です。
きょうのおかずはなにかなー。

「あの、さ。緒々嶋さん?ちょっと聞きたいんだけど…今いい?」

って、神楽坂明日菜だ。
めずらしー。
ワタシ達ってぶっちゃけ、クラスメイトとは溝がありますからね。
あ、彼女の後で何人かちらちらこっち見てる。

クラスメイト注目のチート美少女、汀です。
美少女クラスの中でも突き抜けた美少女っぷり、その汀ちゃんが注目されるのは仕方ないですね!!

いやまぁ、今回は単にめずらしーから見られてるだけでしょうけど。
神楽坂明日菜とは、今まで接点がぜんぜんありませんでしたからね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「何かしら？これからお弁当だから、手早くお願いね」

ワタシの隣の席は、千雨ちゃん。
ちょっと、あいこんたくとー。
千雨ちゃんらぶー、てへ。

秘密の多いワタシ達が、べんりまほー念話を多様しないのは、気分的な理由です。

だってワタシ達はいつも近くにいるから。

それなら、気持ちを伝える方法なんていくらでもあります。
アイコンタクトとか目配せとかの、深いトコロで繋がってる感、想い合ってる感が素敵なんです。

だから、簡単なコトや、違っても笑って済ませられるコトなら、それで伝えればいいんです。
だいすきだよ、って想いを乗せて、とどけワタシのきもち！！

ちょっと離れたら、すぐに念話使いますけどね。
別に使用を避けてたりはないので。

「あ、ごめん、えっと千雨…さん？のほうに聞きたい事あってさ」

あら？
思わず千雨ちゃんと目を合わせて、はてな？

学校での千雨ちゃんはワタシからまず離れませんから、お互いの行動をほぼ把握してます。
精々お手洗いの個室くらいしか、離れませんからね。

だからワタシも千雨ちゃんの行動、把握してますけど…
千雨ちゃんだけが呼ばれる要素なんてあったかな？

神楽坂明日菜の言い分だと、千雨ちゃん1人に話を聞きたい感じですよね？
魔法使い連中の仕業？
いや…うんやっぱり意識誘導の魔法は使われていないですね。
やたら力業の記憶封印が、普段通りあるだけです。

「私、1人でか？もし昼飯の誘いってんなら、汀達と食うから無理だぞ」

「あ、うん、えっと…ちょっとだけ聞きたい事あるだけだから、今ダメ？」

「あー…汀？」

千雨ちゃんの目が“助けろ、断れ”って、がんがんに伝えてきてます。
うんまぁ千雨ちゃんは特に、麻帆良住人との付き合い減らしたがってますからね。
普段から。
じゃ、だきょうあんでへるぷってあげよー。

「ね、神楽坂さん？千雨ってね、とても人見知りなのよ。だからね、

もしよかったらワタシも行っていいかしら？そのかわり、貴女は後ろのお友達連れてきなさいな」

彼女の背中にはクラスメイトの近衛木乃香が熱視線びーむしてます。その近衛木乃香を、こちらもクラスメイトの桜咲刹那がちらちら盗み見？しています。

まぁ他にも何人もワタシ達を見てますけどね。

まぁ放置です。

「あー…えっと、ちょっと待ってくれる？木乃香に相談するから！！」

言うないなやダッシュする神楽坂明日菜。

いや、貴女、机３つ分くらいの距離を走りなさんな。

まぁいいや、じゃ待ってくれてる２人を呼びましょうか。

さっさと軽く話して、みんなでいつもの場所へいこうね、千雨ちゃん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは学園の屋上。

人払いと遮音の結界を敷いて、４人でお昼を食べるのが恒例です。

いつもイチャコラおべんとたいむ。

なんですが！！

今日は荒れてます！！

「…あぁ!!最悪だ!!ふゆかいだー!!」

「ホントだよ!!びっくりしました!!美少女、汀はびっくりしましたよ!!」

神楽坂明日菜の…ベルのご用事は最悪でした!!
もはや彼女なんかベルで十分です。
これから彼女のコトは、御本人愛用髪留めを用いて表記するコトにします!!

「ふはは、まさかの勘違いだったな。アレなら麻帆良壊滅のほうがまだ現実的だ」

「千雨さん、お気の毒です。もしわたしがそんな誤解を受けていたらと思うと……。本当にお気の毒です」

新聞部にでも知られて、学園内で広められたらと思うと…。
でもまぁ事実無根ですけどね。

「私が高畑に迫られてる!?冗談じゃない!!私は汀のモノだ!!」

どんな勘違いですかベルめ!!
千雨ちゃんはワタシのモノですよー!!

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はい、次はゴハンね。あーん…」

先週に無事行われた近衛一門との会談以来、タカミチくんが千雨ちゃんへ微妙な視線を向けるようになりました。

「ん、…むぐむぐ。汀に食わせて貰うと、米でもすごい美味いな。次はアスパラベーコン頼む」

ワタシ達は当然のするー。

いや、仮に謝られても許すとかって問題じゃないし。

ワタシ達にとっては、もうそんな段階はとうに越えています。

「てれり。じゃ、アスパラね。はい、あーん…」

そしてあのコトが、千雨ちゃんの麻帆良住人嫌悪の、ひいては魔法使い嫌悪の一因であるのは確かです。

いや、むしろ主因でしょうか。

「ん、…むぐむ…ぐ。やっぱコレ、私が作るより美味いなぁ。汀効果を抜いてもやっぱ絡繰の料理のほうが美味いよ。私ももっと頑張んないとな」

でもワタシ達は千雨ちゃんにどうこう言ったりしません。

別に嫌いなら嫌いでいいです。

まぁ、無差別に敵意を振り撒いて、暴れたりする訳でもないですしね。

「確かに茶々丸ちゃんの料理は流石。すっごくおいしーよ！！毎日ありがとうね。でも千雨ちゃんの料理だって負けてなんかないよ？

とってもおいしいもん、ね。それでも、もし千雨ちゃんがそう思うなら、これからがんばってよ。ワタシのために、ワタシにおいしいゴハン食べさすためにがんばって、千雨ちゃん。」

まぁそれは置いておきまして。
ベルは脳のどの回路を混線させたのか、そんなタカミチくんの視線を恋愛的に誤解したのです。

「だな。そうして茶々丸以上になれば、次は茶々丸が成長する番だ。2人とも、これからも期待しているぞ」

で、近衛木乃香に相談して、直接アタックに来るコトにしたようです。
もちろん事実無根だと否定してあげました。
ちょっと認識の食い違いがあるだけ、放っておけば落ち着くよ、と助言も。

「マイロード、マスター、千雨さん。ありがとうございます。これからも精進いたします」

「あぁ、任せてくれ。いつまでも駆け出し従者じゃないからな」

それで満足したようでした。
で、軽く昼食に誘われたけれど、断りを。
2人はたいして気にせず教室へ戻って行きました。

「ういうい、ワタシ達はホントにいい従者をもちましたー。ほらほら千雨ちゃん、ぎゅー」

そんな訳で、ちょっとふて腐れ千雨ちゃんに、あーん…、してあげ

ていたのです。

あーん…もいいけど、ぎゅーもいいね。
あったか千雨ちゃん、だいすきー、ぎゅー。
「汀…汀のためならなんだって出来そうだ」

やさしくて、ちょっと潤んだ瞳がワタシだけを写してます。

「あっ、うん、ありがとう千雨ちゃん…」

微笑んで、頬に添えられる手に任せ、瞼をおろします。

…っん、はぷ…んちゅっ、ちゅっ…

愛してます、千雨ちゃん。
ずっとワタシのそばにいてね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あ、会談の最後で近衛学園長が言っていたコト。
サウザンドマスターの子供の話は、キチンと拒否しました。
いや、だって知りませんよ。
特に親しくもない知人の子って……最早完全他人でしょ。

ワタシ達にはいつもみたく、のんびり暮らせるならそれがいいのです。
その子が変に突っかかって来なければ、基本スルーしますよ。

え、千雨ちゃんにばっかりちゅーとかずるい？
あーと…嫌だって、離さないって、ワタシの耳はむはむしながら言ってる。
タカミチくん由来の嫌悪感消えるまで、このままがいいってっさ。

ふふーふ、かわいいなぁ、ぎゅー

第１９話　こんな噂が広がったら！？＊（後書き）

第１９話更新です。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
読んでいただいて、ありがとうございます。

しばらくは、こんな感じの日常編回。
次は茶々丸かな？

感想枠にてご指摘いただきました。
ありがとうございます。
恐らく眠気に負けたんですね…
実にはずかしいです。
急いで修正しました。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２０話　はじめてのおるすばん＊

《…ぱちぱち…》

９月をすぎた麻帆良は、強烈だった残暑をあっさりと振り切り、すっかり秋の装いです。
学園都市一斉衣替えも無事に済み、身近な場所にも季節の移ろいを感じます。
千雨ちゃんこーでも、何枚か重ねて着るコトが増えましたね。

《…ぱち、ぱち…》

ワタシ達の家の周辺ではずいぶんと紅葉がみられ、落ち葉掃きも日常になっています。

そしてワタシがそれに火を放つのも。

「マイロード、まだしばらく焼けませんよ？中でお休みになられてはいかがですか？」

「むー…ん？ごめん茶々丸ちゃん、なにー？呼んだ？」

「はい。おいもが焼けるまでは、わたしがおります。お部屋でお待ちいただいて結構ですよ？、と」

もちろん、焚き火、ヤキイモです。
秋と言えばヤキイモ。
外せませんよね。

「ふふーふ、あまーいよ茶々丸ちゃん。ほくほくヤキイモよりあまーいね。」

「…？。と、仰いますと？」

「ワタシの眼力でヤキイモを美味しくしてるの！！おいしくなーれ魔力をガンつけしてるのさ！！」

「まさかそんなコトが……出来るのですね？」

「うん、魔女トバリに出来ないコトは、したくないコトだけだからね」

天高く、馬肥ゆる秋。
チート美少女、汀はヤキイモいっぱい食べても肥ゆりません。
細すぎるくらいの美少女です。

《ごぼぉぉう！！》

「わ、焚き火に魔力行っちゃった…」

「マイロード！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ぐてー。

「少なくとも汀の分、魔女は作んないとな」

ぐててー。
ねむひ。

「そうだな、正しく魔女なんだからな。まぁ折角の機会だ、全員に用意したほうが汀も喜ぶだろう」

すりすりー。
キティ、なでて？
なでてよー。

「コレは…かわいっ…。猫でも相応しいのでは…あ、いえ、すみません。」

ふふーふ。
ごろごろー…
キティだいすきぃ…

「確かに…。なんだコノかわいい生き物。エヴァ、譲ってくれ。その究極にかわいいの、私にくれ！」

むぅ？…っ！？…ふっ…うぅん…
キティ…すりすりぃ…

「……マスター、猫はわたしの管轄です。すぐに引き渡してください。……ママイロードは！！わたしの猫でです！？」

ねこぉ…？

…んにゃー、ぺろぺろ…
すりすりぃ…にゅふ…

「……誰が貴様ら、いや誰にもやるものか。私の…ネコ汀だ…。もういっそ誰の目にも…そうだな、部屋へ行く。私だけのネコ汀を監き…寝かしつけてやらんといかんな、うむ。私だけのだからな、うむ」

…むふー…
…すぅ…

「…おいエヴァ、目がやべぇ、お前マジだな…」

「貴様が言うか…その卑猥に蠢く指を切り落としてやろうか？」

「…マママイロード…マイロード、マイロード…マイ！！ロード…わたしの…わたしだけの！！」

……んぅ？

「「「殺るか！？（わたしの！！）」」」

……なぁにぃ…もぅ…

「……うるさぁい…」

ねむ…いの……に！！

…キティ！？
…千雨ちゃん！？

…茶々丸ちゃん！？

「……“煩いよ！！”」

「「「す、すみません！！」」」

もー、じゃましないでよ…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…なぁ、やっぱ起こしたほうがいいんじゃねぇか？」

「…千雨お前…またさっきの威圧をくらいたいのか？」

「ですがマスター…万が一起きられたら…」

「汀だってガキじゃない。そもそも世界の何処にいたって、こいつなら即座に探知してくる。私達を見失う訳ないだろ。それにもともと汀は私の買い物に付き合うだけだったからな」

「そっか、ならまぁ困りはしないか。それに探知のコトは確かに、だもんな。…じゃあ書き置きすればいいか？」

「あ…では、わたしが」

「うむ、茶々丸が書き上げたら出るぞ。一応急いで行くか」

「だな。場所はわかってんだ、転移で往復すればいい。…やっぱ起きる前に帰りてぇしな」

「…はい、では行きましょう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……んー？…

すり…すり……？

…あれ？…コレ…そふぁー？

「…キティ…？」

毛布？いつの間に…あぁ寝ちゃったんだ。

「キティ？…あれ？」

いない？

……この座標は、麻帆良百貨店。

…千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも一緒ですね。

そっか、買い物に行くって言ってましたっけ。
寝てたから、置いてかれてしまいました。
っと、書き置きはっけんー。

えっとなになに…

“予定通り買い物に行って参ります。マイロードはそのままお休みになっていてください。可能な限り急いで戻ります　茶々丸”

しんぷるー…。
うん、そっか。

えっと……チャチャゼロは別荘入れたままみたいですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

…いつもみんなと一緒の居間で一人きり。
…静かです。

普段だってこの居間で、穏やかな時間をすごすコトは珍しくもありません。
窓の外をのんびり眺めながらお茶したり、それぞれが好きな本を読んでいたり。
ワタシ達の日常が賑やかなのは確かだけれど、ゆったりした時間だって大切にすごしています。

でも一人きりの静寂は…きらいだな。

そっか、麻帆良に来てから１５年。
ここ２年は千雨ちゃんに茶々丸ちゃんもいました。
それ以前の生活よりも、ずっと安定した日々を暮らしています。

ここの生活は、常に誰かと一緒にいました。
どこかに行くにも、なにをするにも、常に誰かと一緒。

キティといつも一緒なのは当然です。
千雨ちゃんはどこでも付き従ってくれています。
茶々丸ちゃんはどこでも手助けしてくれます。
チャチャゼロは何だかんだ言いながら、結局いつもついて来てました。

賑やかで、穏やかで、しあわせな日常。
それは旅暮らしで得ていたのとはまた別の喜び。

…だから一人きりになると、こんなに寂しいなんて思いませんでした。
いつからこんなコト考えるようになったんでしょう。

さみしいなぁ…
みんなはやく帰って来てぎゅーしてくれないかなぁ…

キティにあのどんなトキよりも真剣な瞳で、愛してるって抱き締めて欲しい。

千雨ちゃんのあの照れながらも真っ直ぐ見つめる瞳で、愛してるって抱き寄せて欲しい。

茶々丸ちゃんのテンパりを突き抜けて潤んだ瞳で、愛してるって包み抱いて欲しい。

みんなの位置探知を止めます。
それぞれがばらばらに動いていたのは、きっと急いでくれているからでしょう。
だからワタシも、ただ待つコトにします。

みんなが帰ってきて、起きてるワタシに驚くトコロを想像しながら。
きっとすぐに謝ってくれて、それからぎゅーしてくれるの想像しながら。

あぁ、不思議です。
なんだか、胸があたたかくなってきました。
みんなが帰ってきてくれるのを想像しただけなのに。

その当たり前が、すごくしあわせ。

早く帰ってきてください。
“おかえり”って、とびきりの笑顔でみんなを迎えますから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…ん？今…」

「おい、なんだ？買い忘れか？転移直前に気付けてよかったな」

「マスター？それとも何かございましたか？」

「いや…なんだか今、汀が凄く可愛く笑った気がする」

「「いや何故わかる（のですか）！？」」

第２０話　はじめてのおるすばん＊（後書き）

第２０話更新でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
読んでいただいてありがとうございます。

いただいた感想のアドバイスより、考えてみた回。

まずお礼。
感想ありがとうございます。
とてもうれしい言葉をいただいちゃいました。
これからも汀達、最強一家の余裕でスルーストーリーをお楽しみくださいね。

で、今回のお話ですが、いただいたアドバイスを元に執筆してみました。
お楽しみいただけたでしょうか？
まだ力不足で、中途半端かな？
これからもかんばります。

出来はともかくとして、とてもためになるアドバイスでした。
これからも様々なシチュエーション、試していきます。
ありがとうございました。

あ、第１９話の意味不明部分、修正しました。
ご指摘ありがとうございます。

きっと眠気に負けたんだ。

ではｇｒａｎｄ病原でした
すごくねむいです、おやすみなさい

第２１話　たまには茶々丸と帰り道

唐突だけれども、ワタシの考え方がいつも正しいなんてコトはありえません。
それどころか、愛し合い繋がっている大事な相手、キティを怒らせてしまうコトだってあります。
まぁそんなのわざわざ言うほどのコトではない、至極当然ではありますけど。

「はい、さようなら」

ワタシとキティは、その魂までもが永久に溶け合い混じり合う関係とはいえ、それはお互いの全てを認識出来るというコトではありません。
明確な違いがあるからこそ“溶け合い混じり合う”コトが出来るのですから、それは逆説的に“永久に異なる存在”である証明になるのでしょう。

「ごめんなさい、もう行っていいかしら？」

ワタシはワタシ、キティはキティ。
当然です。
確かにワタシはチート美少女でナルで自分大好き自信たっぷりですが、キティに向ける愛は完全に突き抜けた別物です。
相手がキティだから愛しています。

「何回も言わせないでちょうだい。断るわ」

チート美少女、汀はキティだから愛しているのです。

意見が違うトキがあるのも当然です。
別々の行動をするコトだって当たり前です。
だって相手は自分とは違う存在なんですもの。
それは千雨ちゃん、茶々丸ちゃんも同じコト。

「貴女の新聞は読んでいないわ。家族を載せる気もない。もういいかしら？朝倉和美さん？」

だから切なくなんて、ないったらないですもん！

キティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが、３人での買い物中にパパラッチされたのなんか何とも思ってないんですーだ。
撮られた写真の中で３人が選んでたのは、ワタシのための物だって知ってますもんね。

写真の３人が素敵な笑顔なのは、ワタシのコト考えてくれてるからだって知ってますもんね！
。

…でもこの写真だけ見ると、やっぱりちょっと寂しいです。
やだなぁこんな気持ち。

キティが好きすぎるから。
千雨ちゃんが好きすぎるから。
茶々丸ちゃんが好きすぎるから。

側にいないと、すぐ寂しくなっちゃいます。

遠くで楽しそうにしていられると、すぐ切なくなっちゃいます。

ねぇ、こんどワタシとも一緒に写真撮ろうよ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ、はい、マスターも千雨さんも当然気付かれていました。ただ、わたし達の容姿ですと見知らぬ男性に無断で撮影されるコトもままありますし、別段撮られて困る状況ではありませんでしたから。なにより急いで帰るつもりでいましたので放置しました。それがまさか朝倉和美さんだったとは予想していませんでしたが」

放課後の帰り道。

今日は茶々丸ちゃんと2人てくてくです。

もちろんおててきゅっとね。

「まぁ認識阻害的にそろそろ盛り返して来る頃だから仕方ないのかもねー。定期的にきっちり拒否してるのに、しばらくするとそんなコト忘れたみたく付け回し始めるもんね」

話題はクラスメイトの朝倉和美について。

彼女は麻帆良報道部に所属する噂好きさんです。

「認識阻害ですか…。取材を拒絶をしても彼女の興味は尽きた訳ではない。次第に膨らみ、いつしか此方の拒絶を忘れたのかように行動を再開する。よくある類いの認識阻害が後押しした事例ですね」

彼女はワタシ達の関係や生活を記事にして報道したいと定期的に主

張します。
確かにワタシ達は、ジャンルの異なる美少女揃い。
出掛ければ、それがどこでもすぐ注目を集めますからね。

「ふわふわの金髪、鋭利に輝く瞳、手折れそうな身体、おとぎの国の美幼女キティ。さらさらの髪、くりくりつり目、理想のスレンダー体型、全女子が羨む美少女千雨ちゃん。鮮やかロング、優しい眼差し、女の子の理想のボディ、パーフェクトスタイル美少女茶々丸ちゃん。そしてその中心にいて、なおも輝くチート美少女汀！！…なるほど確かに、記事にしたらそりゃあ売れるよね」

有名になるとか、全く興味がありませんが。
じつにめんどーです。
茶々丸ちゃんに体を預けちゃえ、だきっ。

「…ありがとうございます、マイロード。マイロードからいただいたこの身体は、わたしの自慢です」

茶々丸ちゃんは謙遜しませんよ。
それは拵えたワタシを貶めるコトに繋がりますから。
ワタシに愛されている自覚もありますしね。

腕をぎゅーされて歩きにくいだろうに、むしろ近づくように歩幅を合わせてくれます。
えへ、うれしくてもっときゅっとしちゃう。

「ふふーふ、ワタシも好き。でもそれは心が今の茶々丸ちゃんだからだよ。その身体の主が茶々丸みたいな子で、ワタシも自慢だね」

「……いいえ、マイロード。嬉しいお言葉ですが、す、少し違いま

す」

んお？

立ち止まって見つめられました。

ん？とりあえずぎゅーで密着、見上げます。

あ、照れてる。

うれしいコト聞けそうだから後押しー。

「なに？ちゃんと言ってみて？不足なく伝えて？」

覗き込んでくる瞳が想いに灯る。

溶かされそうな眼差しが愛しい。

「イエス、マイロード。…この身体も、この心も、この魂も、わたしの主は貴女ですマイロード。わたしはマスターにお仕えする従者です。誇りと自覚、責任と感謝を持ってお仕えしております。それでもこの魂が貴女を愛するコトを、総てを捧げるコトを渇望するのです。マイロードとマスターが決して別たないからこそ、主張出来る想いですが、それがわたしの確かです。マイロード…こんなわたしですが、貴女を愛していると言って良いですか？」

うん、もちろんです。

だってワタシがそうしたのですから。

キティの従者として０から造り上げたのに、ワタシを愛するように育てました。

不合理な、矛盾した行いです。

でもだめ。

ワタシの愛するキティを、ワタシが愛せもしない程度の存在に任せるなんてだめ。

「うん、いーよ。いいんだよ。茶々丸ちゃんが感じたコト、ワタシはうれしいよ。ワタシとキティのための茶々丸ちゃん。ワタシだけのモノの茶々丸ちゃん。どちらも確かに茶々丸ちゃんなんだね。うん、茶々丸ちゃん、これからもずっとそばで、愛していると言ってね」

でもね、愛するキティのためだからって、それだけで人を愛するなんてむりです。
だからね、茶々丸ちゃん。

産まれてきたのが茶々丸ちゃんでよかった。

産まれてきてくれてありがとう。
茶々丸ちゃんでいてくれてありがとう。

茶々丸ちゃんを愛しています。
茶々丸ちゃんだから愛したんです。

……んっ、ちゅっ…ちゅっ…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、なんで今日はキティに千雨ちゃんがついていったの？」

「昨晩将棋をモチーフにしたＴＶゲームで、マスターは千雨さんに３連敗しました。そしてそのリベンジに将棋部の部室を貸し切りまして」

「えー…。ウチでやればいいのに」

「決闘だそうです。マイロードにおねだりする権利を賭けた、と。おのずと相応しい場所を用意するコトになりました」

「聞いてないし…」

「わたしはマイロードと2人で帰れますので、既にご褒美をいただいたようなものです」

「あら策略家。ふふーふ、じゃ、しっかりごほうびあげなきゃね。早く帰ろっ」

「イエス、マイロード」

第２１話　たまには茶々丸と帰り道（後書き）

第２１話更新でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

なんてコトない帰り道回。
本作品ってこんな日常を綴るのがメインなんです。
あまりイベントばかり起こさず、なんてコトないイチャコラな日々がメインの小説ですよ。

つまりｇｒａｎｄ病原が茶々丸とイチャコラしたかった…だけ…なんです。
原作読んでネタ考えてたら、茶々丸ちゃんの健気さについ…

あと、マイロードとマスター、主を２人も据えるのって、実際どうなの？と思っていまして。
今回はそのへんのフォローになればいいな、とも思います。

とてもうれしい感想をいただきました。
試行錯誤の結果が評価されたのだと思うと、ついつい小躍りしちゃうほど喜んじゃいます。
すごく嬉しかったです。
ありがとうございます。
これからもがんばります！！

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２２話　衝突？スルー？

じゅーじゅー、もぐもぐ。

「茶々丸、タレを取ってくれ」

今日の晩ごはんは焼き肉です。
うまうまー。

「はい、マスター。つけすぎないで下さいね」

魔法世界のお肉ですよ。
ドラゴン焼き肉です。
高級食材ですうまうま。

「あ、エヴァ、岩塩買ってみたんだ、試してみてくれよ」

ぱっぱと狩って来ました。
転移がワタシ、ハントが千雨ちゃんとチャチャゼロのお仕事です。

「アレ、オレガ焼イテタモツハドコダ？誰カ食イヤガッタノカ！？」

キティ、茶々丸ちゃんは近場の街で他の食材を揃えてくれました。
旧世界にはないものばかり。
今夜の食卓は魔法世界ディナーです。

「ほら汀、コレもコレも焼けてるぞ。せっかくだし岩塩も試してみてくれよ」

もぐもぐ？
魔法岩塩ですね。
きっと悪魔的に美味しいに違いありません。

「千雨ちゃん、千雨ちゃん。あーん…」

あーんしてもらえば、公爵悪魔級に美味しいに違いありません。
うれしいしね。

「っとに、仕方ねぇな…。ほら、あーん…」

あむ、もぐもぐ…美味しい！！
公爵悪魔もかしずく美味しさ！？

「あ、千雨貴様！！汀、コッチも食べろ。ほら、あーん…」

キティは全くもう、かわいいんですから。
あーむ、もぐもぐ。

「ん、ありがとう千雨ちゃん、キティ。悪魔的に美味しいよ。ふはは
はー、な美味しさ！やっぱりお肉とかはあっちで手に入れたほうがいいね」

もっと焼きましょう、そうしましょう。
まぁ焼くのとかは、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの役目ですけどね。

「あ、姉さん、モツこちらでは？鉄板の端で炭になっています」

「ア、クソッ。サケニ夢中デ焼キスギタ。マァイイ、妹、ソレ取ッテクレ」

あ、チャチャゼロなんてモノを食べる気ですか…
的確な表現で、炭です。
まっくろ…

「うわぁ、チャチャゼロそれは止めたら?モツまだあるんでしょ?
ぜったい美味しくないよ」

「そうですよ姉さん、新しく焼きますから少し待っていてください。
コレは捨てますね。」

ですよね、流石にそんな炭は美味しくないですよ。
わざわざ食べるのですから、美味しいモノを食べませんと。

なにせワタシもチャチャゼロも、食事に必要性はありません。

ワタシは不朽不滅の魔女トバリ。
飲まず食わずでも、摂取するモノがなに一つなくても、活動に問題は一切ありません。
摂取、補給、供給、それら一切なくたって、なに一つ不自由しません。

チャチャゼロはキティの魔法人形。
キティから魔力供給さえあれば活動出来る存在ですし。

とはいえチート美少女汀としては、美味しいモノいっぱい食べたいのです。

女の子ですもん、甘いのいっぱい食べたいのです。

ワタシは必要もないのに、楽しみのために食事をしています。
ならばなおのコト、食べるのなら美味しいモノを、です。

そしてなにより、ごはんは家族でたのしく、ですよね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今日の晩ごはんは別荘を利用しました。
狩ったドラゴンの転送先を別荘にしましたからね。
ごちそうさま後のてぃーたいむも普段よりもっとのんびりもーどです。

「んー…。ごはんもおいしーし、お茶もおいしーし、家族はそばにいるし。コレってしあわせだね」

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんもすでに食事の片付けを終えていて、一緒にのんびりしています。
チャチャゼロも今はお茶。

「当然だ。私達が側にいるんだ。いつだってお前には幸せでいてもらうさ」

「あぁ勿論だな。一緒に目一杯幸せに生きるって誓ったんだから。」

「マイロードの幸せのため、いつでも全力でお仕えします」

「う…。素敵すぎる、みんな素敵すぎるよ」

なにげに口をついて出ただけの言葉に対し、愛に満ちたこの返事。
もうめろめろです。

隣に座るキティの肩に頭を預け、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんに笑顔をむけます。
らぶー。

「トコロデヨ、魔女。最近ハ魔法使イ連中ガウルサイラシイジャネェカ。ソロソロ殺ルカ？」

最初こそ「砂吐ク、砂糖吐ク」とワタシとキティのイチャコラを揶揄していたチャチャゼロも、長年の生活で十分なスルーちからを獲得しています。
ふふーふ、すっかりなかよし家族ですね。

「あぁそうなんだよ、チャチャゼロ聞いてくれ。この間、汀と2人で帰って来てたらよ、アイツら汀の目の前で私を引き抜こうとしやがんだよ」

あー、あったありました。
名前とか知らない人でしたけど、一方的にまくし立ててましたよ。

「なに？本当か汀？」

言ってなかったでしょか？
まぁ話題にする程のコトでもありませんしね。
最近ちょくちょくあるんですよね。

「ん、ホントホント、呆れるよねー。ワタシのコト見えてないのかと思っちゃった。手、繋いでたのにね」

千雨ちゃんに手を伸ばします。
あ、ふふーふ、にぎにぎ。
恋人繋ぎしてくれました。
千雨ちゃんらぶー。

「行動が露骨過ぎますね。なにかあったのでしょうか？」

あ、茶々丸ちゃんがちょっとうやらましそうかな。
じゃあ茶々丸ちゃんには、お風呂のトキにがんばってもらっちゃいましょう。

「戦争ナノカ？ヤットココノフザケタ魔法使イドモヲ殺レルノカ？」

期待してるトコ悪いけど、今のチャチャゼロとまともに殺り合える相手なんて、麻帆良に存在しませんよ？

「まさかだよチャチャゼロ、まだ戦争はダメ。今回の卒業くらいまではいるよてー」

なんだか最近のきな臭さで、早めに出て行くべき？なんて、少ししか考えてません。
麻帆良は便利な土地ですけど、魔法使い皆殺しにしたらその都市機能は立ち行かないでしょう。
彼等と戦争になれば、どのみち旅の再開って訳です。
経営とか統治とかワタシ達はやらないので。
なら面倒増える前に出発しちゃいましょうか？と、たまに考えてま

す。
たまに、少しだけですよ？

「おいおい“まだ”って、出ていく前に殺るのかよ？そりゃ私も麻帆良は嫌いだし、借りもあるからな、いざってなったら賛成するぜ。けど汀のコトだし、今日みたいに黙って行くもんかと思ってたんだが…違うのか？」

それでもいいんですけどね。
てか、それがらくなんだけどなー。
近衛学園長がちょっと後先考えずによくばった弊害があるのです。
彼、派手に宣伝しすぎちゃってるんです。

「ふん、連中が黙って私達を見送ると思うか？考えが甘いな千雨。私達は麻帆良の宣伝塔だ。伝説として語り継がれる程の私達を、サウザンドマスターが麻帆良へ封じた。近衛学園長は世界にソレを誇示した。正義強し、麻帆良頼もし、とな。まぁ実情はコレだがな。よって、出て行くなど連中は認めないだろうし、黙って行けば追跡があるだろう。面子の問題だからな、実情を知る近衛学園長とて半端は出来んさ」

そうなんですよね。
最初の数年の根回しとか宣伝効果とかが上手くいったらしくて、彼調子にのっちゃったんですね。

「ならば最初からある程度戦闘。例えば近衛学園長との談合のうえの戦闘など後の交流の余地を残した、建前上の事件を起こしてから出奔する訳ですか？」

お、茶々丸ちゃんやりますね。

やっぱりいまごほうびです。
キティと千雨ちゃんに目配せ、ゆっくり離れて茶々丸ちゃんの膝に座ります。
んー、素敵な座り心地。

「…よっと、ありがと茶々丸ちゃん。よしよし冴えてる茶々丸ちゃんには、ぎゅーしてあげましょう、ぎゅー。…で、まぁそのトキ次第って考えてるよ。結局さ、ウチに敷いた結界、わざと構築も強度も弱く敷いた1番外のやつすら、彼等は抜けてないでしょう？なんか今まで受けた被害って、悪口言われた程度じゃない？もう放っといてもいいかなぁって」

ふふーふ、茶々丸ちゃんも身体に腕をまわして抱き止めてくれます。
らぶー、ってキティがすこしヤキモチしてますね。
もう、ワタシはキティのコト大好きですよ？
そんな顔しなくていいのに。

「…む、汀、いやまぁいいか。とにかく、連中の出方次第だ。今度来るらしいサウザンドマスターの息子とやらも同じだな。明確に敵なら殺ればいい、半端なら放置でいいさ。所詮雑多だからな、気にするコトもない」

そうなんですよね、結局。
彼等が仮に殺意を持って来たトコロで、ワタシ達には何も出来やしません。

「あぁ分かった、了解。ま、ココ便利ではあるしな。旅開始までは多少は配慮しとくか」
だからって、されるがままなんてありえません。
それは明確な敵対、排除対象です。

果たしてどうなるでしょう？

「わたしはお2人に従うまでです」

なるべく面倒ないのがいいんですけどね。

愛するキティと、愛する千雨ちゃんと、愛する茶々丸ちゃんと、あとチャチャゼロのみんなで暮らす。

「ドウセ殺ルコトニナルト思ウゼ。ダカラマァイマハ我慢シテヤル」

おだやかで、さわがしくて、しあわせに満ちていて。

ワタシ達は、ずっとずうっとそうしていきます。

「おっけー。じゃあ、おふろ行こっか」

邪魔はゆるさない。

誰にも、何にも邪魔はさせません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

よし！

今日はワタシが洗ってあげま、ひゃん！？

あ、ちょっとキティ？

え？もしかしてさっき離れたコトまだヤキモチしてくれてるの…って、千雨ちゃんも！？

いやいや、だから今日はワタシが…うぅん！？
ちょっ…あん！？…まだ話してる…ふぁ…にぃ…

…んふっ！…茶々丸ちゃんも！？

第２２話　衝突？スルー？（後書き）

第２２話更新でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいてありがとうございます。

最近の更新、ずっと深夜ですね。
ごめんなさい、もちょっとなんとかがんばります。

日常は続くよ回。
じつは、全然違うお話の予定でしたが、今後について感想をいただき、いい機会なのでこの内容になりました。
前も似たような話し出しましたが、汀達の麻帆良への当たりは、明確に決まっているではありません。
つまりｇｒａｎｄ病原も明確に決めていない訳です…
あれ、コレってだめだめ発言ですか？
ま、まぁ現時点での予定では、原作イベントを適度にスルーして適度に裏から解決するつもりです。
裏からってか、結果解決させました、みたいな感じかもです。

ネギさん登場まで、まだしばらくありますので、時間を使って考えますね。

あ、茶々丸捏造そろそろやりませんと。
ｇｒａｎｄ病原は日常回好きなので、意識しないと本筋が進まない…。
もっとがんばります！！

今日も感想いただきました。
ありがとうございます。
作品の今後にご意見いただけるのって、期待していただいてる実感があってとてもうれしいです。
これからどうなるのか、ｇｒａｎｄ病原にもまだ不明瞭ですが、正直ネギさん次第です。
汀達はスルー姿勢を外さないでしょうから、ネギさんががんばって絡んでくれれば！
ネギさんの活躍に乞うご期待？
…さくっと殺されたりして。
いやいや。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２３話　人造人間？ロボ？　その１＊

「ふむ、いいな、よく似合ってる。汀が魔女らしい格好をしているのを見られるのは、１年に今日だけだからか、より可愛らしく見えるな」

ワタシはいま、濃紫のとんがりぼうしに風もないのに揺れるローブを纏っています。
左手には大振りな箒。
絵に描いたような魔女スタイルです。

でもなぜかローブの下はミニスカートにガーターストッキング、ヒールのないブーツ、飾り紐でアクセントされた白いシャツです。

まぁかわいいからいいですけど。
美少女にふさわしい、きゅーと魔女です。

「ホントに？ふふーふ、うれしい、ありがとキティ。キティもその格好、ギャップがすごくいいよ。凛々しいのにかわいい！」

そしてキティは立派なスーツ姿。
それも中世っぽく、フリルで彩られたシャツが襟や袖から見え隠れしています。
そして襟が長く、常にたなびく漆黒のマント。
ゆるくまとめられた自慢の金髪、普段は隠しているはずの牙。

それはまさに吸血鬼。
くらくらするほどの魅力です。

あぁこんな吸血鬼キティになら、奪われてしまいたいです！！

「でもやっぱ見た目大事だな。なんつーか美少女すぎて、魔女っ娘って感じだけど、うん、めちゃくちゃ似合ってる」

横に控えていた千雨ちゃんも褒めてくれました。

てれり。

でもやっぱりそうだよね、ワタシの格好魔女って言うより、アニメとかの魔女っ娘だよね…

ねぇミニスカートが悪いんじゃない？

でも、かわいいからよしとします！！

「もう！ほめすぎだよ！でも、ありがとう。千雨ちゃんのスーツ黒猫はやっぱり使い魔役？すごい似合ってるよ、かわいい！髪は魔法？」

そんな千雨ちゃんは、かちっとした黒のスーツ姿です。

ベストにリボンタイ、胸ポケットに白のハンカチーフ。

金のチェーンはきっと懐中時計ですよね。

そしてその頭には黒のネコミミ。

それにともなって髪も黒く変わっているのです。

あ、後ろ側に尻尾もあります、黒の猫尻尾。

もしかしてもしかしてワタシ専属、黒猫執事さんでしょうか。

うわー、こんな千雨ちゃんに仕えられたら、一日中愛でて愛でて愛でちゃいますよ。

「ああ、髪は幻術の類い、猫耳が魔法道具なんだ。で、やっぱ魔女の侍従ったら黒猫だろ？エヴァには絡繰ともどもからかわれたけど、やっぱ私だって…な」

照れ気味の千雨ちゃんだけど、すっごく似合ってますよ！
はぁ、ぎゅーしたい！！
でも衣装にしわが寄ったらだめだし、いまは手を繋いでがまんがまんです。
千雨ちゃんのおててぎゅー。

「からかう？すっごく素敵じゃん！かっこいいよ？茶々丸ちゃんの色違いふさふさ耳尻尾も、ぎゅーしてもふもふしたいくらいだしね！」

そして茶々丸ちゃん。
こちらは千雨ちゃんの色違い、耳と尻尾も若干違います。

全体を灰色で装ったスーツ姿ですね。
そしてお耳と髪、ふさふさ尻尾も灰色。

うわーうわー、すっごいかわいいです！
もじもじしてる、もふもふ茶々丸ちゃんすっごいかわいい！
この耳尻尾は、狼でしょうか？

魔女の執事が黒猫だから、吸血鬼の執事は灰色狼なんですね。
ライカン茶々丸ちゃんですね。

「あ、ありがとうございますマイロード。…少し、その恥ずかしいですが、お気に召していただけたなら幸いです。…マイロードもとても可愛らしくていらっしゃいます」

ですよね、やっぱりこの魔女っ娘、可愛さ重視ですよね。
そもそもワタシ自身の見た目が、幼げな成長しきらない美“少女”
だから、魔女スタイルに装ったとしても、どうしたって魔女っ娘に
なっちゃうんですよね。

でもま、ほめられたし、問題なしです。

「ふふーふ、ありがとね。あとでもふもふさせてよ。あ、でもから
かわれるって？こんなに素敵な執事さん達なのに？」

かわいがられる、じゃなくでですか？
だってこんなにも素敵な執事さん達。
はぁー、抱き寄せてほしいです。

「なに、簡単なコトだ。こいつらにはもっと相応しい役があるだろ
う？」

キティがちらりと横目で促しますけれど…
うーん？
あ、もっと女の子っぽいのがいいってコト？
確かにワタシ以外、男装っぽいんですよね。
だから“抱き寄せて欲しい”なんて思ってしまいましたし。
てれり。

「だからなんで従者2人で被らなくちゃいけねぇんだよ。それにあ
んなのじゃ、どうやっても汀の隣には立てねぇだろうが！！」

いや、隣に立てないってよっぽどですよ？
えっと…へどろまじん？とか？

「わたしもマイロードに褒められるほうが…」

こんなにいい子な茶々丸ちゃんを、褒められないような格好？

あ、必要以外の露出！？

いやないですね、ちがうかー。

「んん？ふさわしくて、かぶってて、ほめられない？…なにそれ？」

いや、全然わかりません。

おてあげ汀。

「簡単だ、フランケンシュタインの怪物だ。こいつらは汀の造った人造人間なんだから…ん？汀は魔女であって人ではないし、こいつらもどう転んだトコロで人間ではないな。魔女製…侍従生物？」

あぁ！！

なるほどフランケンシュタインなら、確かにハロウィンぽいです！！

てか侍従生物って…

まぁあんな風に言ってはいますが、千雨ちゃんとキティががんばれば、かわいいフランケンシュタインの怪物だって出来そうですよね。

なにせワタシ達の衣装は、全部キティと千雨ちゃんの手作りなんです。

あと茶々丸ちゃんもお手伝いしたらしいですね。

この間の、寝こけて置いてきぼりになってしまった買い物は、この材料を買いに出ていたそうです。

うんでも、いまの執事さんスタイルすごくいいから、やっぱりコレで正解ですよ。
すごくワタシ好みです！！

「いや呼び方なんざどうでもいいだろ！！フランケンシュタインなんざお断りだ！！」

「侍従生物…わたしには褒め言葉です」

「そうか！？よく考えろよ絡繰！！」

そんな訳で今日はハロウィンです。
今日は年に1度の、チート美少女汀が魔女っぽい格好をする日です。

ふふーふ、キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも、そしてワタシだって、すごくすっごくよく似合ってますよね。

でも1番は…

「オイ魔女、チラチラ見テ笑イ堪エンノ止メロ。イッソ笑ヨ！」

ぷぷ…そうですチャチャゼロのが1番だと思うのです。

「ふふっ…あはははははっ！！チャチャゼロなにそれ！？ジャックオーランタンってやつ？むしろチャックオーランタン！？あははははははっ！！」

頭にカボチャランタンのかぶりモノしたチャチャゼロすごいかわいい！！
ランタンの口部分からチャチャゼロの顔が覗く、コミカルなかぶりモノがすごいかわいい！！
あはははははっ！！
似合ってる、似合ってすぎですチャチャゼロ！！
「テメェ笑イスギダロ！！」
あはっあははははっ！！
許可したのチャチャゼロでしょ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―いらっしゃいませ！只今お菓子のサービス中でーす！！―
―ランタン作りイベントやってまーす！―
―イタズラ避けに飴玉大安売りしてます！―

ハロウィンで盛り上がる麻帆良を歩きます。

あちらこちらにランタンやコウモリの飾り付け、そこかしこでコスプレして練り歩く人たち。
出店や露店、屋台に呼び込み、お菓子におもちゃ、こうして歩き回るだけで、目移りしちゃいます。

麻帆良はやっぱりイベント大好きですね。

「トリッ《べしっ！》「飴玉くれてやる、帰れ」

しかしまぁ、数メートル歩けば恒例のセリフと共に湧いて出る男達にはうんざりですよ。
既に一袋分以上の飴で、千雨ちゃん茶々丸ちゃんが迎撃してくれています。

「…いい加減鬱陶しいな。なんとかしたいが、監視が邪魔か」

ワタシ達がいろんな出店や屋台を覗いて歩けば、常に注目の的です。
お店側にもたくさんたくさんサービスしてもらっちゃってます。

チャックオーランタンを抱えて歩くワタシなんか特に、行く店行く店でお菓子もらってばかりです。

「はいマスター、市街地に入ってより、４人が尾行しています。今からなにがしか手を打てば、彼等が行動を起こすでしょう」
最近の連中は、血気盛んっぷりがすごいですからね。

かるーく認識阻害を敷いただけで、警告されかねないんですよ。
スプリングフィールド2代目のコトが、下っぱ連中にも通達されてきている影響でしょうね。

「汀なら連中に気付かれねぇで何か出来るんじゃないのか？」

家への干渉や襲撃も増えてますし。
軒並みシャットアウトー！ですけど。

「うんできるよー。やる？コレもイベントのうちかなって思ってたんだけどね」

まぁ今日はせっかくのハロウィン。
連中のコトはスルーして楽しみましょう！

「む…汀がいいなら構わないが、男どもは明らかにナンパ目的だろう？不快ではないのか？」

「ん？全然たのしーよ！千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが撃退してくれるの、何回見てもたのもしい。さすが執事さんだね！」

「「そっちか（ですか）…」」

えー？
だって何度見ても素敵な執事さんなんですもん。
その胸に抱き寄せられて、悪者から守ってもらう。

想像しただけで、うっとりです。
ふふーふ。

「…ふん、なるほどな。汀、チャチャゼロは千雨に渡せ、腕を組むぞ。ほら早くその菓子も食べてしまえ」

とか言いつつ、チャチャゼロを千雨ちゃんへぽいっとしてしまうキティ。

おやおや？
ワタシが千雨ちゃん茶々丸ちゃんにうっとりしているのが、お気に召さなかったんですね？

もー、キティかわいいなぁ！

「っと、チャチャゼロ、千雨ちゃんごめんねー。ふふーふ、ぎゅー、ねぇいいの？街中だよキティ？」

ぎゅー、っと身体ごとキティに抱きついて問いかけてみます。
キティは他人の前でイチャコラするのを避けますからね。
2人でデートのトキだって、手を恋人繋ぎするくらいです。

その分、家ではべったりです。
ふふーふ、キティらぶー。

「うるさい。あまり私を蔑ろにするなよ汀。いっそ拐って閉じ込めてしまおうか？」

キティは足を止めて、腕にくっついたワタシと眼を合わせました。
その格好にふさわしい、悠然とした眼差しは、それでも確かな愛を滲ませて訴えかけています。

「…うんいいよ、閉じ込めて。ワタシを縛って。壊れるくらい愛して。キティにならなにされてもいいんだ。でもお世話係りに2人はつかってあげてね」

あ、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが人目を遮ってくれていますね。
ジェラシーな眼を、ちらっと向けつつワタシのために滅私の行動さすがです。

あとで、ごほうびあげなきゃ。

「ふん、従者の心配とは余裕じゃないか。言ったな?覚悟しておけよ、今夜のお前は囚われた魔女だ。私に絡め取られた哀れな魔女だ。その身体に、心に、決して消えぬ痕を刻みつけてやる」

キティがワタシを抱きすくめます。
強い瞳。
ワタシの好きなキティの瞳…

「はい…ワタシの吸血鬼さま…」

ワタシは従順に瞼をおろしました。

……んちゅっ…ちゅむ…あむ…

ずっと閉じ込めていてください。
ずっと囚えていてください
強くされても、きつくされても、すこしも苦ではありません。

だって汀はキティを愛していますから。

だからどうか…
身勝手なのはわかっていますけれど。
それでもお願いしてしまうんです。

ワタシを縛り囚えるために、ワタシだけを見つめていて下さい。
どうか愛しいその瞳を、他には向けたりしないでいて下さい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

キティと腕を組み、千雨ちゃん茶々丸ちゃんを従えたまま散策を再開です。
そうしてしばらく歩くいていると、聞き覚えのある声に呼び止められました。

「おやおや目に毒だネ。そんな仲良しさん達、どうだ寄って行かないカ？超包子、本日はハロウィンサービス中ヨ」

おや。
超鈴音とは珍しいです。
“いまさら”なんのご用事でしょうか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なあ絡繰」

「はい千雨さん」

「私だってエヴァが正妻なのは当然理解も納得もしてる。汀がいつだって私達も見てくれているのも分かってる」

「はい」

「にしてもコレは…なあ?せっかくの魔女スタイル汀なのに」

「不敬を承知で申し上げれば…実に羨ましいです」

「おまっ!?…いや、その通りだ。コレはアレだよな?特別なおねだりだって許されると思わないか?」

「先程人目を遮ったトキ、マイロードと目が合いました。その視線の意味から、おねだりは確実に了承されると思います」

「よしっ!!…あ、今日はバラバラな。個人個人で頼む」

「はい、わたしもソレで」

「オ前ラ…飽キネェナァ…」

「「汀（マイロード）に愛されるコトが存在意義だからな（ですから）!!」」

第２３話　人造人間？ロボ？　その１＊（後書き）

第２３話更新でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいてありがとうございます。

一月遅れのハロウィン回。
そろそろ茶々丸捏造に入ります。
なんだか捏造祭りが始まりそうです…

時期遅れのハロウィンネタは、もとより茶々丸捏造に絡めるつもりでいました。
せっかくだし丸一月遅れでお送りします？
いや、続くんですけどね。

実は、お気に入り、評価ポイント、共にじわじわ増えてきています。
まだまだなｇｒａｎｄ病原ですが、これからもがんばります。

…いえ、昨日で連続更新が切れてしまったので、気合いを入れ直した訳です、はい。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２４話　人造人間？ロボ？　その２

ワタシ達が超鈴音と初めて接触したのは、今の中等部に入学する直前でした。
まだ3月、桜の頃です。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんの教育？も一段落。
ワタシとキティはお互いへのご褒美として、久しぶりのデートへと出掛けた先の出来事でした。

そうあれは思い出すだけでも、身も凍るような出来事でした。

ええ、だって本当に久しぶりだったんです、キティとのデート。
別荘を使った教育？で、実時間約半年。
ワタシは千雨ちゃんに、ついで茶々丸ちゃんにべったりでしたから。

や、とても大事な時間だったんですよ。
キティをないがしろにしたつもりはありません、ホントに。

キティは耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、ワタシを支え、新しい家族を受け入れてくれました。
それは聞くも涙、語るも涙の『愛と愛とのその狭間物語』だったのです！

具体的には…受け入れたうえで、しばらくの間イチャコラを減らしてがまんしつつも、自分だけが正妻でワタシと対等であるコトを実

力行使含みで教育し尽くしたのでした。

あれ？あんまり耐えてはいない…かな？

とにかく、そんな生活が一段落し、待ちに待ったデートの日だったんです。

あははうふふ、と市街地を仲睦まじく歩き、お店を冷やかす。
人目を避けて、ちゅーをして笑い合う。
普段は外でのイチャコラを控えがちなキティも、この日は咲き誇る笑顔で愛を囁いてくれていました。

桜爛漫、愛絢爛です。
チョコよりケーキより、ずっとずっと甘々な時間だったんです。

そこへ彼女がやってきました。
キティを名指しで、なんらかの交渉を持ちかけて来たのです。

ですからえぇもう、キティのイライラがすごくって…

冷気出てましたよ、冷気。
舞い散る桜の花びらがキティに近づくと、一瞬で凍りつき垂直落下ですもん。
足元でピンクダイヤモンドダストするさまは、冷気の強烈さを如実に表していました。

まさに、身も凍るって状況です。

でもでも、ワタシにはなーんにも影響ないものですから、なんともわかりやすいですよね。
ふふーふ、キティらぶー。

とまぁそんな出会いでは交渉なんか成り立つ訳ありません。
しかも彼女はキティとの交渉を望んでいたのです、キティだけとの。

いちおうワタシが交渉担当なんですけどね。
彼女はワタシに外して欲しそうでしたが、キティはワタシの手を離しませんでした。
もちろんワタシも。

当然ながらキティさん、ばっさり。
「黙れ」「殺すか」でしゅーりょー。
交渉以前の問題でしたとさ。

ワタシとしては、その後のデートに何にも影響がなかったので特になんとも思いませんでした。
彼女が去れば、すぐにキティも元通り。
笑顔爛漫、イチャコラ絢爛です。

まぁ結局、このチート美少女汀を虜にして止まない、愛しいキティとのしあわせな1日でした、と。
超鈴音との出会いを思い返していると、自動的にキティとのしあわせな1日が浮かんでついにやにやしちゃう訳ですね。

きゃーきゃー！

キティだーいすきです！
てれり。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これまで長かたヨ、ようやく交渉してくれると見ていいのかナ？」
超鈴音が話しかけてきますが、飲食店なんだしまずは注文でしょう。
「あ、ハロウィンセット４人分で頼む。汀はホットウーロンだよな？エヴァは？」
【汀、超鈴音製偵察機がブンブンしてる。録音に録画。ネットワーク機にスタンドアローン機に両方だな。どうしても交渉して言質が欲しいみたいだ】
千雨ちゃんは実に有能ですね。
注文も警戒もお任せです。
「ん、汀と同じで…いや、ふふっ、トマトジュース飲むべきか？」
【ふむ、なんだか私を指名してたんだったか？断ったんだろう？】
あ、いやさっきはつい、素敵すぎるキティにうかれてたんです、はい。
超鈴音のご指名が断固キティなのも理解できる素敵さだもん、しかたないのです…よ？

「あー…さっき飲んでくれたじゃん。けっこう寒いし、ホットにしなよ」

【うん、何度かね。だって「エヴァンジェリンさんと話したい」の一点張りなんだもん。しっとー！だから内容聞かず断ってたよ。まぁこうして店に誘われて応じるってなかったから、なんか勘違いしてるんじゃない？…と、魔法的な誓約契約の類いは展開出来なくしたから好きにしゃべっても平気。電子系は千雨ちゃん、頼りにしてるよ】

魔法はワタシが、機械は千雨ちゃんが、僅かにもワタシ達の不利になるようなモノはゆるしません。
てか、最近の超鈴音は麻帆良連中とは別の勢力として成り立ってるっぽいので要警戒です。

「ふ…もういいのか？吸血鬼はコレだって言い張ってたじゃないか」

うぅ…さっきの発言をいじられてしまいました。
えぇえぇ、日頃からキティに血を吸わせてるワタシが、はしゃいでトマトジュースとか…。

うぅ、はずかしいっ！！

【麻帆良の連中はどうしてる？】

警戒レベルを上げてますね。

そもそも麻帆良連中は王道な魔法使いが多いですから。
機械化電子化した魔法、精霊の類いは、専用の人員が担当しているようです。

つまりそれ以外の魔法使いは機械ダメさんばっかり、と。

だからこそ超鈴音はチェックされてるのでしょうか？
最近はなにやら不審さを嗅ぎ付けられたらしいです。

もしかして麻帆良連中が対ワタシ達へと警戒を強化し続けていたから、彼女が引っ掛かったんでしょうか？いやいやまさか。

「う…ごめんよー。ね？いっしょにあったかいウーロン茶飲もうよー」

もうおねがいですから、あほのこ発言は忘れてくださいー！
キティにすがりついてかわいくおねだりこうげきです！

ひっさつの、小悪魔うる目！

【付近で警戒中だね、遠見、遠聞、杖構えてるのもいるし。ハロウィンだからってやり放題だねぇ。あと、超包子に着いてから、警戒レベル上がったね。コレは超鈴音もチェックされてたのかな？】

てかホントにすごいですね。
いや、秘匿秘匿…。
しむらーうしろー、って感じ？違うか。

「イエス、マイロード！！超鈴音さんわたしはマイロードと同じウーロン茶でお願いします！！」

ありゃ？
茶々丸ちゃんが釣れました。

てへ、ありがとう茶々丸ちゃん。
じゃあいっしょのだね。

【戦闘準備完了、ロックオン。彼等が詠唱すると同時に、魔法発動体を破壊できます】

ワタシが魔法的に、千雨ちゃんが電子的に、それぞれ警戒をおく場面では、キティと茶々丸ちゃんが制圧担当です。
今回はキティが交渉の主軸っぽいので、茶々丸ちゃんにお任せです。

ふふーふ、茶々丸ちゃんの武器は色々すごいんですよ。
麻帆良連中では、瞬きすら赦されないでしょうね。

さすがですね、自慢の子です！

「私もだ！！汀のと同じ急須…でいいのか？とにかくそれで持って来てくれよ！！」

あ、やっぱり千雨ちゃんも釣れちゃった。
ふふーふ、かわいいなぁもう。

これで千雨ちゃんもいっしょ。
てへり、うれしいなぁ、らぶー。

【各ネットワークに侵入、領域確保。監視カメラ、超鈴音偵察機共に掌握した。周囲１００メートル圏内のその他記録装置も…随時掌握。スタンドアローン機も…よし掌握。戦闘オッケーだ】

ワタシが任せるだけあって千雨ちゃんの電子戦能力は、もういっそ呆れる程です。

ワタシでも現状じゃ勝てないですからね。

あ、ワタシ達はみんな科学分野もくわしいですよ。
ワタシはもちろん、キティもです。
これからも１０年、１００年、１０００年、それ以上にと、終わりなく生きるのに、新しく進化する技術を避けるなんてありえませんよ。

ワタシが千雨ちゃんにその方面で勝つには、魔女としての本気で対峙しないといけませんね。
つまり、まぁ間違いなく現代の技術で、千雨ちゃんに打ち勝てる相手はいません。

事実、この麻帆良で最高と謳われる超鈴音ですら、相手にもなりませんから。

「あ、こら、黙れ侍従生物どもっ！！汀は私に言ったんだ！！おい超鈴音！！私と汀、こいつら2人、そうやって別けて持ってこい！」

あは、もうキティってば。
ぎゅーだよ、ぎゅー。

【うむ。茶々丸、攻撃は探知不可能な武器を選択しろ、攻撃魔法の詠唱が始まったら即ヤれ。千雨は警戒続行、僅かにも痕跡を残すな。汀、超鈴音との交渉はやはり私か？】

キティ司令官クールです！
口調がね、ワタシよりキティのほうが指揮向きですよね。

かっこいいキティも見られますし。

てれり。

「……とりあえず、注文承たヨ。サービスするから、本当に後で頼むヨ」

【どうかな？多分だけど注文と一緒に通信装置持ってくるんじゃない？キティの分しかなかったら、足りないって言ってやりなよ。まぁ彼女もそこそこの存在みたいじゃない。話聞いてみよう】

さてはてどうなるんでしょうか。
超鈴音、今のところマイナススタートですよ？

彼女、ウチに向けて偵察機を散々飛ばしちゃってますからねぇ。
ばっちりシャットアウトしてますが。

なんにせよ、交渉スタートです。

あとハロウィンセットもです！！
だってすごく美味しそうですよ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【オイ、テメェラ、オレノ分ハ？】

【大丈夫です姉さん、わたしとご一緒しましょう】

【お、姉妹愛だね。うんうん、チャチャゼロはしっかり言い付け守ってるし、帰ったらご褒美だ】

【ヨッシャ！！魔女、コノ間ノワイン頼ムゼ！！】

【おけー。だからココからも人形のフリでおねがいね。バトルになったら指示出すけどそれまでは、ね】

【任セヤガレ！！】

第２４話　人造人間？ロボ？　その２（後書き）

第２４話でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいてありがとうございます。

超鈴音置いてけぼり回。

はい、茶々丸は汀一家製でした。
汀と千雨のチート能力も、そろそろ詳細が出てきそうですね。
これから無茶な能力が色々と出てきますが、寛容に受け止めてくださ
い、ホントに。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２５話　人造人間？ロボ？　その３

テーブルにならぶ４つの蒸し籠から、ほかほかと湯気が立ち上ぼります。
コウモリでアレンジされた、フタの持ち手がかわいいです。

ぱかっと開けば、色鮮やか。
ひとくちサイズの小籠包が、ハロウィンに装っています。

カボチャ型にオバケ型、ドクロ型に棺桶型まで！！

うわー！すごくかわいい！！
星や月の形にくり貫かれた野菜蒸しも一緒に入っていて、すっごく賑やか色とりどりです。

食べるのがもったいないくらいですよ！！

それぞれの小籠包はキチンと顔も描かれていて、蒸したてのぷりぷり感がコミカル。
ほかほかと、とっても美味しそうな匂いなのが、ニクイですね。

「ではお手を合わせてー」

でもごめんね、かわいい小籠包たち。
ワタシは魔女。
あなたたちをペロリといただいてしまいます。

チート美少女汀は美味しいものが、だいすきなんですもん。

こんなにかわいいんですから、きっと美味しいに決まってますよ。

「「「「いただきまーす！」」」」

あー…あふっ！？あちっ！熱いっ！？

あ、でもやっぱり美味しい。

うまうまー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

いや、実に結構なお手前でした。

ほんとにおいしかったー。

あーん…とか、おべんと付けて…とかイチャコラしながら食べました。

まんぞくまんぞくです。

一方の超鈴音は、ワタシ達にさりげなく通信機を渡すとそそくさ店舗の奥へ。

まぁワタシ達が食べ終わるまで、交渉なんか始まる訳がありませんが。

〔大変ご好評いただきなによりだヨ。…でも少しくらい遠慮して欲しいネ〕

おかわりもしちゃいましたよ。
いや、おはずかしい。
あ、2つ目はキティと半分こでしたからね？
「おいしかったねー」
いえホントにうそいつわりなく。
なにやら画策したりせずに、一流飲食店目指したらいいんじゃないでしょうか、彼女。
麻帆良においても、十分にやっていけそうですよ。
〜食事の間、待たせただけじゃない。この状況でエヴァにだけ通信機渡すだなんて…帰らなかっただけ譲歩したわよ〜
しかしまぁ余裕ありますよね、超鈴音。
なんでしょう、侮られてます？
それとも切り札でもあるんでしょうか。
「ああ、コレはたいしたもんだ。それにウーロンもたまには悪くないな。なぁ汀、今度ウチにも一式そろえるか？」
お、いいかもですね。
中華お菓子も期待できますか？
えと、飲茶でしたっけ？
【この期に及んでもエヴァとだけ交渉出来ると思うとは呆れるやら感心するやらだな。警戒続行、問題なし】

残念予想が当たってしまいましたよね。
腹いせに「全員分寄越せ」とだけ通信して、追加注文食べ終わるまで放置しました。

ふふーふ、とーぜんのむくいさ！

「千雨ちゃん茶々丸ちゃん、ウーロン茶もおいしく淹れられそう？」

ウチのティータイムは基本的に紅茶です。
キティが紅茶好きですからね。
千雨ちゃんがコーヒーたまに飲んでますけど。

なんか千雨ちゃんがコーヒー飲むのって、カッコイイんですよ。
なんだか思い出して、てれりこ。

〜確認するわ。通信機は貴女とワタシ達の５人が所持、常時オープン回線。麻帆良の魔法使いには探知出来ない科学的通信なのね？〜

ついでに録音でしょうね。
まぁ千雨ちゃんが警戒中です。

間違いなく痕跡すら残ってはいませんね。

【茶々丸ちゃん、念のため通信機に介入。通信はこの５機間のみに、ついでオープン回線専用で】

まぁ、一応の対策です。
超鈴音の情報が少ない現状、して困る警戒なんてありません。

{その通りネ。今日まで長かたヨ。こんなイベントでもないと、貴女方と長時間接触なんか出来ないからネ}

彼女もやはりチェックされてるんですね。

そんな彼女が平時に、ワタシ達へと接触したら…
やっぱり麻帆良連中は実力行使に出るでしょうか？

要警戒勢力が接触したようだ、とりあえず拘束して強制的に事情聴取しよう！！

とか、平気でやりそうですもんね。
うん、これまで避けて来たのは正解です。

今日は…まぁ彼女の話聞くって決めちゃいましたし。
鎮圧もやむなしー…かな？

いや、そもそもこの交渉に気付くコトが出来るのでしょうか、麻帆良連中は？なんか超鈴音が奥に下がってワタシ達が普段通りの歓談始めたら、連中の警戒レベルって言うか緊張感がゆるんだんですけど…

え？そんな程度で麻帆良大丈夫ですか？
いや、好都合ですけどね。

「淹れ方でしたら問題ありません。マイロード、マスター、いかがなさいますか？」

どうやらティータイムに選択肢が拡がりそうです。

…チャイナドレスとか着たら喜んでくれるかな？
あ、いや、中華からなんだか連想されまして、はい。

【イエス、マイロード。……把握、介入完了しました。以後この通信機では強制的に、該当の5機間でのみ通信可能、さらにオープン回線専用となります】

うんうん、すばらしい手際ですね。
今日は茶々丸ちゃんも千雨ちゃんも特にカッコイイなぁ。

耳尻尾執事さんぱわーでしょうか？
ふふーふ、らぶー。

「そうだな、悪くないな。麻帆良なら良い葉も手に入るだろうしな」

ですね、拒否する理由がありませんよね。
今度、一揃え買いに行きましょうね。

よし、デートです！
ふふーふ、たのしみー。

【よし、ならば交渉開始だ。私が主導で進めるぞ】

〝いいだろう。改めて私がエヴァンジェリン・マクダウェルだ〟

そうですね、ずっとそれを求めていたようですし。
うん、キティにおねがいしましょうか。

〝ではこちらも自己紹介するヨ。超鈴音ネ。あなたとは…あなた方とは、ずっと交渉したいと思てたヨ〟

もれてます、本音もれてますよ。
なんでそこまでこだわるんでしょう？

「期待してるねー。あ、折角だしあまいのもいっしょにおねがいできる？桃饅頭とか胡麻団子とか」

あ、でも飲茶ってあまくないの食べるんでしたっけ？
おやつの時間に食べるんですよね？
ならやっぱりあまいのがいいですよ、うんうん。

〜トバリよ、魔女トバリ〜

交渉目的なんですし、まぁこの対応でしょう。気をつけて下さいね、魔女は怖いですよ？

【千雨ちゃん茶々丸ちゃんも一応自己紹介ね。対応はてきとーでいいよ。間違っても対等ではないから】

あえて全員分の通信機を用意させたんですから、自己紹介くらいは、ですよね。

とはいえ普通なら、ワタシから軽く紹介するくらいなんですけれどね。
なにせ従者ですし。

ただ今回の交渉はサウンドオンリーですから、声くらいは聞かせておきましょうか。

「あー…レシピはともかくなぁ。…絡繰は？」

千雨ちゃんは努力の子ですからね。
すぐになんでも出来る訳ではないんです。

必死に努力してくれるんです、ワタシのために。
そんな千雨ちゃんが、だいすきだよ。
らぶー。

〔魔女の従者、千雨だ〕

【あぁわかった、普通でやるぜ】

うんうん気楽に対応しちゃってください。
下手は打たないって、信じてますよ。

「お任せください。ですがレシピがあるのなら、千雨さんでしたら簡単では？」

茶々丸ちゃんは炊事掃除なんでも従者ですもんね。
中華お菓子も余裕ですか、さすがです。

製作時に、これでもかこれでもか！と詰め込んだ成果でしょう。
ですが、茶々丸ちゃんのがんばりがあってこその現在なのは、決して忘れてはいけないコトです。

茶々丸ちゃん自身のがんばりがあって始めて、その知識技術を使いこなせる訳ですからね。

いつもありがとうね、茶々丸ちゃん。
だいすきだよ、らぶー。

〖エヴァンジェリン様の従者、茶々丸です〗

【イエス、マイロード】

茶々丸ちゃんはナチュラル丁寧さん。
こちらも心配ありません。

「いやほら汀達に出すなら、何度か作って出来をみないとな。半端なもんなんかは出したくないんだ」

ね？千雨ちゃんはいつもこうして、ワタシのために一生懸命なんです。
ふふーふ、ホントらぶー。

【そう言やこの交渉の記録、私達の手元に残す必要はあるか？】

あ、指示してませんでしたね。

まぁ普段から交渉事に記録は取らないワタシです。
今回のも、もちろんいらないでしょう。

「ふふーふ、ありがとうね。期待してるから」

とっても期待です。
いまからたのしみですねー。

【ないない、完全消去でおねがい。茶々丸ちゃんも通信機への介入、知られないようにね】

うん、念のため茶々丸ちゃんにも指示を出しておきましょう。
茶々丸ちゃんなら、言わずとも察してくれているとは思いますけどね。

「あぁ、まぁ任せてくれよ」

【ん、任せてくれ】

「イエス、マイロード」

【イエス、マイロード。交渉終了と同時に、通信機を元通りへ再介入いたします】

うんうん、さすがの素敵執事さん達です。
猫耳、狼耳をもふもふしたいぞー。

{皆さんよろしく頼むネ。では始めに、こちらの要求を説明するヨ}

では交渉の始まりです。
お手並み拝見といきましょうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ふふーふ、超鈴音が店舗の奥に引っ込んでいるコトが確認出来ている今！！
ワタシを阻むモノはありません！！

キティ、ぎゅー！！

隣に座るキティを抱きしめます。

ふふーふ、普通の交渉は相手側と対面しますから、こんなコト出来ません。

でも今はぎゅー、し放題です！！

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんとも、順番にぎゅー、しちゃいますよ。

らぶー。

今度から交渉事はサウンドオンリーでお願いしましょうか…

第２５話　人造人間？ロボ？　その３（後書き）

第２５話でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

トリプル会話めんどくさい回。
いや、ごめんなさい、なんかこんな風に。

【】が念話です。
もちろん汀達にしか聞こえませんし、察知も出来ないチート魔女魔法ですね。
今後も汀達の念話がバレたり阻害されたりはあり得ません。
だってチート魔女ですから。

〆が超りんの通信機会話です。
未来科学でしょうが、チート従者には瞬き程で乗っ取られてしまいました。
しかも超りん気付けない…ごめんね。
後で記録出来ていないコトに気付いて、そこから警戒を強めるでしょうが…まぁ無駄でしょう。

今回大活躍の千雨、茶々丸チート技能は、もちろん汀が原因です。
何度か描写された“魂の繋がり”が関係しています。
設定は出来ているんですが…原作入って、淫獣絡みの仮契約事件が出てきたあたりで、詳しくやりたいなぁと思っています。
当然エヴァにもありますよ。

今夜も感想とご意見、いただけました。
ありがとうございます！！
超りんごめんね展開は、まだまだ続いちゃいます。
彼女って、正義魔王タイプですよね。
辛い過去があった、だからこそ私が世界を支配して、平和にしてやる！！みたいな。
でもごめん、本作品にはもっとヤバイ魔女がいるんです。
進化する魔女一家がいるんです。
もう超包子経営で生きたら？いやいや。

原作入ってからは、悩みドコロですね。
でも１つ決まってます。
鴨は駄目。
コレは決まってます、ええ。
正直ｇｒａｎｄ病原は葱さんのチカン行為もギリギリです。
最近の原作で、エヴァも千雨ちゃんも脱がされちゃってましたね…
あれ？許せないかも、葱さんも駄目かも。
まずいですよ…

てか、ｇｒａｎｄ病原も分かっています。
漫画だとちゃんと分かっています。
でも鴨は完全にただの犯罪ですよ。
下着泥棒とか何で許せるの？
ｇｒａｎｄ病原には無理です。
このままのテンションで書いたらあっさり消えそうです、鴨。
どうしよう…

で、ではｇｒａｎｄ病原でした

おやすみなさい

第２６話　人造人間？ロボ？　その４＊

〝こちらの要求は実に簡単な話ネ。面倒なんてかけないヨ、むしろ逆をお願いするくらいネ〟

〝要求、要求か…。おい貴様、随分なご身分なんだな？私達に対峙して、まず自分の要求を突きつけるか。何様だ、えぇ？〟

〝あ、いやいや申し訳ないネ。かの有名なお二人と交渉だなんて、緊張して気が逸ってしまったヨ。不老不死の大魔法使い殿、不朽不滅の魔女殿、聞いていたよりずっと格上ネ〟

〝つまらん〟

〝……〟

〝……〟

〝……えっと？エヴァンジェリン殿？〟

さて、ワンアウトですか？
あ、いえ冗談です。

この間の魔法世界でドラゴン狩ったトキ、色々と情報収集もしていました。
それにより、と言うより彼女は随分方々へその手を拡げているようでして。

超鈴音がワタシ達を探っていたコトは以前から把握しています。

うん、どうやら彼女は情報を上手く得すぎたために、勘違いをしたようですよ。

あ、当然ワタシ達が魔女と吸血鬼だなんて知られずに、情報収集等を行っています。

魔女の面目躍如です。

チート美少女汀の胸の内を知れるのは、大切な大切な家族のみんなだけです。

世界的に見れば“正義に破れた惨めな魔女”ですが……だからなに？

今現在に至っても、近衛学園長とサウザントマスターしか真実を知りません。

でもそれでいいんですよ。

魔法使い達にとって、それが相応しい有り方ですよ。

自由な理想を描けばいい。

綺麗な伝記を騙ればいい。

だって仮に知ったとして――

何が出来るのですか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

〜つまらんと言ったんだ。それで世辞のつもりか？ここ1、2年私達をかぎ回った割りには程度が低いな。……なにか勘違いでもしているのか？乞うている自覚はあるのか？私の機嫌を取りたければ跪け、額を没っしろ、くだらん用件なら返事はその首にくれてやる〜

どうやら超鈴音は、ワタシ達が麻帆良に来る以前に取引をしていた相手を調査したようでした。
それに伴い、ワタシ達の行動原理、人となりを知ろうとしたようです。

ワタシ達、人じゃないですけど。

〜…これは手厳しいネ、謝罪するヨ。言い訳ではないが、貴女方はくだらない前振りを嫌う、まず要求を述べ乞え…と聞いていたネ。だから単刀直入にしたつもりだったが、機嫌を損ねてしまったのなら申し訳ないネ〜

まんまかつての取引相手に厳命していたコトですね。
そう、かつて“ワタシ達が選んだ”取引相手に厳命していたコトです。

超鈴音、勘違いしたままどこまで行く気ですか？

〜わからんヤツだな、その薄笑いを辞めろと言ったんだ。通信越しにも貴様の面の皮が癪に触る……いや、いい、用件を言え。貴様に

時間を割くつもりはない〕

ワタシが用件を聞くと決めたせいで、キティを付き合わせるカタチになっちゃいましたね。
ごめんねキティ、後でいっぱいいっぱいお詫びするからね。

だってすごく嫌そうですもん。
もう超鈴音の態度とか、わざとらしい片言とかスルーで行くみたいです。

しかし彼女は、ワタシ達が生きた時間を、ハリボテだったとでも思ってるんでしょうか？
その程度のつまらない嘘が、気付けないとでも？

でもまぁ今回はとりあえず進めましょう。
だって小籠包美味しかったし…

〔……相互不可侵協定を求めるヨ。期間は来年末までネ。見返りの準備もあるが…その情報自体が既に価値あるものネ、今は言えないヨ。けど、それは貴女方が求め欲するものだヨ。我が身命に誓ってネ〕

ふーむ、なんかあったでしょうか欲しいものとか。

……新しい枕？

あ、いや、もしかして封印関係ですかね？
んー…この勿体ぶった言い方はありそうです。

確かにソレならワタシ達には必殺の手札でしょうね。
まぁ世間的にはですが。

つまり、麻帆良大結界がワタシ達を個体指定しているから～…ってコトでしょう。
科学分野とのハイブリッド結界だから、麻帆良最強頭脳な自分なら緩和、あわよくば解放できる…とか言うつもりですかね？

いや、当然と言うか、いまさらと言うか…
大結界の個体指定すらワタシ達には無効ですよ、もちろん。

それに…うーん、やっぱり違いますよね？

いくら封印解除を行うのが被封印者以外なら比較的楽であるとは言え、彼女だってサウザントマスターや近衛学園長の実力を知らない訳ではないでしょうし。

仮に解除出来る人物だとして、それを秘密裏に行うのは無理でしょう。
そしてその所業が世に知れたら、一躍時の人ですよね。

“魔女と吸血鬼を世に放った大テロリスト”扱いされるのは明らかです。

それともアレですか？
封印下で魔力が全くない、とされているワタシ達を、封印解除ｏｒ緩和をエサに操るつもりでしょうか？

おぉ、悪党ですね。

でもコノ予想が彼女の不遜な態度とかと合致しますね。

彼女の言う期限は、彼女自身が何かを成すためではなく、ワタシ達をあの手この手で飼い慣らすための時間。
そしてゆくゆくは従わせるつもり…とか？

確かに、１５年も大人しく捕まっていれば、そんな風に考えるアホが出て来てもおかしくはありませんね。

それともやっぱり…超包子くれるとか？
あ、ちょっとうれしいかもです。
でも店舗経営はなぁ…

じゃあじゃあ“超包子食べ放題券えたーなる”とか！！
…でもお金には困ってないんですよね。

{……}

彼女の言い分はまぁ、色々と考えられておもしろいです。
食後のウーロンタイムによい娯楽です。

交渉材料としては最低、いやそれ以前に成り立っていませんが。

キティは…呆れちゃってますね。
ま、当然でしょう、千雨ちゃん茶々丸ちゃんも苦笑いですよ。

{皆さんだけで相談するカ？次にいつ接触出来るか分からないから

出来たらこの場で決めて欲しいヨ。あぁ、今言った対価はエヴァンジェリン殿とトバリ殿の分ネ。従者のお二人には、別口で可能な限り用意するつもりヨ〜

ん？ふふーふ、ほらほらぎゅー。
キティ抑えて抑えて。
あんな女の言うコトなんて気にしないの。

彼女がワタシの名前を読んだ瞬間、キティがとても嫌そうにしてくれました。
キティらぶー。
いいんですよ、彼女は滑稽な勘違いさんなんですから。

〜…ふぅ、時間など必要ない。決裂だ。何を焦っているのか知らんが、貴様のそれは交渉とは呼べんぞ。もはや呆れも過ぎた。詳しく聞く気にもならん〜

と、もう行きますか？
折角色々とがまんしたんだし、彼女の目的くらい聞き出すつもりなのかと思いましたが。

キティってば本当に、ワタシのわがままを聞いてくれていただけなんですね。
ありがとキティ、だいすきー！

でもまぁこの結末は仕方ないコトなんですよね。
現状の力関係を、彼女は正しく把握出来ないのですし。

あれです、自分が対等以上の立場にいると思っているんでしょう。

１５年も囚われたままの魔女相手なら“警戒こそすれど結局その程度”とでも思っているんでしょう。

だめだなぁ、だめですそんなんじゃ。
そのままならどうやったって魔女の気は引けませんよ。

ふふーふ、こんな噛み合わない交渉もないですよね。
まぁ教えてやるつもりなんて皆無ですから、やっぱり仕方ないコトなんです。

さようなら、超鈴音。
最初からあなたとなんか取引する気はなかったんですよ。

だって、麻帆良にいる間はのんびりするって決めたんですもん。
ただそれだけが、拒絶の理由です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なあ汀、食べ物はそろそろいいだろ?次はアトラクション系の出し物見てまわろうぜ」

「あ、そんなのあるんだ?」

「ハロウィン射的とかハロウィン型ぬきとか、祭りと混同したのが乱立してる区画があるんだ」

「その区画では、ハロウィンコスプレの参加者にサービスをしているようです。更にサークル単位で製作されたハロウィン逆バンジージャンプ、ハロウィン手作りコースター、部室棟利用ハロウィン巨大肝試しなど、麻帆良らしいアトラクションも存在していますね」

「私らが参加して楽しめるのは、どうしたって限られてるだろうけどな。まぁとりあえず行ってみようぜ」

「うん、じゃあさ、手を引いてよ、ワタシの黒猫さん」

「いいのか？エヴァのご機嫌取りは？」

「ふふーふ、左手を開けておくのさ。……ぐらいじゃ足りないね、うん。ごめん千雨ちゃん、また後でエスコートしてくれる？」

「まぁそうなるわな。今の聞いてたし、仕方ないから譲ってやるよ」

「マスターをお願いします、マイロード」

「うんうん、実に出来た従者だね！」

「……、後でたっぷりごほうびくれよな」

「わ、わたしにもお願いします…」

「ふふーふ、もちろんだよ。うん、じゃあ今、少しだけ先に…ね？」

「あっ…んっ…ちゅう…」

「マイロー…んっ…むちゅ…」

「おい！！今更認識阻害敷いて何してるんだ！！それなら最初から敷け！！くだらん奴の相手なんかさせるなよ！！」

第２６話　人造人間？ロボ？　その４＊（後書き）

第２６話でした。
こんにちは、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

結局噛み合わない超りん回。
では超鈴音サイドのフォローしますね。

本作品の超鈴音は原作に登場した超鈴音と同じ経緯で過去に来ています。
ですので彼女の知識に汀と茶々丸は存在せず、エヴァと千雨の現状に正直うろたえました。

超鈴音がエヴァに固執したのは、調査で浮かび上がった魔女の異常性を恐れただけでなく、パラレルワールドの可能性を否定したかったからです。
まぁその調査でも、汀達の真の現状には辿り着かなかったんですけどね。
結局、超鈴音も未来の英雄ネギの、ひいてはサウザントマスターの威光から脱け出せない存在です。
「ネギの父が封印した」と聞けば、調べはすれこそ疑いはしないのでした、と。

原作の超鈴音の飄々とした雰囲気は、本作品のエヴァには逆効果です。
原作では「私相手におもしろいヤツだ」くらいに思われたかもしれ

ませんが、本作品では「なんだこの勘違い女は」ですよね。
実際勘違い女な訳ですし。

汀が色々と予想した超鈴音の取引材料は、やっぱり「麻帆良大結界と機械の関連性、及びそれへの対処」です。
原作茶々丸が出来たコトですし、超鈴音には余裕でしょう。
超鈴音は汀一家のチートをもちろん知りませんし、１５年間も大停電をスルーしてるんだから科学分野には精通していないだろう、と認識しています。
ですから、封印を緩和するつもりでいても、解除する気はありません。
いずれ超鈴音の計画が成ったあと、障害でしかないでしょうから。
まぁ汀一家には千雨茶々丸がいますから、「従者をプレゼントする」なんて言えないですよ。

てか茶々丸捏造の予定だったんですけど…
ち、超りんがんばってよ！？

ではｇｒａｎｄ病原でした
またのちほど…？

第27話　人造人間？ロボ？　その5

……っちゅ…あむ…ずじゅ…ちゅる…

「…ごめんねキティ、ね？」

「あーあーいいよなエヴァは」

「マスター、独り占めは…その…」

「五月蝿いぞ！！私が嫌々対応をしてれば、すぐ横で汀に甘えおって！！普段なら許してやってるだろうが！！こんなトキこそ従者らしくしてみせろ！！」

「まあまあキティ、ね？彼女の話を聞いてみたのはワタシが決めたからでしょ？怒るならワタシにね」

「……汀も汀だ。私を蔑ろにするなと、さっき言ったばかりだろう。私を見ていろ。お前の望みならなんでも叶えてやる。今だってそうだったろう？な、だから私を蔑ろにするなよ汀」

「うん、ごめんなさい、キティ。キティと同じで彼女の話、途中で飽きちゃったんだ。だからキティの邪魔しないようにしてたつもりだったけど…ごめんね、寂しい思いさせちゃって。お詫びじゃないけど、これからいっぱいいっぱい楽しもうね。一緒にね」

「…ああ。私は駄目だな、汀にはこうも甘い。だがそれはお前が、お前だけが私の特別だからだ。それを確り意識しろ、さあ次に行く

ぞ」

「ちぇっ…私がエスコート役だったのによ。まぁ仕方ないか、相手があれじゃぁな。まぁでもごほうびは忘れんなよ汀」

「超鈴音さんはわたし達を正しく認識出来ていませんから。魔法関連の交渉ともなれば、まともな成立はありえませんよ。……マイロード、あの、わたしも、です」

茶々丸ちゃんの言うようにワタシ達を正しく認識出来てない相手、近衛学園長以外では交渉の成立など不可能でしょう。
もちろん魔法関連においてですよ。

でも近衛学園長やサウザントマスターなら、ワタシ達に交渉など無謀だと、その身に染みているでしょう。

チート美少女汀が相手なんですよ？
どうしてもと言うのなら、ワタシ達“が”持ち掛けるのを待っているのが正解でしょう。

だって、欲しいければ奪ってしまえるワタシ達です。
だって、欲しいければ造ってしまえるワタシ達です。

ワタシ達は誰かに何かを求める必要、ないんですもん。

まぁ運が良ければ、暇になったり、何気無く気が向いたワタシ達から声が掛かります。
ワタシ達にとっては、交渉だなんてそんな感じなんですよね。

「ナア結界敷イタンナラ、オレニモ何カ食ワセロヨ」

おっと、チャチャゼロにも何かあげなくちゃ。
って、次からアトラクション系攻めるんでした。

ありゃ、ごめんね、チャチャゼロ。
また屋台のお菓子でいいですか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あの後、通信機越しに聞こえる超鈴音の呼び声をスルーし、ワタシ達はあっさりその場を去りました。

認識阻害により“交渉を打ち切ったキティをたしなめていたワタシ達”が急に席を立ったように感じた超鈴音は、相当焦ったみたいです。
でも結局、麻帆良連中の目を気にしてか、追っては来ませんでした。

結果的に麻帆良連中が役立ちましたね。
いや、珍しい。
ハロウィンだからかな？

そうしてワタシ達は、いろんなアトラクションを満喫し、はしゃぎまわったのでした。

ふふーふ、たのしかった。

――とはいきませんよね、はい。

結局認識阻害を敷いたコトにより、チャチャゼロの不満がぶーぶー。
交渉？のストレスにより、キティがぶーぶー。
ワタシがキティのご機嫌を取り始めたコトにより、千雨ちゃん茶々丸ちゃんが弱じぇらしー。

おのれ超鈴音っ！！

では済まされず、別のお茶屋さんでワタシは弁明をするコトとなったのでした。

なんだよー、ワタシだってたまには間違うんだよー。

あ、はい、ごめんなさいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「オレハ好キニ飲ミ食イ出来テルカラ、モウイイゼ。ア、デモ魔女、アトデワインハ寄越セヨ、ケケケ」

認識阻害ばっちり敷いて、チャチャゼロは好き勝手に食べ放題しています。
チャチャゼロめぇ、足下見るなんてひどいですよぅ。

「だが私には説明してらおうか。汀、なぜちょっと美味い料理程度で奴の話を聞いた？」

う…
キティからは逃げられない。
うん、汀はキティから逃げられはしませんよね。

白状しますよぅ。

「えーとね、前にちらっと、こう、ありまして。なんだか不審だったからさぁ…ね？」

ね？

「いやいや、わかんねぇって。つーか、確かに汀らしくなかったよな。ほんと何かあんのか？」

千雨ちゃんまで！？
千雨ちゃんだって関係してるのにぃ…

「ふむ、…茶々丸も気になるだろう？敬愛するお前のロードが悩んでるようだぞ？」

え？あ、キティってば包囲網作戦！？
ずるーい、ずるいよキティ。

「…マイロード、わたしではお力になれませんか？」

…うぅ。

いやね、力になるとかならないとかじゃないからね、茶々丸ちゃん。

「オイ千雨、ハロウィン春巻キ追加シテクレヨ」

…むしろ清々しいですね、チャチャゼロ。

聞く気ゼロなんですね。

それもそれでなぜか不満。

「チャチャゼロ、黙って食べていろ。千雨、適当に暫く黙らせられるくらい頼んでやれ。飲み物もだ、汀が喋りやすいようにな」

「ああ、わかった。…いや、つかなんで私に命令すんだよ、私は汀の従者だっての！……すいません、追加ぁー」

「マイロード。ゆっくりでいいですから1つずつ、わたしを頼ってくださいね」

やっぱり白状するしかないんですね…

えーん、包囲網完成間近だよー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「超鈴音の技術をパクったから…かな？」

はい、白状させられました。

「…ん？それだけか？」

はいまぁ、そうです…

いやそんな“隠すコトか？”みたいな顔しないでよキティー。

いや実際隠してなんかはいないんですけどね。

なんとなく言いそびれた？みたいな？

「うん、前にね。えと、千雨ちゃん、覚えてる？まだ千雨ちゃんが別荘にいた頃のコトなんだけど…」

あ、千雨ちゃんが急に振られて少しびっくりしてます。

いやいや、このコトは千雨ちゃんとっても関係していますよ？

「は？え？……って、アレ…か？」

はい、アレです。

いやまぁ結局は別物ですから誰も気付かないでしょうけど、アレです。

「アレだのコレだの、分からんわ！！キチンと説明しないか！！」

「申し訳ありませんマイロード、千雨さん。もう少し分かりやすくお願いします」

うぅ…はい、ちゃんとします。

「あのね、当時千雨ちゃんの修行や教育は一先ずの区切りだったの。ほらキティとも2人きりになったりとかしてた頃ね。千雨ちゃんに自由時間を与えて、好きにネットやらせていたの。ね？」

ごめんなさい、千雨ちゃん。
一緒に白状してください。

いまワタシを助けられるのは千雨ちゃんだけなんです！

「え？あぁそうだっけか。まぁそんな感じだったかな？だいぶ前だしあんまり覚えてねぇんだよな…」

って、千雨ちゃん忘れてる！？
…あ、千雨ちゃんにもその後のコト詳しく言ってなかったかも、です。
あっちゃぁ…

「あ、言うよ、言うからキティ睨まないでー。うん、でね、千雨ちゃんがネットで色んなコト試してるウチに、次第にハッキングとかクラッキングを覚えたの。ね？」

千雨ちゃんのハッカースキルは当時から既にワタシのサポートが出来るくらいの、先程もやってみせた各ネットワークへの侵入が出来るくらいのモノへ登り詰め始めていました。
今と比べれば当然それはまだまだでしたが、確実に才能があると見たワタシは暇を見ては好きにやらせていたのでした。

ほめてあげたら、いっぱい照れて、そしてもっともっとがんばる千雨ちゃんに、きゅんきゅんしちゃいましたよ。

思い出しても、らぶー。

「あぁそう、そうだ。で、とりあえず学園結界関連は避けて、でもセキュリティ高いトコに仕掛けてたんだよな。そうしたら超鈴音と葉加瀬が所属してた、ロボット研究会のデータに行き合ったんだ」

いつの間にやら千雨ちゃんは、麻帆良最高の科学組織を相手にハッキングを成功させていたんです。
うん、さすがですよ千雨ちゃん。

「まぁ色々見さしてもらってたらさ、メールかなんかだったかな？で、そいつらが高性能人工知能を作ってるってわかったんだ。だからまぁ、それコピーしてちょろまかしてみた」

話を聞いたワタシが「へー、面白いじゃん。後で見せてよ千雨ちゃん」とか言ったら、千雨ちゃんてば相手方に一切悟られずコピーしていました。
さすがにちょっとびっくりしましたよ。

でもでもワタシをよろこばせるための行動なんですよ、コレ。
ふふーふ、やっぱり千雨ちゃんらぶー。

「つまりそれが超鈴音の技術だった訳か。だがそれがなんだ？盗み見したから後ろめたい、なんて言わないだろう？」

はいそうですよね。
それくらいなら、全然放置でした。

「なるほど、そのコトでしたか。当のわたしが気にしてはいないのに、マイロードは気になさっていたんですね」

あ、逆に茶々丸ちゃんが気を使いはじめちゃいました。
いやまぁだってさ、茶々丸ちゃんが茶々丸ちゃんでホントにうれしいんですもん。

「うん茶々丸ちゃん、わかったみたいだね。それは茶々丸ちゃんが産まれる1週間前の出来事だったの。茶々丸ちゃんの身体はすっかり出来上がってて、核部分にどんな機能をつけるのか考えていた、その頃なの」

だから超鈴音の話を聞く気になりました。
まぁ機会があったら聞こう…程度ではありましたが。

「ってコトは茶々丸の頭には、あのトキ私がハックした超鈴音の人工知能が入ってるってのか？」

あ、やっぱり千雨ちゃんにもその後のコトは話してなかったようです。
あちゃー、いや秘密になんかは全然してなかったんですけどね。

「ううん、実を言えば違うの。超鈴音の人工知能にはヒントをもらっただけ。茶々丸ちゃんは“魔法金属を核として産まれた従者”だからね。パソコンで組む人工知能なんかでは、ここにいる茶々丸ちゃんは産まれないよ」

茶々丸ちゃんが自身を被造物と言うのは、その存在の核が魔法金属だからです。
ワタシとしては魔法金属を“産み出した”つもりだから、モノ扱いはしていないんですけどね。

それに茶々丸ちゃんのコトが大好きですし！

「だって超鈴音のは所詮ただのプログラムだからね。どうしたってそれ以上にはならないよ。ワタシはその“思考し学習するデータ”そのものにヒントをもらって、それを解析分析したの。それで得た知識で、ワタシ自身が新たな魔法を構築して組み上げた訳。で、それにより“思考し学習し成長する魔法金属”をゼロから造るコトに成功したんだよ。つまり、うん、その魔法金属が茶々丸ちゃんの核…なの。あ、茶々丸ちゃんはこのコト知ってるよ？」

まぁ、実際インスピレーションを受けたってくらいの影響でした。でもそれが切っ掛けだったのです。

あの人工知能のデータを見なければ、茶々丸ちゃんはたぶん今みたいにな存在にはならなかったと思うんですよ。

それに触発を受けて、全力で核を造り上げたからこそ、今の茶々丸ちゃんが産まれたんだと思うんです。

ワタシは茶々丸ちゃんを愛しています。
だから何度でも想うんです。

産まれて来てくれてありがとう。
茶々丸ちゃんでいてくれてありがとう。

すごくすごく愛しています。

だからまぁ…ちょっとくらい超鈴音にチャンスをあげました。
でも無駄だったみたいですけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「普通ノ魔法人形デ何ガ悪インダ？」

「え？うーん、特には。実際あのままなら気合い入れて造った“普通の魔法人形”になってたしね」

「それだとやっぱ今とはちがうのか？」

「たぶんだけど、ワタシと魂での契約、出来なかったんじゃないかな。アレってワタシの魔法の中でもかなり特殊な部類だから」

「……超鈴音さんに感謝します」

「ふふーふ、それよりハックした千雨ちゃんに感謝しなきゃ。ワタシなんか茶々丸ちゃんの核が出来たトキ、それはそれは千雨ちゃんにありがとうしたんだよ」

「……死ぬかと思ったけどな。気持ち良すぎて死にかけるって、どんな経験だよ」

「あぁアレか。だが千雨は一晩程度だろう？アレの本領は、延々と

そのギリギリ状態を続けるコトなんだ。1週間とか続けられてみろ、もう色々終わるぞ」

「ふふーふ、ご希望ならやるよ？あ、でも当時のキティで1週間だったからね。今ならもっといけるんじゃない？」

「……とんでもない未来が待っているのに、身体も感情も拒否したがらない。あぁ、私も大抵狂っているんだな。もちろん汀への愛にだが」

「わ、私だってやれるぞ！あ、愛ならその、私だって十分なんだよ！！」

「……」

「ありがとう、キティ、千雨ちゃん。って、茶々丸ちゃんオバーヒートしてるし。ははーん、前にやったの思い出しちゃったんだね？」

「オイ魔女、食イ終ワッタゼ。」

「あ、終わりでいいの？じゃあ茶々丸ちゃん起こして、アトラクションのほう見に行こうか」

「ああ、わかった。おい絡繰？おーおー真っ赤だな」

「いつまでたっても馴れん奴だな。おい！茶々丸、起きないか！」

「茶々丸ちゃんやーい？」

「マ、マイロード！！こ、今度こそ最後まで耐えてみせます！！あぁあ愛でっ！！」

「「「うわっ！！びっくりした」」」

第２７話　人造人間？ロボ？　その５（後書き）

第２７話でした。
こんばんは、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

やっと茶々丸捏造回。

ながいぞー。
下手したら2回分くらいあります。
なぜか纏まらなかった…

今回は汀の無茶チートの片鱗が見えた？
作品中で茶々丸の核を産み出したの力を“魔法”と表記されていますが、コレ実は所謂普通の魔法とは少し違います。
千雨茶々丸のチートと同じく“魂の契約”で得た能力です。
ですが“魂の契約”事態は汀の魔法なので、汀自身はそれに派生して産まれた能力も“魔法”と呼んでいます。
もちろん設定できてますよ。
まさしく孤高の超絶安心チートです。
お目見えすれば“魔法”呼びに納得いただけます、きっと。

超鈴音のＡＩをパクって物質化出来たのも、一重にチートのおかげおかげ。
チート設定にしてホントよかったです。

今回も感想いただけました。

ありがとうございます！！
どこまでいっても汀は汀ですからね。
相手を諭す、納得させる、正しいを教える、そんなコトはまぁありえません。
超鈴音にも麻帆良連中にもずっとそんな感じです。
今回さらっと消えた超鈴音は、コレで終わりにはしません。
汀達に一矢報いるコトは…うんゴメン無理でしょうけど、まだ出番はあります。
麻帆良連中と違って、明らかな敵対姿勢を取れますから彼女なら。
ほら葱さんとかをね、唆したり焚き付けたりね…

てか寝落ちしました。
後書き書きながら、寝ました。
電気つけっぱなしだし…
気が付いたら3時だし…

いや明日仕事ですって…とか言いつつ仕上げてから寝ます。
お待ちいただいていたら、ホントにごめんなさい。

ではｇｒａｎｄ病原でした
朝おきれるのかな…

第２８話　宅配便は届かない　その１

「あ、やべぇ、忘れてた」

おだやかな小春日和の、とある午後。
学園からの帰り道です。

日頃からのんびりと通学しているワタシ達ですが、いや、麻帆良って広すぎ。
学園まで徒歩１時間以上ですよ？

いつもキティと並んで、常に千雨ちゃん茶々丸ちゃんが一緒で、ワタシは１人で学園に通ったコトはありません。
もしそうでなかったら、こんな長々と移動なんて出来ませんよ。

イチャコラとデート気分だから通えるってモノです。

今日も今日とてみんなでぷらぷら。
毎日々々通る道を変えてみて、色んなお店をのぞいたり、色んなお菓子をためしたり。

ん～！しあわせ～！！

チート美少女汀は、こんな帰り道も大好きです。
キティが、千雨ちゃんが、茶々丸ちゃんがいてくれるから大好きです。

帰宅すれば別荘で好きなだけごろごろ出来るからこその、徒歩通学ですけどね。
じゃなかったら、誰に何言われてもパッパと転移します。
うん、転移すごく便利、転移。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なんだいきなり？何か買い物でもあったか？」
ゆっくりと街を見て、遊んだ帰り道。
時刻は既に夕暮れ時をすぎています。
１１月の太陽は早足で西空へと身を沈め、既に街並みには灯りが。
空から見下ろしたのなら、それは素敵な光景でしょうね。
ワタシ達が歩く林道は、そりゃあもう真っ暗ですけど。

「いや、ほら、このあいだ通販した本がもう届いてるハズなんだよ。コンビニ受け取りだからさ、忘れてた」

でもワタシ達って夜目とか関係ないので、全然よゆー。
星明かりすらない、塗り潰したような暗闇の中でも、神経衰弱だって出来ちゃいます。

いや、しないと思うけど。

「戻りますか？」

キティと手を繋ぎ、千雨ちゃん茶々丸ちゃんと肩を並べて、我が家へと歩きます。
普段とおんなじ帰り道、でも二度と来るコトのない今日という日の帰り道。

素敵で大切な時間です。
ふふーふ、しあわせ。

「ここまで来たんだ、明日にしろ。今日のデザートには時間がかかると言っていただろう？」

お、そうそう今夜はちょっと新しいデザートが出てくるんですって。
たのしみー。

「あ～…いいのか？」

ん？
キティを手を繋いだまま一緒に、はてな？

「「かわいっ…！？」」

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんからナニかが溢れそうですけど、うん、よくあるよくある。
ふふーふ、かわいいのはそっちもだよー。

あ、ワタシは本とか頼んでないですよ。

「……おい、聞こえるか？千雨？」

キティも普通のご機嫌ですし、こんな従者ちゃんにも馴れたモノですね。

おこりんぼしてるトキのキティなら、がー！っとしますけどね。

てかキティも、ちょっとほっぺたあかいぞー。

「えっ！？あ、あぁ悪い、ついその…」

もう、しかたないなぁ。

照れ屋さんだらけなんですから。

ふふーふ、ラブー。

「わかってる、わかってるから私の話を聞け。なあ、なぜ私に確認する？お前の本なんだろ」

うんうん、そうですよね。

促すのならともかく、後回しにしろと命じたキティに何を確認するんでしょ？

「あぁえっと、うん。じゃなくて、ほら、一緒にエヴァのゲーム頼んだじゃねぇか」

あー、なるほど。

言ってましたね、たしか。

「『魔界戦争～魔女の追憶～』か！？明日じゃないのか！？」

旧世界のある一般人が、作り話として、かの大分裂戦争を知ったとか。
そしてそれをもとに作ったゲーム、と一部の魔法使いが噂するアレですね。

残念?ながらココに出てくる魔女は、ワタシのコトではありませんよ。
主人公達を助け、見守る良い魔女らしいです。

ワタシ大分裂戦争はスルーしましたし。

「いや言ったじゃねぇか、通販限定で早く届くって」

キティはその設定を面白がって、設定資料付き限定版を予約しました。
設定資料読んで、笑ってやるんだって。

もー、悪趣味な楽しみ方ですよ。
でもその気持ちちょっとわかるかも。

きっと魔法使い達に売れるんじゃないでしょうか?
あ、でも魔女の件がダメかなぁ?

「行くぞ!すぐ行くぞ!!ほらぼさっとするなよ汀!!」

……かなり期待していたみたいですね。

そういえば、ネットで頻繁にＰＶとかチェックしてたかも。

「あ、マスター、お待ちください。今日中に別のゲームをクリアす

るのではありませんでしたか？」

キティの麻帆良での趣味はゲームです。

ワタシをないがしろには全然しないけれど、暇を見つけたり、ワタシを近くに呼んだりしてピコピコやっています。

あと、みんなで一緒にやったりも結構しますね。

ふふーふ、仲良し一家ですからね。

「……しまった。明日の発売に合わせて、今日中に終えるつもりでいたんだ」

「今日中って、別荘でででしょ？」

別荘でなら２４倍の猶予があります。

明日も学園があるけれど、帰宅してすぐ別荘に入れば１３日分くらい稼げますね。

「あぁ、あと少しやれば終わるからな。ほら、汀が主人公の名前つけたヤツだ」

アレですね、宇宙とか超科学とかのＲＰＧ。

千雨ちゃんと一緒にやり込んでましたよね。

「“ピコの従者ムロ”とか無茶な名前のヤツな。ラスボとか従者にやられるってあんまりだろ。つか“ピコ”どこいったんだよ。中盤のシリアス展開とかも会話文メチャクチャだったじゃねぇか」

えー。

千雨ちゃんだって最初はウケてたじゃん。

「冴え渡ったネーミングセンスだったと思う」

“勇者ぴょん従者むろふし”もよかったんですが、文字数制限に引っ掛かってしまいました。

画期的、2人組主人公!?

「どこがだよ!?」

だってキティが好きにしろって言ったもん。

普通のかっこいい名前じゃつまんないんだもん。

「ちぇー、次はもっといいの考えるから見てろー。…んで、キティ。そーゆーコトなら先に帰って、すぐ別荘でやっててていいよ。千雨ちゃんとワタシとで買って帰って来るからさ。うん、ちょぴりデートだ。で、茶々丸ちゃんはキティのお世話お願いできる?」

ここしばらく千雨ちゃんと2人で出かけてなかったですし、ちょぴりラッキーです。

あ、おみやげ買って帰りますね。

「む……仕方無い、そうするか。さしてはかからん、あまり遅くなるなよ」

うん、りょかー。

普通に行って帰ってくれれば、十分ですよね。

でもちょっとはデートっぽくしますよ?

「イエス、マイロード。お任せください」

うんうん、素敵従者茶々丸ちゃんに頼めば、キティもゲームに集中できます。

…あれ？なんか一般的にはダメ発言？

や、うん長生きに趣味って大事ですしね。
ワタシも別荘に農園こさえてますし。

…ほぼ人形任せだけど。

「千雨ちゃんもいい？」

千雨ちゃんに手を差し出しながら確認です。
うん、２人で歩くならコレですね。

「ああ。私は自分の分もあるしな、全然オッケーだ」

ふふーふ、きゅっ。
もちろん恋人繋ぎー。
千雨ちゃんラブー。

「ん、じゃ行こっか。行ってくるねー」

「行ってくる、家のコト頼んだ」

立ち止まって見送ってくれるキティと茶々丸ちゃんに手を振ります。

「ああ、すまんな」

「いってらっしゃいませ」

ではでは、千雨ちゃんと突発デートですね。

しゅっぱつー！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「よし、茶々丸急いで帰るぞ」

「はいマスター。帰宅後すぐに別荘へ向かわれますか？」

「あぁ。お前は家事があるなら、それをしていてもいいぞ」

「いえ、おそばに」

「そうか。しかし、宅配が直接届かないのは少し不便だな」

「ですが仕方ありません。マイロードの結界は、わたし達以外の全てを排除対象に設定しているとのコトですし」

「それでいて、自然物関係はそのままだからな。…茶々丸、お前この結界、解析なり介入なり出来るか？」

「不可能です」

「…私もだ、結界は適性があまり無いしな」

「「さすが私（わたし）の汀だな（マイロードです）」」

第２８話　宅配便は届かない　その１（後書き）

第２８話でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

２分割の日常回前編。

後編は千雨ちゃんイチャコラですよ。
エヴァが登場していると、どうしてもエヴァ優先になっちゃいます。
ヒロイン同士の絡みって難しいです。

汀達はそれぞれに趣味を持っています。
そしてそれを半共有して楽しんでいます。
エヴァはゲームですね。
ＴＶゲーム以外にも将棋囲碁みたいのも好きです。
この辺は原作と同じ感じで。
ただ、相手はもっぱら家族です。
近衛とは一回もやってません。

感想枠にて質問をいただきました。
とうとう来ましたね。
“イチャコラってなに？”です。

ｇｒａｎｄ病原としては“スキンシップ過多なイチャイチャ＋コメディー要素”だと思っています。
略語とか合体語とかではないです。
音でなんとなく理解してください。
ね、寛容におねがいします、ね。

あとR的な描写についてですね。

これは～…もし不快でしたらご一報ください。
小説トップにあります通りのつもりで書いていますが、感じ方は読み手次第ですもんね。
おねがいします。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

第２９話　宅配便は届かない　その２＊

日の落ちた街を千雨ちゃんと歩きます。
腕を組み指を絡めて、抱きつくように。

１１月にもなればときおり木枯らしも吹いてきて、季節の移ろいを感じさせます。
でもまだまだ魔法に頼るほど寒くないかな。

麻帆良の街は日が落ちたとて、まだまだにぎやかです。
ワタシ達のように学生服もちらほら。

お店も全然やっていますよ。
学園都市じゃねーのかよ…ってくらい、あっちこっちで商売っけ丸出しです。

てか麻帆良って深夜帯でも開いてるお店多いんです。
飲食店とかコンビニとか。
アミューズメント系とかゲームセンターも開いてるトコあるみたいですよ。

学園のほうも大学くらいになると、朝まで活動しているトコ結構多いですし。

中心街のほうは夜も眠らないようですね。

「あっ！見て千雨ちゃん、あの帽子かわいくない！？かぶりに行こ

うよー」

チート美少女汀ちゃんにとっては、普通に便利な街です。
一般的な品物は買って済ませればいいし、遊び場も沢山あるしね。
夜デートもしやすい！！

あと、麻帆良の魔法使い連中にとっても便利な街みたいですよ？
深夜帯まで一般人が活動しているなら、そのエリアの警備は最小限でいいらしいので。
あえて深夜活動を規制せずにいて、魔法の秘匿を盾に襲撃地点を絞ってるようです。

前にどこぞの迂濶な魔法使いが念話してました。

うーん…
襲撃側が本気でいるなら、むしろその辺を基点に作戦行動すると思いますけどね。
実際この１５年間でも何度かありましたし。

千雨ちゃんの件もそうですよね。

ま、ワタシ達には関係ないか。
夜デートって言っても夕食くらいで、深夜帯には別荘にいるのが普

通ですし。

ワタシ達が面倒な事件に巻き込まれないのなら、好きにしたらいんじゃない？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…しまった！？おい汀違うだろ、受け取りだよ受け取り」

へ？

なんで急にそのコトを？

もちろん後で取りに行きますよ？

「え？うん、わかってるよ？待ってね、すぐ選ぶから」

そんなコトよりコレですよ。

本日のオススメって3種類もあるし。

えー、どーしよー。

「いやいや……そうか、帽子か。汀があの帽子かぶって、私が色違いススメて…そっからデートになっちまったのか」

ムース…かな。
オレンジムースケーキ…色もキレイだし、コレにしましょう。

あ、てか、千雨ちゃんいま聞き捨てならないコトを言ったなー。

「“デートになっちまった”なんて酷いよ千雨ちゃん。千雨ちゃんだって色違いブラ買ったじゃん。…うん、オレンジムースのセットにきーめた」

うんうん、甘いのはベツバラです、ベツバラ。
だから、おうちで晩ごはんが待ってるけど、きっと大丈夫！
おいしかったらキティと茶々丸ちゃんにも買ってってあげよー。

「あぁ、いや悪い。汀とデートすんのが嫌なんじゃねぇって。受け取りスッカリ忘れてた自分に呆れたってか、そーゆーヤツだ」

それって、デートがそれだけ楽しかったってコトですよね！
てれり、千雨ちゃんらぶー。

「ふふーふ、ならゆるーす。ワタシと一緒なのが楽しくて受け取り忘れるなんて、千雨ちゃんてばかわいーぞー。そんなかわいい千雨ちゃんは決まってるの？」

出来たらコーヒー飲んでるかっこいいトコ見たいなぁ。
あ、でもでもカップルドリンクとか……は、ないみたいです、ちぇー。

「いや、いいのか？こんなトコでケーキとか食ってて。まだ注文してねぇし、店出れるだろ？」

うーん…
でもキティにはワタシ達がデートしてるって言ったよ？
多分ゲーム終わってたら、呼ぶんじゃないかな？

「んー、連絡は来てないでしよ？ならもう少しゆっくりでもいんじゃない？」

とりあえず、ワタシには念話が来ていません。
まだゲーム中なんじゃないかなぁ？

ちなみにワタシのケータイは千雨ちゃんが持っています。
てか、ワタシと千雨ちゃんで1つ。
キティも茶々丸ちゃんとで1つ。

ワタシ達にはあんまり必要ないですからね。
一応、程度に所持してます。

「っと、あぁ確かにケータイにも来てないな。じゃあ平気か？」

やっぱりね。
まぁワタシ達はめったに電話なんかしないですけど。

念話のほうがよっぽど便利ですからね。

「うん、平気だよ。ほら千雨ちゃん、選んで選んで。ワタシはこのオレンジムースのにするから、千雨ちゃん別のにしようよ。で、食べさせ合うのね」

カップルドリンクなくたってイチャコラ出来ますよー。
ふふーふ、らぶー。

「うえ…ここでか…。まぁわかった、汀がそう言うならやってやる。これでいいのか？」

梨のタルトですね。
千雨ちゃんてば何も言わなくたって、ワタシが好きなの選んでくれちゃいます。

んー！
千雨ちゃんかっこいいぞ！

らぶー。

「ふふーふ、ありがとう千雨ちゃん。大好きだよっ！」

自然と笑顔になっちゃいます。
やさしくてかっこいい千雨ちゃんが大好きだからです。
テーブル席で向かい合ったまま、千雨ちゃんへ手をのばします。

「……っ。…あぁ、私もだ汀。ほら」

きゅっと、千雨ちゃんが手をとってくれます。
本当は人前で照れくさいハズなのに、真っ赤になりながらも笑ってくれる。

うん、デートだもん、こうでなくっちゃ。
にぎにぎ、ぎゅー。

「ねぇ、不親切だよね。隣り合って座れる席がよかったよ。そしたらもっとぎゅー出来たのに」

身体ごとぎゅーして、もっと近くで見つめ合えたのに。
耳元で大好きって囁けたのに。

そしたらもっと真っ赤な千雨ちゃんが見れたのにな。

「でも向かい合わせならお互いに食べさせやすいだろ。それに外だとやっぱ恥ずかしいし…。他人に見せるもんじゃねぇよ…」

そっかそうですね。
向かい合ってお互いにフォークを相手へと運ぶのって素敵。

普段、家では寄り添ってあーんとか、もういっそ口移しとか珍しくないですもんね。
たまにはこんなのも悪くないです。

「ふふーふ、照れ屋な千雨ちゃんらぶー。じゃあじゃあ大好きって気持ちいっぱいこめて、あーんするからね」

てか思い返せば、家だとワタシってされるばっかりでした。
千雨ちゃんもけっこうワタシの世話好きですし。

誰かが始めると、みんなしてお世話してくれるんですよね。
ふふーふ、しあわせです。

「〜〜っ！！…ってか、こうして2人で出掛けんの久しぶりだよなっ！うん！なんつーかアレだ、言ったらデートっぽい気がしてきたっ」

えー、さっきまでのお買い物も十分デートっぽかったけどなー。
あ、でも確かにワタシの選ぶあいだは従者っぽかったかもです。
イチャコラって言うより、かなり真剣に似合うの探してたかも。

「ふふーふ、千雨ちゃん露骨だよ？しかたないなぁ。でもワタシはデートのつもりだからゆるしませーん。ココからはちゃんとおねがいね。まずはあーんだー」

大好きな千雨ちゃんとお出かけなんですから、たとえおつかいでもデートです、もちろん。
千雨ちゃんだって心はきっとそう感じてくれてました。
だって、とっても楽しそうだったから。

でも今回はおつかいがあったから、従者の自覚が先立ったみたいです。
受け取り忘れるくらい夢中だったのに、どこか従者モードでいたみたい。

ふふーふ、それはそれで愛ですね。
らぶー。

「わ、わかってる、やるって。じゃあ注文するからな」

照れ屋な千雨ちゃん、ごめんね。
せっかくのデートだから、大好きの気持ちを抑えたくないんです。
ワタシには他人なんかあんまり気になりません。
もちろん限度もわきまえていますけれど、他人はやっぱり他人だから。

ぎゅーしてるの見られるくらいなら平気なんです。
ちゅーとかなら結界敷きますけど。

でも今は向かい合ったまま食べさせ合おうね。
千雨ちゃんの真っ赤な笑顔見たいから。

口移しするトキとかわらないくらい、いっぱいの大好きで、ね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…んふぁ…ちゅっ…千雨っ…ちゃん？…」

「…んちゅぶっ…はっ…ちゅっ…」

「…あんっ…ふふっ…お店出るなり急にどうしたの？…うむっ…」

「…ちゅる…汀…ちゅっ…ちゅっ…」

「…ちゅぷ…なーに?食べさせっこそんっ、うんっ…そんなによかったぁ…?」

「…悪い…んちゅっ、ちゅっ…なんかデートだって思って汀見てたら…あむっ…久しぶりだし…ちゅー…」

「…ちゅぷ…んっ…しょーがないなぁ、急にひっぱりこむからびっくりしたぞー…ちゅっ…」

「…ちゃぴっ…ちゅっ、ちゅに…好きだ汀、愛してる…ちゅう…」

「…ちゅっむ…くちゅ…ワタシも愛してるよ…ちゅー…でも路地裏で抑えつけられて、あんっ…ふふ、くすぐったい…」

「…結界は?…ちゅっ…ずぢゅっ…」

「…ずぢゅっ、ちゅっちゅっ…敷いたよー…ちゅっ…てかべろちゅーしながら聞くなー…ぺちゅ…」

「…んっ…、悪い、なんか抑えらんなかった。愛してる、汀。…んっ…」

「…んっ…ぷはっ。ふふーふ、千雨ちゃん、ワタシも愛してるよ。でもどしたの？急に肉食系？」

「わかんねぇ、なんか急に…怒ったか？」

「ぜんぜん…んっ…、ね？でも、コレ以上はだめ」

「あぁ、わかってる……なぁ、もうすこし抱き締めてていいか？」

「うん、好きなだけいーよ。千雨ちゃんが落ちついたら帰ろうね」

「ん……。なぁ汀？」

「わかってます。今日は千雨ちゃんのお部屋で寝るよ。キティはゲームあるから多分へーき」

「あぁ…ならすぐ帰るか…」

「とか言いつつぎゅーしてるよー。ふふーふ、千雨ちゃんだーいすき」

「……んっ…あんま言うなよ、おちつかねぇ…んっ、ちゅっ…」

「…ちゅっ…ふふーふ…ちゅっむ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「よし！！コンプリートだ！！」

「おめでとうございます、マスター。どうぞお茶です」

「あぁすまんな。…ずずっ。茶々丸、汀はどうしてる」

「マイロードはまだお帰りではありません」

「む…そうか、気を使わせ……はっ！！」

「マスター？」

「汀め、千雨とデートして楽しんでるな！？」

「なるほど、確かに少し時間がたっていますね。……羨ましいです」

「くっ…そう言えば、見送ったトキ宣言してたか…」

「ええ、そのトキも羨ましく思いました」

「聞いてないわっ！！…くそっ！仕方ない、私が遣わせたんだ仕方がない…がっ！」

「はい、ですがそろそろお帰りいただきませんと。別荘外も夕食のお時間ですし。……いえ決して妬みからではなく」

「お前本音ボロボロ出てるからな…。だがその通りだ。茶々丸、汀達を呼べ」

「え…わたしですか？デートの邪魔はさすがに…」

「私にさせる気か！？それでも従者かっ！？」

「…イエス、マスター」

「微妙に嫌そうにするなっ！！」

第２９話　宅配便は届かない　その２＊（後書き）

第２９話でした。
こんばんわ、ｇｒａｎｄ病原です。
今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

千雨イチャコラ回でした。

ちなみにこの後急いで帰った２人は、受け取りをすっかり忘れました。
帰宅直前に気付いて、結局転移で往復。
幸いエヴァにはバレず、多少嫉妬されつつ無事ゲームを届けましたとさ。
そして、夜はもちろんイチャコラ全開でした。

今回も感想をいただきました。
ありがとうございます！！

第２８話の最後をほめていただきました。
うれしいです！！
うれしくって、今回、予定にはなかった最後の１幕、エヴァ茶々丸の掛け合いを書きました。
ついつい調子にのっちゃいました。
てへり。

ではｇｒａｎｄ病原でした
おやすみなさい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3685y/

汀とあの娘のイチャコラ物語

2011年12月7日00時54分発行